

新大陸におけるヨーロッパ中近世の兄弟団定着の文化比較

ースペイン、グアテマラ、エルサルバドルの聖週間儀礼調査から

桜井 三枝子

目次

序章

第一節 「兄弟会」・「信徒会」に関する研究動向	2
第二節 兄弟会の活動	3
第三節 兄弟会の起源と類型	4
第四節 兄弟会活動の意義	5

第一章 中米地域の征服

第一節 マヤ地域	7
第二節 「地球の山分け」	8
第三節 中米の征服	10

第二章 中米地域の布教

第一節 植民都市の建設とグアテマラ総監領における宣教	15
第二節 グアテマラ総監領における宣教	17

第三章 スペイン、バジャドリー市の聖週間儀礼

第一節 中近世イベリア半島の兄弟会	32
第二節 マイノリティ兄弟会	37
第三節 サンティアゴ・デ・コンポステラ	39
第四節 スペイン、旧都バジャドリー市の聖週間儀礼報告	40
第五節 儀礼の過程	45

第四章 中米グアテマラ国ソロラ県、マヤ先住民・

サンティアゴ・アティトラン村の聖週間儀礼

第一節 グアテマラの政治的・社会的背景	53
第二節 サンティアゴ・アティトラン村概観	57
第三節 儀礼の過程	65

第五章	中米エル・サルバドル、サンタ・アナ県	
	チャルチュアパ市の聖週間儀礼	84
	第一節 エルサルバドルの先住民に関する概略	85
	第二節 チャルチュアパ市に関する概観	90
	第三節 使徒サンティアゴ教会の活動組織	94
	第四節 聖週間儀礼の過程	98
終章	まとめと考察	115
参考文献		122

序 章

南北アメリカ大陸地峡部に位置する中米五か国（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ）の調査・研究は、アステカ帝国やインカ帝国のそれらに比較すると少ない。1990年代、故大井邦明教授（京都外国語大学・考古学）調査団が、グアテマラ市内のカミナルフユ遺跡、続けて隣国エルサルバドルのサンタ・アナ県チャルチュアバ遺跡の発掘を開始された。筆者は民族学調査者としてこれらのプロジェクトに参加する機会をいただいた。報告書は日本語と西語で刊行されプロジェクトは終了した。その後マヤ地域の歴史・民族学に関する調査研究を東北大学・吉田栄人准教授を代表として文部省科学研究費助成により調査継続が可能となり、報告書が刊行された。勤務大学からの研究助成金により民族学調査を継続し結果を発表した¹。退職後は京都大学大学院人間・環境学研究科（後期）への入学を許され、研究の継続が可能となった。研究テーマは一貫して聖週間（復活祭）儀礼とし、新たにスペインが加わり三地点となった。

本稿では、かつて東のエルサレム巡礼から発した巡礼熱が、中近世になるとスペイン西北部に位置するサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂巡礼路へと移行し、その巡礼者庇護のために発生した施療院・cofradía(兄弟会)の存在に着目した。なお、研究題目にあげた「兄弟会定着の文化比較」であるが、マルク・ブロック著『比較史の方法』の観点、あるいは比較文化史的考察という意味ではなく「儀礼文化の比較」という観点である。

さて、作業をすすめていく過程で以下の疑問点が生じた。

- ① 現代では、スペインでも中米でも兄弟会が聖週間（復活祭）儀礼の主催者として活動するが、それ以前ではどのような役割を果たしていたのであろうか。
- ② 兄弟会は過去において何故、先住民村落レベルで爆発的に受容され、その数を増やしたのであろうか。
- ③ 旧大陸からもたらされた疫病は免疫の無い先住民人口をほぼ十分の一にまで減少させた。疫病蔓延と兄弟会は何らかの関係があるのだろうか。

以上の問題意識をもとに、まず、16世紀、スペインによる中米の征服と布教について述べる（第一章、第二章）。次に第三章から第五章まで、聖週間儀礼をテーマに民族学調査を以下の三地域、スペイン（1994年）、グアテマラ（1991年～2019年）、エルサルバドル（1998～99年）で実施し、記録報告に関してはスペインを除き既刊した。調査時期は1990年～21世紀初頭が主体であるが、それは、たばこと塩の博物館 JT プロジェクト、それに続く文部省科学研究費の助成などにより実地調査の機会を得たからであり、報告書も刊行された。ところが、1994年のスペインのバジャドリド市の聖週間儀礼調査は単独・私費で実施したこともあり、未発表のまま今日にいたるまで時間を経た。

フィールド調査の対象とした三地点を、本論では以下の順に報告していくものとした。即ち、スペインのバジャドリド市（第三章）、中米グアテマラ国の西部高地に位置する先住

民村落サンティアゴ・アティトラン村（第四章）、そして隣国エルサルバドルの混血の街チャルチュアパ市である（第五章）。

調査当初から意図的に、民族的集団としてのスペイン（白人）、マヤ先住民村落、そしてチャルチュアパ住民（混血）の三エスニック集団を選択し対象としたのではないが、結果としてそうになっていた。また、調査時期を聖週間（移動祝日）に限定したのは、当時大学教員として在職しており、春季休暇であれば海外調査が可能であったからだ。

本論では、スペイン調査報告を加えることで、刊行済の報告書二点に新たな研究動向や視点を照射することが可能ではないかと考えた。

第一節 「兄弟会」・「信徒会」に関する研究動向

まず、兄弟会に関する研究動向について以下、簡単に記しておきたい。スペインの兄弟会に関しては、スペイン史における社会的救済措置を記述した Antonio Rumeu de Almas 著の *Hisotria de la Previsión Social en España* (1981) には、ローマ時代に発祥した社会的救済措置が概略され、スペイン史の中世から 18 世紀に至るまでの、コフラディア、グレミオ（ギルド）、兄弟会、互助会に関して記述されており貴重だ²。

次に、ヌエバ・エスパニャ（現メキシコ）時代の兄弟会に関する研究は比較的新しく、Clara Garcia Ayuardo と Antonio Rubial Garcia 共著 *Iglesia y Religión: La Nueva España* が出版された（2018 年）³。研究動向に関しては、筆者のラテンアメリカ研究大会・口頭発表（2023 年）に際し、コメンテーター役を務めた川田玲子氏が以下のように簡潔に紹介している。上掲書第 12 章「信徒会と修道会に関する研究動向」において、「コフラディア研究一覧」の項に研究者数などの紹介がある。研究者数 53 名、論考と著書を合わせると 74 点となる。年代順にその内訳をあげると以下となる。

50 年代に 1 点、60 年代に 2 点、70 年代に 2 点、80 年代に 10 点、そして 90 年代に 12 点である。21 世紀にはいると 47 点と増えている。これらが総てとは言えないが、当テーマの特徴として川田は以下を紹介した。

- 1) 時代は 16～18 世紀を対象とする。
- 2) コフラディア全体史として記述され、ヨーロッパにおけるコフラディア設立の記述が含まれる。
- 3) ヌエバ・エスパニャ（メキシコ）におけるコフラディア形成の過程。
- 4) 種類、地域／人種／階級／職種別、さらに個別地域、先住民、スペイン人、修道士、上流階級、銀細工師、仕立て屋など多岐にわたる。

同著には第一次史料の紹介と当テーマに関する考察が紹介されており、貴重である。ただし、筆者がテーマとする中米のコフラディアに関しては扱われていない。

一方、日本国内では、河原温の論考「信心・慈愛・社会的絆—中・近世ヨーロッパにお

ける兄弟団（コンフラタイティ）の機能と役割をめぐって」が『地中海研究所紀要』（早稲田大学）4号、2006年に既刊され、末尾に文献目録が紹介されており研究者にとっては貴重な指針を示した。しかし、ラテンアメリカの事例紹介は無い。数年後、川原温・池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』が出版された⁴。同書で、河原が「総説 信心・慈愛・社会的絆」と題して解説し、以下、第一章 イタリア（米田潔弘）、第二章 フランス（池上俊一・坂野正則）、第三章 ドイツ・スイス（長谷川恵・鍵和田賢）、第四章 ネーデルランド（河原温）、第五章 イギリス（佐々井真知・唐澤達之）、第六章 スペイン（関哲之）、そして第七章 地中海から日本へ（川村信三）などが記述されている。これにより、ほぼ西欧社会と日本における兄弟会に関する網羅的な紹介書が誕生した。しかし、ラテンアメリカに関する言及は無い。本稿では河原論考の総説と関哲行論考「スペイン」を主に参照し引用している。

第二節 兄弟会の活動

ヨーロッパにおいて12C～13Cにかけて俗人キリスト教信徒を中心に運営される「自発的な信心の団体」が設立され、それらは、congraternita, fraternitas（ラテン語）、congregazione, compagnia, confrerie, confrada, bruderschaft, broederschap, confraternitum, fraternity, guild（俗語）と呼ばれ、日本語では兄弟会、兄弟団、信心会、宗教ギルトなどの総称として呼ばれてきた。

兄弟会は、共通の守護聖人への帰依を媒介とする絆により、会員相互が結ばれる自発的・宗教的団体である。会員は死に備え永続的生への期待を現世における「慈愛」と「典礼」における儀礼的行為を通じて追求した。また、構成員は血縁的關係によらず共通規約を基に人的絆を結び、それにより形成された擬制的家族としての性格を備え、多様な職種や身分の者を含んでいた。兄弟会には垂直的信仰の絆と、水平的・社会的絆という二重の性格が体现されており、職能集団としての同職組合（ギルド・ツunft）と並び、ヨーロッパ中近世の都市生活における市民の霊的・物質的側面において多様な貢献をした⁵。

河原は兄弟会活動の本質以下四点の視覚に基づき論を進めている。

- ① 篤信(pietas)をめぐる典礼的・儀礼的活動が、都市内部の人間関係（パトロネージ）や都市共同体の文脈において果たした役割。
- ② 中近世ヨーロッパ人の俗人集団（市民）が個人レベルでキリスト教を受容し、日常生活に取り込んだ、慈愛 caritas という観念の重要性。例として救貧活動の時代的変容と地域的差違に注目した。
- ③ 社会的絆（友愛）という観点から身分制社会の中近世ヨーロッパ社会における水平的な社会的紐帯としての兄弟会の会員相互の関係、都市共同体と兄弟会相互の関わり、君主や教会との垂直的関係から析出される支配と統制の関係に着目する。
- ④ 近世以降の兄弟会の変容と再編の特質に注目し、トレント公会議（1545－63）を画

期とする近世カトリック教会の改革とプロテスタンティズムによる兄弟会廃止、統合、再生の動き、宗派的対処をめぐる中世以来の伝統的兄弟会のエートスの敬称と変質、主権国家体制の形成による、国家と教会、都市と教会（司教）による地域社会の統合と統制における兄弟会のあり方の変容などを捉えようとする視覚⁶。

しかし、上記四点の視覚がヨーロッパの兄弟会研究にのみ対応するのかどうか、中米の街や村落レベルにもその視覚から論を進められるかはわからない。

第三節 兄弟会の起源と類型

続けて兄弟会の起源に関して、河原から以下の二説を引用する。

- ① 故ゲルマン人の共同宴会行事の流れをくむギルドの伝統。
- ② 中世初期の修道院や教会諸組織と結びついて霊的救済や徳を求めた中世初期の聖職者や俗人貴族たちの祈りの団体（祈祷盟約軍団体）の形成。

両者の混じり合う複合的過程を通じて、仲間同士の祈祷による死者の記憶の永続化のために、約9世紀から12世紀の間に次第に形成された団体であろう。すなわち血縁関係を超えた会員相互の義務により結びつけられ、儀礼により統合される枠組みの中で福祉と安全を促進しようとする団体であろう。その活動の最盛期は14世紀から16世紀前半にかけてであり、都市や農村で様々なタイプの兄弟会が生まれた。ギルドと異なり社会状況により変化する組織的不安定性や活動の断続生を示す団体であった。また、同一人物が同時に複数の兄弟会に加入しえたことなどが特徴であり、ユダヤ人、モリスコ、黒人など多様なエスニシティから構成されたイベリア半島では、各自の規約も異なっている⁷。

俗人兄弟会の7類型

フランスを担当した池上はヨーロッパ各地の俗人兄弟会類型形成における重要モチーフとして、以下の7点を挙げている。すなわち、a. 聖人崇敬、b. 愛徳 *caritas* と慈悲 *misericordia*、c. 悔悛 *penitence*、d. 平和維持、e. 地縁的絆、f. 職業的・世代的絆、g. 名士クラブ・社交儀礼的モチーフなどの7点である。本研究地域スペインとの関わりの深い a, b, c について以下に記す。

- a 聖人崇敬： 信心実践型兄弟会の代表的存在はマリア兄弟会で、貧者への喜捨を主動とし、特にフィレンツェでは托鉢修道会のドミニコ会のもとで発展した。また、11世紀以降、聖地巡礼熱が高まり、**12世紀にはガリシアのサンティアゴ・デ・コンポステラへの聖ヤコブ信仰が広まった**。13世紀から「聖ヤコブ巡礼」兄弟会は、ヨーロッパ各地で生まれ、15世紀後半にその数は頂点に達した。多くの都市で巡礼のための救護所 *hospital* がドミニコ会と密接な関係のもとに運営された。巡礼の発展はカンタベリーやフェズレー、ル・ピュイ、ロカマドゥールなどへの巡礼地を形成し、教会建設運動を促進し、巡礼道や橋の整備、巡礼者のための宿泊施設（救護所）の建設の目的のために、兄弟会を生み出す原動力となった⁸。

- b. 愛徳 *caritas* と慈悲 *misericordia*: イタリア、フランス、スペイン、ポルトガルでは、中世後期以降、貧困化が申告となり大規模な救貧活動が実践された。イタリアとスペインではミゼルコルディア兄弟会、ビッグロ兄弟会などが救貧や囚人の慰問などに特化した慈善活動をした。
- c. 悔悛 *penitence*: 中世後期のイタリアやスペインでは、自身の罪の悔悛と浄化を希求し、鞭打ちの苦行を中心とした活動が托鉢修道会の影響下で盛んとなった。これは14世紀半ばの黒死病（ペスト）の流行以降に隆盛を極め、イタリアやスペインで根付いた。この兄弟会の特徴は、ミサや市中における行列において、身体や顔を白や黒の布で覆い、各人の無名生と会員相互の平等性を標榜した。それはドミニコ会などの托鉢修道会が奨励した禁欲の表現であったとされる。

以上をふまえたうえで、本稿第三章において、スペイン、バジャドリ市（バジャドリ）の聖週間儀礼の事例（1994年調査）を報告したい。

第四節 兄弟会活動の意義

兄弟会は都市の祝祭や兄弟会の守護聖人のための祭壇就職や絵画、礼拝堂付司祭や音楽家などの雇用のパトロナージュ活動に多大な貢献をした。河原（2014年）は兄弟会活動の意義として、第一に兄弟会が都市の祝祭や兄弟会の守護聖人のための祭壇装飾や絵画、礼拝堂付き司祭や音楽家の雇用などのパトロナージュ活動に多大な貢献をしたと解説した⁹。彼はB・ウィッシュを挙げて、視覚文化 *visual culture* における兄弟会の役割を総括し、15・16世紀イタリア都市の兄弟会とその会員による絵画、教会彫刻、礼拝堂建築と装飾衣装、ミサ典書などの発注と維持などが信心と結びつくと、そのパトロナージュ活動の重要性を論じている。すなわち、兄弟会が近世ヨーロッパにおける視覚的、篤信的文化のエージェントとして新たな図像的、審美的指標 *aesthetic criteria* を導入したと¹⁰。本稿第三章に報告するバジャドリ市の聖週間儀礼の山車（パソ）に乗る彫刻作品は、著名な彫刻者ファン・フニによるものであり、見事な美術的表現がされている。

さらに、河原によれば、都市共同体における社会的紐帯としての兄弟会に関しては、以下の四テーマを挙げている。1. 都市空間と地縁的性格 2. 祝祭と遊興 3. 都市の守護聖人との結びつき 4. 都市・教会・兄弟会である¹¹。

河原は中世に成立した兄弟会が、16世紀の宗教改革のもとでカトリック対プロテスタントという宗派的差異を超えて、近世ヨーロッパの国家と地域社会（民衆）を媒介とする重要な中間団体の一つとして機能した。とりわけ都市内でも身分、社会階層、ジェンダーを越えた人的絆（ソッシビリテ）を実現する組織として変化をとげつつ、その役割を果たしたと述べている。また、グアテマラの歴史家フラビオ・ロハス・リマ（Flavio Rojas Lima）は自国キチェ・マヤ語圏 San Pedro Jocopilas の兄弟会について *La Cofradia, Reducto Cultural Indigena* で、コフラディアの歴史的起源、中世の兄弟

会、16世紀のスペイン、そしてアメリカ大陸の兄弟会を報告している¹²。

兄弟会の概念は16世紀以降、スペイン、ポルトガルの新大陸進出を契機にして、特にイエズス会の宣教活動を通じて中南米や東南アジアなど世界各地に広がった。スペイン都市バジャドリ市、エルサルバドルの街チャルチュアパ市、グアテマラの先住民マヤ村落という人口規模も歴史的背景もエスニック集団も異なる三地点におい「聖週間」儀礼をテーマに民族学的視点にたつフィールド調査した。いわば、共時的視点にたつ儀礼の象徴性、神話との関連をテーマに民族学的調査を行い、その結果を報告をしてきた。本稿では、通時的視点から、スペインによる中米の征服（第一章）と宣教のプロセス（第二章）で報告する。第三章以下はスペイン、マヤ村落、混血の街における兄弟団調査の報告をし、若干の考察を最終章で試みたい。スペインでは単独私費調査をしたが（1994年）、中米二地点では、故大井邦明教授（考古学）の発掘プロジェクトの一環として、その後は文部科学省研究費の助成により実施できた。謝意を各章末に述べていくものとした。

-
- 1 桜井三枝子「サンティアゴ・アティトラン村聖週間儀礼に関する民族学調査報告」『グアテマラ中部・南部における民俗学調査報告書 1991~1994』pp.239-393. たばこと塩の博物館、1997年。
 - 2 Rumeu de Almas, Antonio, *Historia de la Previsión Social en España*, Ediciones “EL ALBIR”, S.A., Barcelona, 1981.
 - 3 Garcia Ayluardo, Clara y Antonio Rubial Garcia, *Iglesia y Religión: La Nueva España*, Fondo de Cultura Económica, Ciudad de México, 2018.
 - 4 河原温「信心・慈愛・社会的絆—中・近世ヨーロッパにおける兄弟団（コンフラタイティ）の機能と役割をめぐって」『地中海研究所紀要』（早稲田大学）4号、2006年、pp. 67-77. 河原温・池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』東京大学出版会、2014年。
 - 5 河原温「総説 信心、慈愛、社会的絆」河原温・池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』東京大学出版会、2014年、pp.1-3.
 - 6 上掲書、pp. 3-4.
 - 7 上掲書、pp. 2-3.
 - 8 上掲書、pp. 2-3, 5-6.
 - 9 上掲書、pp.12-13.
 - 10 上掲書、p.13.
 - 11 上掲書、pp.15-18.
 - 12 上掲書、p.22.

Rojas Lima, Flavio, *La Cofradía*, Reducto Cultural Indígena, Litografías MODERNAS, 1988, Guatemala.

第一章 中米の征服

第一節 マヤ地域

スペイン人によるマヤ地域の征服について語る前に、20世紀を代表するマヤ考古学者トンプソンに依拠して、まず、マヤ地域図を示し地理的背景を述べておきたい。

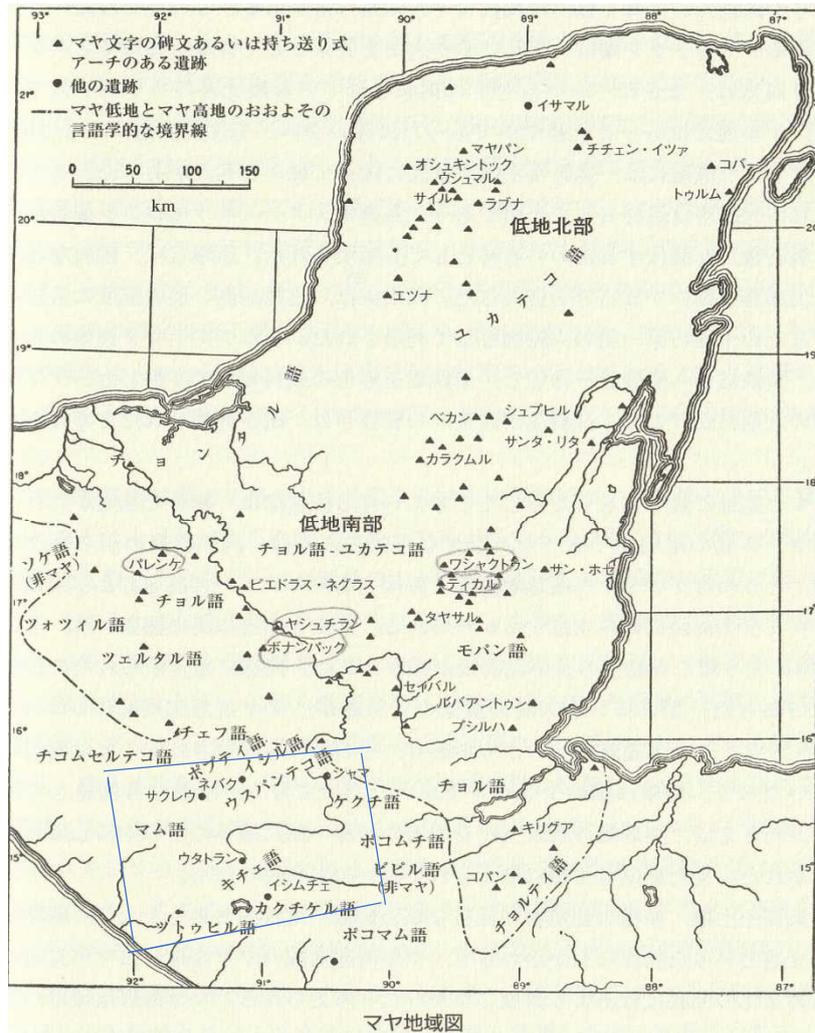


図1. 「マヤ地域図」 出典：『マヤ文明の興亡』トンプソン p. 35.

マヤ地域はマヤ北部地域（マヤ低地北部）、マヤ中部地域（マヤ低地南部とチアパス高地）、そしてマヤ南部地域（マヤ高地と太平洋岸低地）に分けられる。本稿では、マヤ南部地域、すなわち、グアテマラ高地と隣接するエルサルバドル地域がその地理的背景となる。高い火山峰がそびえ周囲は山で囲われた盆地や台地に町が広がっている。温帯気候の動植物が繁殖している。火山起源の土壌は肥沃で適度な降雨量と温度を呈している。北の太平洋岸部の

山腹ではコーヒー栽培が、高地では小麦やジャガイモが栽培され、低地では、サトウキビやバナナの大プランテーションが広がる¹。

これらの作物の多くは輸出用で、先コロンブス期のマヤの主要作物はトウモロコシ、マメ類、カボチャやサツマイモである。特に先コロンブス期では、太平洋岸低地ではカカオ豆が貴重な交易として栽培され、共通の貨幣として扱われていた²。

第二節 「地球の山分け」

大航海時代初期の二強、ポルトガルとカスティーリヤ（スペイン）は1494年6月7日、トルデシーラス条約を締結した。合田は分界の取り決めには留意すべき二点があると指摘している。ひとつは、当条約が二国間条約にすぎないという点。大航海時代初期において国際法的な権威を有していたのは、教皇勅書しかない。分界はポルトガルとカスティーリヤがそれぞれに獲得した教皇勅書を法的根拠として互いに認め合いながら、教皇勅書の一部内容すなわち分界線の位置を二国間条約により修正したものであると述べている。二点目として、分界の解釈がある時期から大きく変化したことを指摘した。すなわち、トルデシーラス条約の文面から見る限り、分界線は大西洋に引かれているだけで、それが地球の反対側におよぶという合意はないと³。また、合田は「JAXA 宇宙大航海時代検討委員会」の一員として報告会に参画するなかで、大航海時代と「宇宙大航海時代」との間に二つの類似点があることに気づかされた。ひとつは国家事業と私的事業が並立しているという点だと指摘する。宇宙開発は第二次大戦後、アメリカとソ連による国家の威信をかけた事業として展開されたものの冷戦終結後は民営化の流れが生まれた。15世紀初頭のポルトガルは国家命運をかけてモロッコのセウタ遠征で大航海時代を先駆けたが、大西洋アフリカへの航海事業では国内外の「民活」に依存した。スペインでもコロンブスの航海は国家事業であったが、コルテスやピサロらコンキスタドーレスたちは手弁当で一族郎党を率いて海を渡った⁴。

P. 152. 大航海時代の経済的裏付けとしては、ポルトガルの対外進出は奴隷貿易など私的事業で利益があがるまでおよそ30年かかり、ましてや金・香料など国家財政を潤すにはさらに30年の歳月を要した。

経済外的要因のメンタリティーを知るための史資料として、宣教師や海外領総督クラスであれば、イエズス会や国王に報告義務があり記録は残る。しかし、現場の指揮官クラスの軍人に関しては、その行動から心性を推測する方法をとらざるを得ないとし (Pp. 152-153.)、以下のように続ける。12世紀、レコンキスタが西方十字軍として認められ、テンプル騎士団修道会、ホスピタル騎士修道会など国際的騎士団がイベリア半島に導入され、レオン・カスティーリヤ系のカラトバ・サンティアゴ・アルカンタラの三騎士修道会がイベリア半島で版図を拡大した⁵。

J・シャーマンによれば初期のコンキスタドールは兵士ですらなく、親族集団から募集され、大半は新式軍隊の特徴である軍事訓練や教練を受けていなかった。将校はおらず、した

がって正式な指揮系統は存在しなかったのである⁶。

ところで、本稿第四章のサンティアゴ・アティトラン村調査以前に、筆者はソロラ県カクチケル・マヤ語住民のコンセプション村における聖週間儀礼を調査した。この村は植民地時代にはサンティアゴ・デ・グアテマラ（現アンティグア市）から北のチアパス地方を經由してヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）へ通じる旧街道筋に位置し、県庁所在地ソロラ市に繋ぐ重要な位置にあった。当村の教会建築に関しては、グアテマラ史研究者 Luis Lujan Muñoz 博士により「ソロラ県コンセプション村の教会建築」と題する報告がある⁷。注目させられたのは、「ムデハル様式の教会屋根の下弦材に全6個の模様があり、ハプスブルク王朝の紋章・双頭の鷲と金羊毛騎士団の紋章が見られる（下図2, 3）」という説明である。何故、金羊毛騎士団の紋章がこのような山間僻地の教会に見られるのか。

当教会は文化財保護法の対象となり、1976年の調査報告によると、「教会建設地・その周辺には先スペイン期のマウンドと彫刻遺物の存在が明らかにされた」とある。スペインは征服した地域の祭祀センターを破壊し、同地点に破壊した資材でカトリック教会を先住民の労働により建築した。



図2 ソロラ県コンセプション村の教会内部



図3 双頭の鷲、金羊毛騎士団の紋章

結論を先に述べると、このことは、スペインによる精神的征服が過去の信仰から決別したとは言えない現状を語る。いわば、地下には祖先が信仰した祭祀センターが眠ったまま永久保存され、その上に新しい形の信仰が被せられ現在にいたるまで継続している。これが後述するように問題となる。16世紀のスペインによる征服は、先住民の過去の歴史や信仰から根本的な決別させえなかった。長く深い歴史的時間軸において、一時的に分断させられたにせよ、それは変容され、継続し、現在にいたると私は考える。

話をスペインの征服事業に戻そう。大航海時代におけるイベリア半島独自の三騎士修道

会カラトバ・サンティアゴ・アルカンタラは、カスティリヤとポルトガルに領土を広く所有した。スペイン王カルロス一世のために大航海をなしたマゼランはスペインに移った段階でサンティアゴ騎士修道会の受領騎士となりアジア西回り航路を拓く遠征隊の総司令になった。合田によれば、大航海時代は近代劈頭を飾る時代と位置付けられるが、十字軍の遺物ともいえる騎士修道会が重用されたことで、大航海時代のメンタリティーは中世の延長にあるものと捉えるべきであろうと⁸。

第三節 中米の征服

さて、アステカ帝国の征服者コルテスは征服直後から「南の海」への進出を構想し、カルロス一世宛て第三書簡（1522年5月15日、コヨアカン）において「金・真珠・香料が豊富な諸島」を発見すべく四人の部下を派遣したと述べ、南の海の踏査を継続し、大西洋につながる海峡を探索するようにと国王令を受けていた⁹。「中米・カリブ諸国の政治」細野昭雄・遅野井茂雄・田中高編『中米・カリブディアス・デル・カスティールヨ』『メキシコ征服記 三』第164章によれば、偉容を誇るメキシコ市をはじめとする各地への入植が一段落したころ、グアテマラ地方には多くの人間の住む堅固な町や金が採れる場所があるという情報をもたらされた。コルテスは部下のペドロ・デ・アルバラードを征服と植民のために派遣することにした。この遠征に対してアルバラードには、300人超の兵力（銃士と弩兵で120人）と騎兵135騎が同行し、大砲4門と十分な量の火薬も渡された。さらに援軍としてトラスカラ兵とチョルーラ兵を合わせて200人以上とメキシコ兵100人がつけられた。

一行は1523年12月13日にメキシコ市を発ち南下し、ソコヌスコ、サポティラン、そしてキチュ・マヤ王国の王城ケツァルテナンゴの町を目指した。ところが、王城に近づく前にウタランの町が戦場となり、激しい一戦を交え、敵は退却と見せかけてアルバラード軍をおびき寄せ、皆殺しにするなどの作戦にでた。しかし、アルバラード軍は2度に及ぶ奮戦を続け、全軍を率いて平地に出た。平地でこそ、人馬一体の姿に驚愕する敵兵に対して、騎兵は縦横に走り廻り、これが勝利の一戦となった。新大陸には旧大陸の馬が存在せず、平地を戦場とする限り少数部隊であれ、騎兵の戦力は十分に発揮された。これを知った町の首長たちは使者を遣わし恭順の意を告げた。しかし、アティトラン湖畔の岩山にこもる部族（本稿・第4章のツトゥヒル・マヤ語族）は敵意をむき出しにした。アルバラード軍は岩山を占領し、アティトランの町に入ると、すでに人々は逃げ出しており、カカオ畑が目に入るだけであった。その後、アルバラードのもとに、南の海岸部に住むピピール人が訪れイスクインテペケの町民に関する苦情を訴えた。これにこたえて、アルバラードは騎兵・銃士・弩兵を含む大軍と大勢のグアテマラ兵の援軍を率いて攻撃し、そして、ここでも平定したが、激戦で彼は足に重症を負ったといわれている。この平定された地が現エルサルバドル地方であり、本稿第5章のチャルチュアパ市の位置するところだ¹⁰。

1524年にグアテマラを征服したペドロ・デ・アルバラードという人物に関しては、『コル

『テス報告書簡』の第二書簡に、以下のように記されている。彼は 1485 年バダホスに生まれ、1510 年にインディアスに渡り、サント・ドミンゴで 8 年を過ごしてから、1518 年にグリハルバの遠征に、翌年コルテス隊に加わり、テミスティタンの虐殺まで副司令官を務めた。勇敢だが向こう見ずな性格といわれ、金髪のため、インディオからトナティウ（太陽）と呼ばれたという¹¹。中米におけるスペイン軍遠征で明らかなようにペドロは男系兄弟のホルやゴンサロらに支えられて征服事業を進めたが、アステカ帝国に反意を抱いていたメシカやトラスカラ地方の先住民が兵站を担い激戦を支援した。また、トラスカラ首長が娘・姉妹をペドロ兄弟と娶せ、強力な支援態勢を固めたことも看過できない¹²。歴史書に先住民トラスカラ人の加勢があったと記されるが、ペドロ兄弟がトラスカラ（族）首長の娘姉妹を娶ったことを示す書は余りない。ペドロはトラスカラのシコテンカトゥル姫を伴い、姫は従軍先でレオノール（姫）を出産する。そしてレオノール姫は長じてスペイン人フランシスコ・デ・ラ・クエバと婚姻関係を持つ。さらに、このフランシスコ・デ・ラ・クエバは、ペドロのスペイン人正妻ベアトリスの従弟にあたる（下図参照）。このような人間関係から、征服時代初期においてはスペイン人が少数であり、限定された人間関係のもとに婚姻関係が形成されたと考えられる。一方、トラスカラ人従軍兵から見れば、族長の姫を先導に、スペイン人を「利用」しグアテマラ・マヤ諸王国の征服が可能であると期待したとも考えられる。実際、征服後、トラスカラをはじめアルバラード軍に加勢したメキシコ先住民兵はグアテマラ征服後に土地を授与され免税という地位を得ている。しかし、数世代を経ると先住民・征服者であった彼らも他の被征服者グアテマラ先住民の地位に落ちていく（後述）。

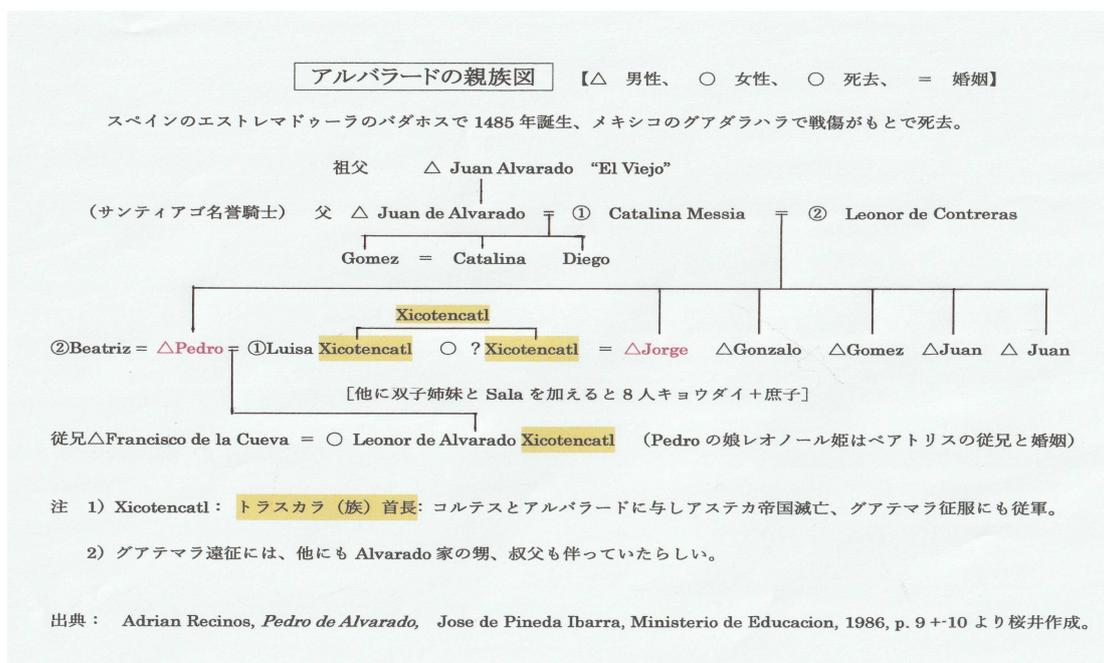


図 4. *Pedro de Alvarado*, Adrian Recinos, CENALTEX, 1986, pp.8-10. より筆者作成。

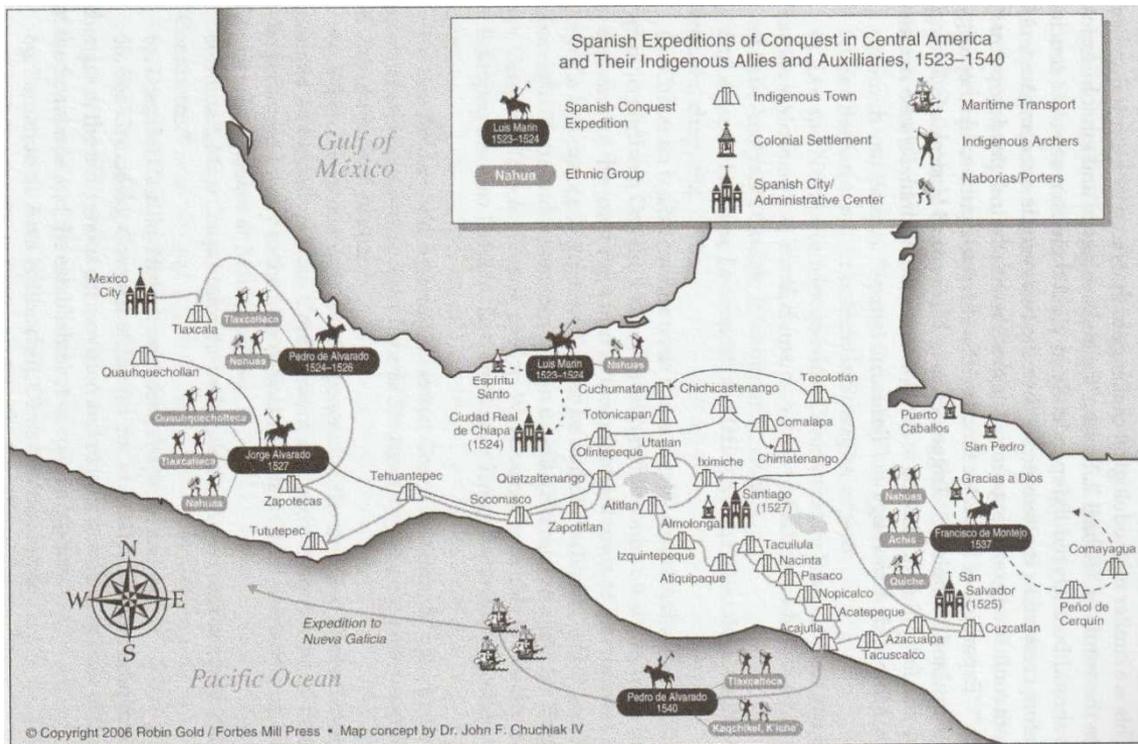


図5. 「中米におけるスペイン軍遠征」ペドロとホルヘ兄弟による遠征。

出所： *Indian Conquistadors*, by Laura E. Matthew and Michel R. Oudijk, p. 64, 2012.

アルバラード一族が現在のメキシコからグアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスに至る広範囲において征服したその原動力は「金」への執着と欲望にあった。1960年代に「世界史」の講義を受講した筆者は、コンキスタドールが数少ない部隊で、敵対する先住民大部隊を制圧したのは、西洋の戦闘能力、武器、弾薬が優れていたからだと教えられてきた。しかし、かすかな疑問が残り、そのまま時間が過ぎた。長い研究上の空白時間を経た後に、研究世界に戻り最初に手にしたのが、Laura E. Matthew 著 *Memories of Conquest* (2003) 2012 であった。同書「第3章 先住民征服者： 中米征服と植民」には、約二万人のトラスカラ軍がアルバラードの中米征服に従軍状況が描かれた布を示している。征服部隊には多くの女性親族も加わった。このことにより、トラスカラ人は征服後にスペイン諸都市の建設に大きな役割を果たし、その功績により課税を免れたとも記されている。L. Matthew は画布 *Lienzo de Quauhquechollan* (「クアウケチョラン画布」) 征服図を示し、さらにスペイン政府文化庁 (Archivo General de Indias) が征服戦争に兵站や輜重を担って加勢した功績により「メキシコ、トラスカラ、サポテカのインディオとその配偶者を免税とする」という文書を示し記述している。

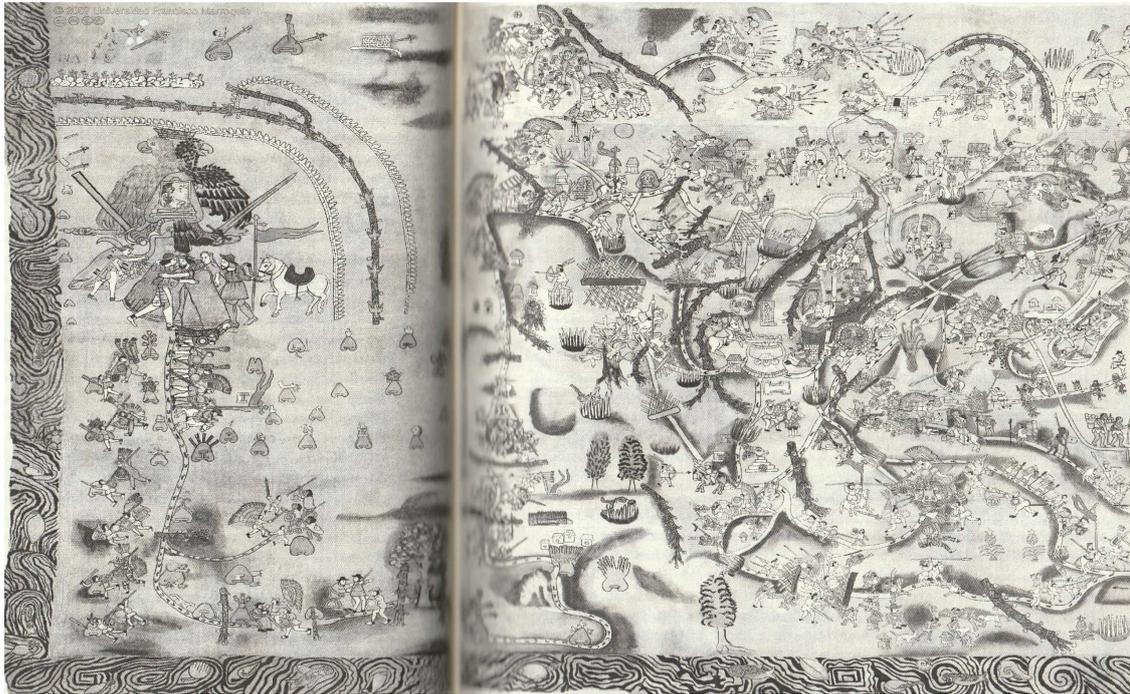


図6. *Lienzo de Quauquechollan* (クアウケチョラン画布) 征服図

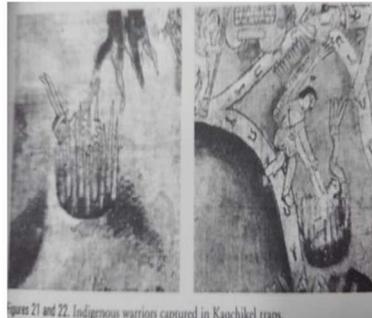
出所: Laura E. Matthew, *Memories of Conquest*, pp.74-75, 2012 (2003)



Figure 20. Quauquecholteca conquistadors (left) in battle with rebellious Kaqchikel warriors (right) at Pochuala, Guatemala. The fortifications on the road indicate the religious status of the Kaqchikel.



Evelia Torres Servin,
 "Conquistadores Tlaxcaltecas en Guatemala durante el siglo XVI," en *Recorriendo el lindero trazandola frontera, (coordinados)* Tsubasa Okoshi, Julien Machault, A.S. Tepoxtecatl, UNAM, 2018, pp.91-109.



Figures 21 and 22. Indigenous warriors captured in Kaqchikel traps.



白黒写真・上下: Florine Asselbergs, *Conquered Conquistadors* University Press of Colorado, 2004, Chap.5; p.162 カラー写真: Lienzo de Quauquechollanから、2022/05/28.

カクチケル・マヤは巨大な落とし穴に先端の尖った柱を設置し、スペイン軍騎馬士を陥落させた。

7

図7. 上図・左(白黒)、中央(カラー)、右(カラー)は、図6の一部を拡大して表示している。

また、Matthew Restall はスペイン征服軍がなぜ血眼になって貴金属の獲得に奔走したのか、以下のように端的に説明する。貴金属は傷む心配が無く分配可能で、場所をとらないと。メシーカでも、クスコでもスペイン征服軍は戦利品の金・銀製品を溶かしインゴットに作り替えてスペインへと持ち帰った¹²。

-
- 1 出典：『マヤ文明の興亡』 トンプソン p. 35。同上書、34 頁。
 - 2 同上書、34 頁。
 - 3 合田昌史「地球を山分けする・・・「世界分割」の夢」『宇宙大航海時代』、誠文堂新光社、2022 年、128-129 頁。
 - 4 合田昌史、同上書、152 頁。
 - 5 合田昌史、同上書、172 頁。
 - 6 シャーマン、ジェイソン・C『〈弱者〉の帝国』中央公論社、2021 年、61 頁。
 - 7 Luján Muñoz, Luis, *El Conjunto Artístico de la Iglesia de Concepción, Sololá en Informe de las Investigaciones Etnológicas en el Centro y Sur de Guatemala, 1991-1994*. Museo de Tabaco y Sal, 1997, pp.439-447.
 - 8 合田昌史、同上書、p. 172-175。
 - 9 合田昌史、『マゼラン』京都大学学術出版会、2006 年、p. 202.
 - 10 del・Castillo, Diaz, ディアス・デル・カステイリョ『メキシコ征服記三』第 164 章から抜粋引用)。大航海時代叢書エクストラ・シリーズV、pp. 83-93.
 - 11 Fuentes y Guzman, *La Recordacion Florida*, Tomo II. 第 3 章から第 9 章までアティトラン地域の征服と司法権、往時のツトゥヒル王家、スペイン軍来襲までのキチェ対ツトゥヒル戦などの記載がある。彼は、上掲書 10.のデル・カステイリョの末裔で、先スペイン期のツトゥヒル王国と他のマヤ王国の関係史について記述している。マヤ研究者大家として著名な Eric S. Thompson 編集の *Thomas Gage's Travels in the New World* は、英国のカトリック修道僧 T. Gage が 17 世紀前半にメキシコ・中米旅行記として注目させられる。大越翼著「マヤ人から見たスペインによる征服と植民地支配」『岩波講座 世界史 14 南北アメリカ大陸 ～17 世紀』には、従来の征服者側の視点と異なり、被征服者の視点から記述され、貴重な示唆を与える。本章では、大越教授が国立メキシコ自治大学で教鞭をとられた際の受講生 Evelia Torres Servin の論考（図 7）を提供していただき感謝している。
Antonio de Remesal 著 *Historia General de las Indias Occidentales y Particular de la Gobernacion de Chiapa y Guatemalano* I, II. には冒頭からチアパスとグアテマラ地方の征服記が、P.Carmero Saaenz de Santa Maria, S.J.により解説がされているが、本稿研究の主題は兄弟会であることから、グアテマラの征服に関しては別稿を思案している。
Laura E. Matthew, *Memories of Conquest*, The University of North Carolina Press (2003) 2012, pp.70-71.
 - 12 Restall, Mathew, *Seven Myths of the Spanish Conquest*, Oxford University Press, 2003, pp.22-23.

第二章 中米地域の布教

第一節 植民都市の建設

スペインでは国家統一原理が発展するに従い、民族的使命感や国家目標が自覚された。対イスラム教徒戦を通じて形成された使命感は、新大陸の軍事的征服に伴いキリスト教布教活動に発揮された。政治的権力と軍事的権威の融合関係はイベリア半島におけるキリスト教勢力の伸長につれて辺境地域を統治する必要から生じた。この関係が新大陸における辺境総督 (adelantado)、総監 (capitán general)、総督 (gobernador) などの任務に反映され、メキシコのアステカ帝国征服者コルテスの部下のペドロ・デ・アルバラード (Pedro de Albarado) がアデランタードに就いた。植民地行政制度が推進され、スペインではセビリアの通商院 (Casa de Contratación) が航海、移民、貿易を規制する法律と勅命の適用を担当し、カルロス五世が設置した新大陸諮問会議 (Consejo de Indias) が植民地統治の最高機関として統治し、立法、財政、軍事、教会、貿易、司法などの領域に及んだ。

教皇アレクサンドル 6 世から、カトリック両王は宣教義務を果たす限り、新たに征服した土地の領有を正当化できるという論理を得た。いわゆるパトロナト・レアル (Patronato Real) 「王権教会保護制」である。スペイン国王の裁量のもとに、司教区の設立や改変、教会堂や修道院建設、および教会への十分の一税の徴税などが教会に委ねられ、教会はスペイン国王を「インディアスの絶対的支配者」と是認した。イサベル女王の聴罪師シスネロス (F. G. de Cisneros) 枢機卿は、因習派フランシスコ修道会士の布教に厳しい態度をとり、1520 年代になると他の托鉢修道会においても宣教への信念が醸成された。エラスムスやトマス・モアらのキリスト教的人文主義は宣教師を介してアメリカ大陸に応用され、フランシスコ会士は既にモンゴルやシナで布教を経験していたこともあり、同会士ファン・デ・スマラガが初代メキシコ市司教に就任した(1528 年)。インディアス在住の修道士は 16 世紀末に約 5000 人、17 世紀後半には一万人に達し、その分布は北のアリゾナ、コロラド、テキサスから南のアマゾン流域やチリ南部に達した。教皇庁との約束で修道士の活動費用は渡航費を含め王権が負担した。

現代の中米五カ国 (グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ) を包含するグアテマラ総監領時代においては (図 1)、托鉢修道会のドミニコ会、フランシスコ会、メルセ会の三修道会が宣教を進めた¹⁾。ヌエバ・エスパーニャへのイエズス会の布教(1572 年)は、先行修道会の布教地と重ならないように、メキシコ中西部と北部辺境地帯、カリフォルニア半島へ広がり、都市部と辺境地帯を同時に宣教地とした。一方、グアテマラ総監領では主都サンティアゴ市においてクリオーリョ子弟を対象に学院を創立した²⁾。

征服とは都市化を意味し、革新的な建築技法により都市中央に方形の広場があり、これに面して教会と政庁が建設され、広場を基点として規則的に交差する格子状の道路が広がる計画都市が建設された。村落や集落も都市建設の手法に倣ったのである³⁾。

やがて、都市はクリオーリョの生れ育つ場となり、征服・移住者の子孫は 1580~1630 年の 50 年間で約 3 倍となった。布教や徴税に都合の良い集住化政策 (reducción) が先住民対象に勧められたが、旧大陸から持ち込まれた疫病などにより先住民人口は激減していった。メキシコ市やリマ市のような主要

都市に大司教区(arzobispado) が設置され、大司教(arzobispo)は周辺司教区・司教(obispo)を統括し、司教区司祭は王権統治の徹底と徴税の役を担った⁴。

グアテマラの征服者アルバラードは兄弟や従兄弟たちを従えて進軍し、グアテマラ総督として君臨した。グアテマラ最初の首都としてシウダ・ビエハが建設されたが(1527年)、アグア火山の噴火により崩壊した(1541年)。首都 Santiago de los Caballeros (以下サンティアゴ市) は建設後(1543年)、数回の大地震(1590, 1717, 1751年)に見舞われた。リマ市やメキシコ市に並び称されるほど壮麗な都市であった当市はさらに 1773年のサンタ・マルタの大地震により壊滅的打撃を受けた。そして、現主都グアテマラ市が建設され遷都となった(1776年)。旧都は現在アンティグア市と称され、歴史的建造物が多く残っている(写真1, 写真2)。



写真1 アンティグア市の大聖堂
(写真1, 2共に1997年、筆者撮影)



写真2 アンティグア市、植民地時代の総督府

スペインのレコンキスタ達成、国土統一、そして宗教的統一の延長線上にアメリカ大陸の都市では、征服者、王室官吏、聖職者がスペインの優位性を誇り、スペイン語を浸透させた。聖職者はユートピアを新大陸に実現しようと先住民言語を習得し説教を行い、前スペイン期の先住民祭祀遺跡を破壊し、その上にカトリック教会を先住民労働のもとに建設した。精神的征服である。

では、グアテマラ総監領時代にいかにして「精神的征服」が行われていったのか。キリスト教布教の過程に注目すれば、宣教の主体者に注目せざるをえない。カトリック聖職者には修道会士と在俗司祭の別がある。修道士の宣教活動は説教と洗礼である。受洗者はキリスト教徒として日常生活を送り、死を迎える日まで司祭の霊的指導を要する。教会法によりこうした司牧を受持するのは、修道会とは別組織の教区司祭と呼ばれる聖職者であり、彼らは司教の監督下に位置する。司教は司教区内の主要都市を任地として在住し、これは王権教会保護制に基づいて定められていた⁵。メキシコ市やリマ市のような主要都市の司教は、大司教で周辺司教区の司教を統括した。修道会に属さない在俗司祭(clero secular)は世俗(セクルム)の教区教会の司祭館に居住し、入植したスペイン人を対象に聖務を担当した⁶。アメリカ大陸において、修道会宣教士は修道会会則レグラル(regural)に従い、概して先住民を対象に辺境の地へ布教村を設営した。

本稿では国王の施策の変更を明確にするために、在俗司祭を**セクラル**、修道会司祭を**レグラル**という語におき換えて進めていくことにしたい。

グアテマラ総監領時代の首都の正式名称は前述 **Santiago de los Caballeros** である。当市以外にも、征服当初に建設された都市には十二使徒の聖ヤコブ即ち、サンティアゴ信仰が浸透し、街や地区の守護聖人にサンティアゴを祀る例が多い。イエスは使徒サンティアゴの激しい気性を雷に例えたが、雷と火縄銃の類似ゆえであろうか、イベリア半島南部でスペイン人がモーロ人・グラナダ王国を陥落し終了するに至り、使徒サンティアゴは異教徒征服における守護神あるいは軍神とみなされるようになった。その延長線上に新大陸征服があった。『新大陸自然文化史』の著者ホセ・デ・アコスタは「白馬に乗って剣を手にし、エスパニヤ人のために戦うひとりの騎士を、空の上に見た」と記し、使徒サンティアゴが新大陸で尊敬を受けていると述べる。



写真 3 騎馬上の聖ヤコブ

一説には、先住民は初めて見る馬に超自然的な力と価値を認め、賞賛をよせたからとも言われている⁷。グアテマラ国内 3 市 **Santiago Atitlán**, **Santiago Sacatepeques**, **Santiago Chimaltenango**、その他 12 市でも、聖ヤコブは地域の守護聖人とされている⁸。第 2 章では、1. グアテマラ総監領時代の宣教、2. グアテマラ総監領時代の教会組織、3. ブルボン期のレグラルとセクラルの対立という順に述べていきたい。

先住民村落が凝集居住する西部高地にはレグラルが布教する例が多く、一方、スペイン人、クリオーリョ、混血が多く住む東部平地にはセクラルが聖務を担当し、両者間には葛藤があったという。筆者は主にグアテマラ中西部高地サンティアゴ・アティトランのツツヒル・マヤ地域における祝祭儀礼とコフラディア組織を民族学的視点から調査研究してきた⁹。

Santiago Atitlán、筆者撮影 東部地域は西部高地に比べると先住民人口が少なく、スペイン人入植者と混血人口の多住地域であり、牧畜や輸出用作物の生産地である。東北部に位置するチキムラ県のエスキプラス市はグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル 3 カ国の国境に位置し、見事な石彫で有名なマヤ・コパン遺跡に近く、「エスキプラスの黒いキリスト」像を祀るカトリック寺院があり、中米周辺から多くの巡礼者を集めている。

第二節 グアテマラ総監領における宣教

スペインからの独立以前、現・中米五か国（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ）はグアテマラ総監領の中米 5 州であった。19 世紀、グアテマラ総監領は独立して中米連合国となり、1823 年 7 月 1 日に完全な独立宣言をした。この独立宣言は心底独立を願う愛国主義者の起草によったことから、グアテマラでは公式には 1821 年 9 月 15 日を独立年月日としているが、1823 年を重視していると述べる¹⁰。現代から 16 世紀のグアテマラ総監領時代の宣教について、以下に概説したい。

カトリック王フェルナンドは、教会に対する権限を合法化し保障するために、教皇アレクサンドル六世から教皇大勅書(1501 年, 1508 年)、パトロナト・レアル(Patronato Real) すなわち「王権教会保護制」という法的権利を得て教会を支配した。この特権には、国王が植民地の聖職者を任命し、その赴任先や俸

給および権力範囲などを決定するという基本的権力に加え、教会の権力と収益を監督し、教皇大勅書を拒否する権限さえも含まれていた。王権は教会の要職候補者を指名し、教皇がそれを任命したが、パトロナト・レアルの手続きは形式的なものに変わった。聖職者は王の権威に服し、行政階級を構成し、教会組織は植民地行政の支柱となった。パトロナト・レアルには国家による教会支配があったが、同時に教会も国事や政治に干渉をする事が認められており、その例として征服者アルバラードの死後、サンティアゴ市の初代司教マロキン(図1)がアルバラードの姻戚と共にプレシデンテという政治的高位職に就いたことが挙げられる¹¹。



図 1. 独立前・グアテマラ総監領時代の行政区分 (1785-1821)

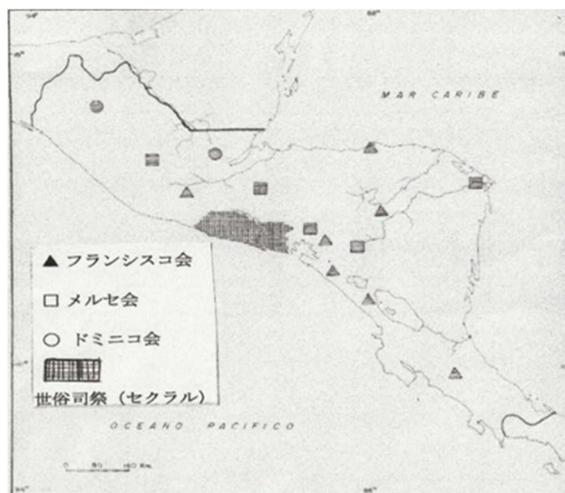


図 2. グアテマラ総監領地域のカトリック布教三修道会とセクラルの布教地の分布図

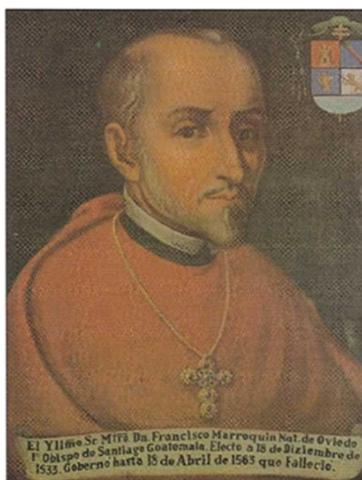


図 3. 初代グアテマラ司教、フランシスコ・マロキン

宣教の時代区分

藤田はカトリック布教初期を大きく二分する。第一期、1523年にフランシスコ会がメキシコに到着してから16世紀半ばまで。第二期、1555年の第一回メキシコ司教会議の開催以降に教会方針が明確な形をとり始めた時期である。本稿では第三期として教会設置がほぼ完了し、聖職者のクリオーリョ化が進んだ時期を以下、Añoveros と Jones をもとに追加報告する¹²。

① 第一期征服期 (1519-1560年)、1555年に第一回メキシコ司教会議が開催され、教会は先住民青年を対象にキリスト教化と西欧化を進め、先住民自身の手によりキリスト教化と西欧化を進めるという理想を描いた。メキシコの初代司教フワン・デ・スマラガやミチョアカン司教バスコ・デ・キログはトマス・モアの『ユートピア』に強く影響され、フランシスコ会士ペドロ・デ・ガンテは先住民教化にあたり、教理に加え技芸も教えるサンフランシスコ学院を創設し、石工や大工の職人階級を誕生させた¹³。また、フランシスコ会士 B.サアグンはナワトル語を学び、先住民から伝承、神話、社会構造を聞き取り集めた

膨大なデータに基づいて、『ヌエバエスパーニャ事物総史』を著した。未知の土地へ命がけで宣教する司祭(レグラル)は南北アメリカの植民地領土拡張の代行者であり、伝道区(ミッション)は村落形態をとり、遊牧民的先住民は定住生活様式へ、好戦的先住民は平定され、狩猟採集経済は農業経済へと変貌した。征服者アルバラードと懇意であった F.マロキン神父が初代グアテマラ聖堂司教に就任し(1534年)、グアテマラ司教区は現在のグアテマラとエルサルバドルを範囲とし、ペテン地域はユカタン司教区に組み込まれた。一方、世俗司祭(セクラル)がスペイン人入植者地方のグアテマラ東部やソンソナテおよびサンサルバドルの布教区に着任した(1545年)。

② 第二期・教会制度と精神的統治が強化された時期(1560-1620年)、フェリペ2世統治下の1560年から30年間で最も勢力的に宣教師が派遣された時代であった。1560年代にコスタリカ、1570年代にはホンジュラスとニカラグアでの宣教がほぼ終わり、1610年頃まで布教は拡大した。しかし、第一期の自由闊達な修道会活動は減少し、宣教熱は冷めトーンダウンし、レグラルは後述するように司教の権威に服従させられていくのである。1569年に異端審問所がメキシコ市に設置され、やがて権限乱用と腐敗が顕著な公的機関となった。グアテマラには1550年頃からドミニコ会、1570年にはフランシスコ会が宣教活動に入った¹⁴。

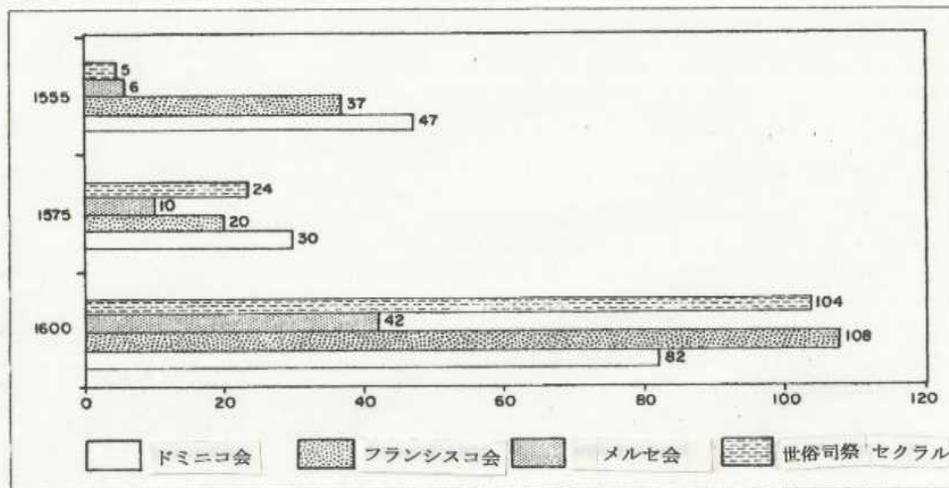
③ 第三期・四修道会による先住民村落布教に関しては以下、Añooveros に依拠し1555年から1600年まで、以下のドミニコ会、フランシスコ会、メルセ会、世俗司祭(セクラル)の先住民村落における布教の推移をみていきたい。1555年、ドミニコ会47人、フランシスコ会37人、メルセ会6人、セクラル5人。1575年、最下位であったセクラルが増加し24人、ドミニコ会30人であったが、1600年には、100名超えがセクラル104人、フランシスコ会108人、ドミニコ会82人、メルセ会42人など、45年前に比較すると、先住民村落への布教者数が倍増している。

④ 第四期(1620-1700年)

この時期、グアテマラ総監領内の教会設置はほぼ完了し、聖職者のクリオーリョ化が進み、レグラルは辺境地に進み兵士と共に壁の厚い要塞のような教会を建設した。植民が完成し教会が設置されると文民統治組織が成立し、レグラルの優先権がセクラルへと移譲された。17世紀のメキシコでは司祭が副王を支え豪華な都市生活に耽溺したり、スペイン帝国の国家機構を支える官僚に就く者もいた。この頃にはスペイン生まれのペニンスラール司祭よりも、植民地生れのクリオーリョ司祭の数が増加し、司教区内におけるセクラルとレグラルの争いや修道会同士の競争と嫉妬などが絡み合い、やがてアメリカ大陸でもイエズス会士が追放される遠因(1767年)となった。

16世紀から17世紀に至る期間、スペインの修道院を出てアメリカ大陸に到着したレグラルは、9,232人であった。グアテマラ総監領における宣教師は43遠征隊で678人、ニカラグアでは13遠征隊で94人、サンサルバドルとソンソナテ地方の布教は遅れた。16・17世紀、フランシスコ会が最大で36遠征隊(602人)、ドミニコ会が26遠征隊(397人)、メルセ会7遠征隊(60人)であった。しかしながら、グアテマラに残ったレグラルは8%と言われている。フランシスコ会はグアテマラ、ニカラグア、ホンジュラス、そしてコスタリカに向かった。ラス・カサス神父が率いるドミニコ会はチアパスとソコヌスコ地方で布教の成果をあげ、さらにサンティアゴ・デ・グアテマラ、サカテペケス、エスキントラ、チマルテナンゴ、ソロラ、ケツアルテナンゴ、スチテペケス地方で活躍した。メルセ会はウエウエテナンゴ、サンマルコス、サンファン・オストゥンカルコ、ニカラグアとホンジュラスにむけて精力的な布教活動を展開した(図2)¹⁵。

表2 先住民村落を布教した修道会（レグラル）と世俗司祭（セクラル） 1555-1600



出所 G. Añoveros, La Iglesia en el Reino de Guatemala, *Historia General de Guatemala*, p.162.

布教方法

小林の「偶像崇拝摘発の狂騒と先住民社会」には、初代メキシコ司教スマラガの異端審問が実施された時期(1536-43年)に、メキシコ中央部で異端崇拝行為の嫌疑で摘発された先住民に関する状況が描写され興味深い。キリスト教という新しい宗教的規範を強制された植民地初期のアメリカ大陸において、先住民社会がどのような変化を経験したかが説明されている。先住民の偶像崇拝摘発という植民者側の思惑、改宗直後の先住民が置かれた不安定な状態、その一方で植民地期当初から布教活動が行われた地域では、雨乞いや長雨防止にカトリック儀礼が行われた事例が挙げられている。例えば、モトリニア神父は長雨が作物に悪影響を与えるのを止めさせるよう願う儀礼にキリスト教方式、すなわち聖母マリアと聖アントニオの聖人像行進を組織したところ、降雨が止んだという事例を解説している。やがて本国の異端審問長官からスマラガ司教に、偶像崇拝の廉で先住民を異端審問にかけ過酷な公開処刑や強制労働、財産を没収するなどの一連の行為に対して、方針の転換を示唆する書簡が届いた。本国では、先住民が強制的な集団改宗状態で、厳しい措置が取られたことに対し、本来の目的が誤解される危険を指摘したのである¹⁶。

このようなスペイン本国の理想や懸念と布教地現状の板挟み状況から、レグラルは先住民布教には、神学理論を論じるよりもカンケ（首長）をまず説得し、先住民の理解を得るには演劇・音楽演奏・絵画を介するほうが効果的であることに気づいた。彼らは天地の創造主にして唯一の神、全人類の救い主たるイエス・キリストの教義を先住民の血なまぐさい神々と対照して布教した。宣教方針として、三日月の上にたつ聖母の絵、アトリビュート挿画入り聖人画を活用した布教は成功した。また、豪華な彫刻祭壇を前にした荘厳なミサ聖餐式は先住民に強い印象を与えた。ドミニコ会士で後にプロテスタントに改宗した英国人トマス・ゲージによる17世紀のヌエバ・エスパーニャとグアテマラ旅行記には、征服期から先住民の置かれた状態や慣習などが記録されており興味深い。宣教師は先住民への布教にあたり、動物アトリビュートを伴った聖人画、例えば、聖ヒエロニムスとライオン、聖アントニオと家畜（ロバ）、聖ドミニ

クスと犬、聖ブラスと豚、聖マルコと牡牛、聖ヨハネと鷺などである¹⁷。一方で、異端審問に関わった司祭兼総監の M. Saenz de Mañozca(在位 1670-1672 年)は動物画入り聖人画の使用を禁止している¹⁸。宣教師は布教の効果をあげるために聖画を活用した。一方、マニョスカ司祭兼総監はそれを禁止した。本論第4章で後述するように、グアテマラのサンティアゴ・アティトラン村のサン・フアンの兄弟団宅の祭主宅祭壇には子羊を抱いた聖フアン像が祀られている。グアテマラ・マヤの人権家 R. メンチュウによれば、マヤの宗教にはナワリスモ信仰があり、人は誕生した日から魂を共有している「仲間の動物、すなわちナワル」を持っていると。よって、カトリック聖人にもナワアルがいると解釈されたと語る¹⁹。

少数の宣教師が広く拡散居住する先住民村落を巡回するのはきわめて困難であったから、キリスト教化と同時にスペイン的生活様式を学ばせるために集住政策（レドゥクシオン）がとられた。表 2 で示すように教区成立は最初にトラスカラ市、メキシコ市、レオン市と続き、4 番目としてグアテマラ市教区が成立した（1534 年）。それ以前には、まだメキシコ市と共にセビリア司教区に属していた²⁰。

表 2 大司教区と教区の成立年（1525-1780 年）

設立順序	大司教区／司教区	設立年	以前の司教区
1	トラスカラ（プエブラ）	1525	
2	メキシコ	1530	セビリア
3	レオン	1531	・・・
4	グアテマラ	1534	セビリア
5	アンテケラ	1535	・・・
6	ミチョアカン	1536	・・・
7	チアパ	1539	グアテマラ
8	トルヒーヨ	1545	グアテマラ
9	ヌエバ・ガリシア	1548	・・・
10	ベラパス	1561	グアテマラ
11	ユカタン	1561	・・・
12	グアディアナ	1620	ヌエバ・ガリシア
13	リナレス	1777	ヌエバ・ガリシア
14	ソノラ	1780	ヌエバ・ガリシア

出所： Table 3 Ecclesiastical Divisions, 1525-1780, in *Handbook of Middle American Indians*, V.12, University of Texas Press, Austin, 1972, p. 27. pp.26-29.

Archdiocese and Dioceses: Ecclesiastical Jurisdiction

先住民への対応

勅命において説教師による先住民鞭打ちが禁じられ(1680 年)、王立裁判にかけることが定められたが、まだ先住民の信仰態度を不満とし体罰を加える司祭がいた。また、司祭は俸給を得ているので、個人的要件で先住民を使役し貢物を強制する行為は禁止されていたが順守しない司祭もいた。俸給だけでは司教区を支えるには十分でなかったからである。16 世紀半ば、レグルルによるインディヘナ虐待がソコヌス

コ、ソンソナテ、サンサルバドル司教区において報告された。聖職者が先住民に商品を高値で売りつける、過度な寄付を要求する、家畜の世話を要求するなどの告発や密告があった。政庁はマロキン司教にこのような司祭を矯正するか追放し、先住民を使用する場合には報酬を支払うように命じた²¹。

宣教師はスペイン語を先住民に教えるよりも、先住民言語を習得する方を優先したが、多数の先住民を対象に信仰の神秘を教えるには困難を極めた。16世紀後半になると、宣教師は着任前に先住民言語を習得することになった。こうして、大学や修道院で先住民言語の学習が始まり、マロキン司教はカクチケル語を習得した。レグラルのほうがセクラルより先住民言語を熱心に習得した。なぜならば、セクラルの説教対象はスペイン人やラディーノ信者であったが、レグラルの説教対象は先住民であったからだ。1570年の王令によりグアテマラのアウディエンシアは先住民に関する報告を求めた。その結果、ラス・カサス神父は『カクチケル年代記』を著した。カクチケル、キチュ、マム、ツトゥヒル、ケクチなど先住民言語で文法書、語彙輯、公共要理(教理問答集)などの手引き書が作成された。宣教師にとって最重要問題は、先住民を洗礼するための信仰教育やキリスト教教義を理解させることであった。先住民言語による説教方法『グアテマラ語(カクチケル語)におけるキリスト教儀(Doctrinas Cristianas en Lengua Guatemalteca)』が1550年代に記された。*Dios*「神」に相当する先住民言語訳に関して、当初はそのまま *Dios* を用いたことから、ドミニコ会とフランシスコ会で激しい論争がなされ、前者は先住民言語の *Cavobil* を主張したが、後にスペイン語の *Dios* に落ち着いた。まだ、信仰教育(カテケシス)は未統一で地域と環境により差異があった。セクラルが居住する主邑では少年少女への教育が日常的になされ、コフラディア(信徒団)への参加活動で信仰教育は円滑に進み、祝祭やノバーナ(9日間の祈祷)、聖行列への参加が定着した。教区司祭が常駐しない村落では先住民のフィスカルが子供を教会に集め祈祷を覚えさせたが、最初の宣教熱は続かず、17世紀の司牧状況は低下した。なお、マヤ神話 *Popol Wuj* はヒメネス神父により編集がされ、スペイン語訳が残された(1714年頃)。これは、林屋永吉により『マヤ神話 ポポル・ブフ』として日本語訳が出版された(1997年)²²。

第三節 教会組織、施療と教育、布教の過程

1 大司教区、司教区、教会管轄区

教会組織の頂点に教皇が座し、大司教区、司教区が配された。メキシコ大司教区のもとにミチョアカン、トラスカラ、アンテケラ、ユカタンなどの司教区が配された。チアパ司教区の下にタバスコが、グアダハララ司教区の下にヌエバ・ガリシア、ヌエバ・ビスカヤ、ヌエボ・レオンが属した。グアテマラ司教区は1546年までメキシコ大司教区に属したが、その後メキシコから独立し、司教座となった(1561年)。一方でトルヒーヨ(ホンジュラス、1545年)とレオン(ニカラグア、1531年)は、グアテマラから離れてメキシコ管区に属すなど変遷があった。立岩によればニカラグアのレオン市は行政の中心地であり、そこに王室財務局が設置され、大聖堂が建設され(1537年)、メルセ修道院が布教を担当した。グアテマラのドミニコ会からレメサル(A. Remesal)が派遣され貴重な記録を残している²³。1745年にグアテマラ司教区は大司教区に格上げされ、初代フィゲロア大司教はエスキプラスのキリスト像で名高い大聖堂を建設した。主邑教区に教会を設け世俗司祭セクラルが駐在し、そこから地方教会に司牧活動を展開し終油の秘蹟を授けたのである。セクラルは教皇→教皇代理・大司教→司教というヒエラルキーに属したが、一方、レグラルは修道院規則に従い集団で生活し、先住民を対象に布教活動を展開し、カトリック布教村

ドクトリナを形成した。パトロナト・リアルには国家による教会支配が含まれたが、同時に教会が国事や政治に干渉することも認めていたから、聖職者が高い政治的地位に就任することもあった。しばしばみられる副王と司祭の抗争には、国家と教会の間に介在する権力争いを反映していた。修道士たちは根気よく先住民の偶像崇拝を破壊し続けたにもかかわらず、16・17世紀に偶像崇拝が再興し、マロキン司教は先住民の祖先崇拝に関し嘆息した²⁴。

2 司教と教区

教皇を頂点に司教、そしてセクラルへと続くヒエラルキー制度があり、国王特権のもとにイスパノアメリカでは司教の任命と教区の整備がされた。インディアス会議により司教候補が選任され、候補者は国王と教皇に謁見し認可されると「教会法」に基づいて公式に赴任となった。こうして、教皇教書が候補者の許に届いて初めて正式な司教となった。国王は教区が空白にならないように常に配慮した。

教区境界の変更や新教区設定には教皇の事前許可が必要であった。16世紀は司教区設立最多の時代であり、大司教区がサント・ドミンゴ、ヌエバ・エスパーニャ、リマ(1546)、サンタフェ・デ・ボゴタ(1564)に、そして司教区32が設置されたが、17世紀には5教区が設置されただけである。教会制度のもとで、セクラルは教区内司祭館に居住し、清貧、禁欲を心掛け、2年毎に先住民村落を巡回することが望まれた。17世紀にセクラルの数が増加した(表2)。1512～1620年の間に24人の司教が選任され、聖職者数はスペイン人134人、クリオーリョ23人であった。グアテマラ司教区は1534年、チアパス司教区は1538年、1630年代にニカラグアとホンジュラス(1631)に設置された²⁵。

ソコヌスコはチアパス司教区に属し、ベラパスは1607年にグアテマラ司教区に統括された(1673)。グアテマラ司教区は現在のグアテマラとエルサルバドル司教区を兼ね、ペテン地域はメリダ司教区に属した。チアパスとグアテマラ両司教区はメキシコ大司教区に属し、ホンジュラスはサント・ドミンゴ大司教区に、ニカラグア教会はリマに属す時期もあったが、後にメキシコ大司教区に属すなど変遷した。グアテマラ総監領時代の教会は辺境地のチアパス、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ地域を包含した。16・17世紀、サンティアゴ市司教区には12人の司祭(レグルル6人、セクラル6人)がおり、その内9人がスペイン人、3人がメキシコ人であった²⁶。

3 司教座聖堂参事会

司教座聖堂参事会は聖堂内のミサを円滑にすすめることを第一義とし、司教や教区政治に助言をした。当参事会と司教との間には悶着が生じることがあった。参事会員にはクリオーリョ司祭が多く占めていた。グアテマラ大聖堂参事会には以下の5職階があり各職階に人員が配置されていた。①大聖堂主任司祭、②助祭長、③聖歌隊リーダー、④神学講座主任、⑤宝物館館長。他に司祭2名が大聖堂付礼拝堂を管理した。総監領時代の経済、社会、政治、文化の面で顕著な司教3人を挙げると、①マロキン初代司教は着任後30年間を政教両面で卓越した業績をあげた(在位期間1534-1563以下同様)。②グアテマラ司教に着任した最初のドミニコ会士のフアン・ラミレス神父は、教区を視察しラス・カサス師の影響のもと先住民側に立ち、エンコミエンダの終焉をスペイン本国に伝えた(1601-1609)。③アウグスティノ会所属のパヨ・デ・リベラ神父(1657-1668)は、宗教者たちの道徳的退廃を嘆き、信仰の刷新を進め、サンペドロ病院を建設し、インディヘナを守護し、1660年に印刷機を導入した。その後メキシコ大司教となり同時に副王も兼ねた²⁷。

4 修道会

1540年代、修道院が創設され、レグラル会員数が増加していった。フランシスコ会とドミニコ会を主流にメルセ会も加わり、托鉢修道会が積極的に先住民に伝道し、後発のイエズス会はスペイン人入植者子弟の教育などに成果を示した。また中米で最初に列聖された聖人ベタンクールは貧者や病人を対象とした施療院や病院を創設した(図2)。女子修道院が設立され、修道院の数が増加し修道者数も16世紀末には五千人、17世紀前半に1万人に達した。生地もしくは叙階の地がスペインのペニンシュール修道士に対してアメリカ大陸生れのクリオーリョ修道士が増加し、両者間に対立や摩擦が生じた。ペニンシュール修道士は本国出身という優位性が侵され宗教生活に弛緩が生じると問題視した。17世紀前半、この問題回避のためにペニンシュールとクリオーリョの聖職者数を半々にするという方策もとられたが、年数を追うごとにアメリカ生まれの修道者だけで充足する状態となっていった²⁸。

【フランシスコ会】1565年にフランシスコ会がグアテマラに到着し、1570年に30~40人、1575年には約60人と増加し修道院はサンサルバドル、ソンソナテ、コスタリカのサンミゲル(1574年)、シウダー・レアル・デ・チアパス(1575年)など各地に設立された。ニカラグアやホンジュラスにもフランシスコ会士が増えると、ニカラグアにサンホルヘ教区が成立し、グアテマラから分離した。ホンジュラスのサンタ・カタリナ区はグアテマラに属し(1586)、修道者をグアテマラに送った。1548年から乏しい修道院資金と寄付をもとに、レグラルは粗末な僧服に裸足で布教活動をした(写真4, 写真5)。グアテマラのレグラルの数は20名、グアテマラ司教区のセクラルが19名であったが暫時80名に増加した。

1661年、修道院数は24で修道士数が172人。1680年、修道院数29に修道士数190人で、グアテマラのフランシスコ修道院だけでも80人を数えた。1690年、修道院数33(チアパスに2、ホンジュラスに5)となり修道士の数は180人と増加した。ペニンシュール出身とクリオーリョとの比率は1対3とクリオーリョ僧の数が増えた。征服から約2世紀を経て、1700年には修道院数が35に、見習僧も増加した。首都サンティアゴ市はレベルの高い学問の中心地となり、アルモロンガの修道院では禁欲的で厳しい信仰生活が営まれていた。

【ドミニコ会】ドミニコ会とフランシスコ会の間で修道士の募集と先住民教化に関する意見の対立があり(1550)、マロキン司教は両者の仲裁役をかった。1551年にチアパスのサンビセンテ管区とグアテマラに修道院が設立され、在グアテマラのドミニコ会士16人(1574)、全盛期には修道院12に修道者82人(内20人は隠居)を数えた。本部のサントドミンゴ修道院には、約40人が居住し神学、文法、美術を教えた(1546)。当初、ドミニコ会はクリオーリョの入会を拒んでいたが、16世紀末には受け入れた。1612年、グアテマラ教区内に5修道院が創設され、聖職者55人が居住した。1615年になると、入会志願者の殆どがクリオーリョとなった。フランシスコ会入会希望者数には及ばないが、ドミニコ会はグアテマラで重要な位置を占め、1700年までに教区内に170人が居住した。著名な修道士は以下である。レメサルは*Historia general de las Indias Occidentales y Particulares de la gobernación de Chiapa y Guatemalaw*を記し、ラス・カサスやフィリピンのドミニコ会士について記録した。F. Ximenez (1666-1729)はマヤ諸民族の起源神話『ポポル・ブフ』をラテン文字に転写しスペイン語訳をつけた手稿を残し、Matiaz de Paz 神父はサン・アレホの病院を建設し先住民を施療した²⁹。なおサントドミンゴ修道院は1773年のサンタマルタの大地震で崩壊した。

【メルセ会】マロキン司教の指導によりメルセ会の弛緩した聖務に規律が戻り、グアテマラに60人を

数えた(1561)。1597年になると修道院はグアテマラに6、ホンジュラスに2、ニカラグアに2、チアパスに1と増設され、クリオーリョの入会を許した。グアテマラの修道院では高レベルの神学・文法・芸術などの講義がされた。1625-30年にソンソナテ、サンミゲル、サンサルバドルに修道院が建設され、1689年には修道士は90人に増えた。Perez Dardon 神父はグアテマラ、チアパス、ホンジュラスに布教地を開拓した。Diego de Rivas 神父はサンカルロス大学の教授で、18世紀にラカンドンとイツァ地域で布教した³⁰(写真7)。

以上、1555 - 1600年の半世紀間、先住民を対象に三修道会とセクラル司祭の数を示すと表2となる。この表から1600年代にセクラル司祭がフランシスコ会に迫る勢いであることが分かる。その背景にはどのような政治的政策がなされたのであろうか。後述のブルボン期の行政改革に注目したい。

【イエズス会】1561年にグアテマラ布教を申請し、1582年に数人が到着した。1614年、コレヒオ・デ・サンルカスを創立し、会士は14人となり小、中、高と次第に高学年の学生への指導を進め、最終的に大学(神学校)の基礎レベルまでを教えた(1628)。1640年にはすでにエル・コレヒオ・デ・サンルカス校が有名となり、17世紀初頭にニカラグアのエル・レアレホとグラナダに学院を開校し、1667年には、チアパスに修道院を創設した。当初は神学生に特化した指導をしたが、次第に市街地在住の植民者から子弟教育の要望が強まり、17世紀末にサンフランシスコ・デ・ボルハ校を開校した。グアテマラ総監領域のイエズス会は、先住民対象の布教よりもスペイン人植民者への信仰指導で活動した³¹(写真8)。

【アウグスティヌス会とベツレヘム会】1611年、サンティアゴ市に修道院が設立された。1653年 フランシスコ会のカナリア島出身の第三修道会士ブラザー・サンペドロ・デ・ベタンクール(写真9)が病院を設立し献身的に病人を施療した。後年ベタンクールは列福(1980・1982年)され、2002年には中米で最初の聖人として列聖されている。ベタンクールの死後(1677年)、ブラザーRodrigo de la Cruzがその遺志を継いだ。彼はコスタリカの総督兼タラムネア侯爵であったが修道士になると、ベツレヘム会の基礎を造り病院を完成させ、ブラザーの宿舎や女性患者病棟を建設した。病院をメキシコ(1688年)とリマ市(1671年)に、さらに8修道院を建設し(1681年)、1716年に死去した。アメリカ大陸で誕生した当修道会は深く根を張った。16世紀半ば、すでにメキシコにはサン・ヒポリトのカリタス・ブラザー修道院が成立していたがこれと並ぶ偉業といえる³²。

【女性修道会】: 清貧、貞潔、従順を唱える女子修道会のコンセプション、サンタクララ(写真10)やカプチン、ヘロニマ、アグスティン、ドミニコ諸会が創設された。持参金の無いクリオーリョ女性や先住民女性は入会できなかった。1579年にLa Concepción de Nuestra Señora de la Orden Jeronimaが誕生し、征服者や入植者の娘たち40人ほどが入会し(1585)、その数は339人に増えた(1600)。1606年にサンタ・カタリナ・マルティル尼僧院が建立され尼僧院ブームが生じた。1610年にはコンセプション修道院がチアパスのシウダ・デ・リアルに厳しい戒律の尼僧院 Encarnación を設立した。様々な環境に置かれた女性たちが信仰集団を形成し、やがて先住民女性を対象とした宗教団体も作られたが1580年代には消滅した。一方で、同年にはサンティアゴ市にサンタ・カタリナ・デ・シエナ女子修道院が篤信婦人らにより創設され女子初等教育がなされ、後にサンタ・ロサ・デ・リマと呼ばれた。ベツレヘム会女子修道院は女性患者を対象とした施療院を創設した³³(1670年)。



写真4 フランシスコ会・教会



写真5 ベタンクール霊廟前につつフランシスコ会修道士



写真6 地震で廃墟となったエル・カルメン修道院正面



写真7 メルセ教会



写真8 イエズス会修道院の正面



写真9 サンペドロ教会と付属病院（右手）

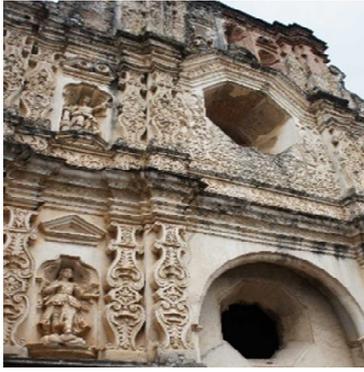


写真 10 サンタクララ修道院内の教会正面
城塞のように分厚い壁面が大地震でも崩壊を
免れた。

写真 4～12、2017 年、筆者撮影

【兄弟会 cofradia】

グアテマラのマヤ人と最初の接触をしたのは、征服者コルテスの使者バルトロメ・デ・オルメドとファン・ディアスであったとされる。グアテマラ教区が創設され(1534 年)、最初の司教マロキンが着任し、当時の司祭たちは携帯用祭壇を携え仮設建物や野外でミサ聖祭を行い、首長クラスをまず改宗させ暫時先住民を集団で洗礼し、偶像崇拜のいかなる残滓も破壊することを目標とした。ドミニコ会のロドリゴ・デ・ラドラーダがチャとテクパン・アティトランで布教を開始し成果をあげた(1538 年)。

本論、第 4 章の舞台となるサンティアゴ・アティトラン地域は、1550 年にフランシスコ会の管轄地域となり、ファン・アロンソとディエゴ・マルティンが常駐司祭として赴任し、1570 年に教会建築を開始し完成した(1582 年)。しかし、山頂部の古都チャに住むマヤ人への布教活動はとくに雨期に支障をきたし、徴税や行政面にも統治しやすいように住民を移動させ現在のサンティアゴ市の地へ集住化させた。本来であれば、エンコメンデロのサンチョ・デ・バラオマが教会建設資金を提供すべきであるのに、彼は献金しなかった。先住民は建築に伴う労働を提供するだけでよかったのが、建築資材まで提供させられた(写真 11)。十分の一税はカカオ豆で支払われたとされ、この納税の他に結婚・葬儀・特別ミサを教会に依頼する毎に寄進が義務づけられた。1585 年にはコフラディア組織が設立され、司祭・助祭ら 5 人の生活費もそこから賄われた。当該地のコフラディアの基本的要素は植民地時代初期に形成され、コフラーデ(団員)は守護聖人を祝い、病人を見舞い、死者を弔いミサを挙げた。グアテマラ東部のチキムラ地方の征服戦に前述サンチョ・デ・バラオマが、アルバラードの命を受けて向かったという記録によれば³⁴、親子二代同名で当該地域をエンコミエンダとしている。グアテマラ史に名家に数えられたが、一族はアクセス困難な当該地方には出向かず、もっぱらサンティアゴ市で貴族的な生活を送っていたといわれている。すると、ツツヒル・マヤの人々は他地域ほどにはエンコメンデーロの政治的・文化的干渉を多く受けなかったと推測される。

さて、コフラディアを設立するには、国王と司教の許可を得なければならない。アメリカ大陸ではコフラディアの数が爆発的に増加した。むろん、無許可である。スペイン人、クリオーリョ、メスティソ、先住民、黒人と民族集団ごとに兄弟団が誕生した。兄弟会の結成はグアテマラ司教区でも一大ブームとなった。事実、1637 年にアウディエンシアは兄弟会の数が多すぎると警告したが、17 世紀末においてもフランシスコ会布教区の中だけで 300 を数えた。サンタマリア・デ・ヘスス区には 24、ケツアルテナンゴには 22、遠隔地のサンティアゴ・テフトラ司祭管区に 29 が存在した。サンティアゴ市に最初の兄弟団「無原罪の御宿りの聖母」が設立(1527)され、以来、17 世紀末には 800 までに増加した³⁵。先住民村落における兄弟団の役目は大きく、役職者は祭主として莫大な出費をして威信を高めた。祝祭儀礼はキリ

スト教と土着宗教が混淆したものとなった。主となる出費はミサへの支払い、守護聖人像に着せる衣類や装飾品、参拝者を受け入れる祭儀所の増設、もてなしなどである。グアテマラ東北部チキムラ地方では、先住民人口が西部高地よりも少数で、メスティソ、ムラート、スペイン人入植者とエスニック集団ごとに兄弟団が結成された。



写真 11 サンティアゴ・アティトラン教会正面



写真 12 ソロラ市、カクチケル・マヤのコフラディア行列

写真 11、12 ともに 1992 年筆者撮影

5. ブルボン期の教会：レグラルとセクラルの葛藤

1730 年以降、スペイン・ブルボン朝国王による行政改革で、教会政策に変化が生じた。フェリペ 5 世及びフェルナンド 7 世の治世下、啓蒙思想がアメリカ大陸に浸透し、国王直轄の中央集権体制が地方にまで影響し教会に変化をもたらした。変化とは本来的に反教會的で、教会権力と財産および聖職者の権威を減少させる方向に向かった。カルロス 3 世治世下（1759-88 年）、ブルボン改革のピークを迎え、アメリカ全土を含むスペイン帝国からイエズス会の追放となった³⁶。ブルボン家の反教會主義改革は国王の権力と反教會主義者を強化したが、これにより葛藤と論争が生じ意図せぬ結果をもたらしていった。歴史的概観を Añoveros と Jones に、またレグラルとセクラル間の葛藤に関しては Ennis の観点も加えて述べていきたい。

修道会が相互に勢力を競いあう状況下、スペイン国王は修道院の新設や修道者志願者数を制限した。フェリペ 5 世(1700-46 年)はグアテマラ司教区を大司教区に昇格させ(1742 年)、司教たちを集中的に支配する方針をとった。1743 年に P. パルド・デ・フィグロアが最初の司教に任命され、チアパス、コマヤグア、レオンの諸司教区を管轄した。従来聖職者が徴税してきた制度は市政役職者の役務に改められ、密輸貿易活動が制約されたこともあり、政府には行政基金ができた(1751 年)。国王は大司教にセクラルの任命権を与えた (1753,1757 年)。1760 年代以降、カルロス 3 世(1759-1788 年)はパロキア(修道院教区)に所属する先住民に対する徴税を廃止したり減少を命じ、修道会士・レグラルよりもセクラルを優先した(Jones 1994: 68-69)。1767 年のイエズス会士の追放もその一連の方針であった。皮肉にも、イタリアに流刑されたアメリカ大陸生まれのイエズス会士には、自らの故郷はヨーロッパではなくアメリカ大陸にあるという強い意識が生まれた。その影響は 18・19 世紀初頭のグアテマラ人ナショナリズムに訴えていくことになる。西欧に流刑されて、初めて自分の「祖国」、アイデンティティはスペインではなく、アメリカ大陸にあるという認識が生まれた。現ランディバル大学の礎となった R.ランディバル神父も、その一人でありグアテマラを「我が人生の泉」と記している³⁷。

ブルボン改革はセクラルの地位を高めたが、イエズス会士追放も一因となり、1800年には司祭の数が減少した。聖職者と市政役職者の間にも葛藤が生じ、教会の地位と権威は弱体化し、一方、王権力は独立革命の流れを阻止できない事態に向かった。こうした変化の兆候はすでにあった。大司教 P.コルテス・イ・ララス(1768-79年)による王令への抵抗である。すなわちサンタ・マルタの大地震(1773年7月)後に発令された遷都令に対して、ララス大司教の反撃は顕著であった。元来、総督ペドロ・デ・リベラとララス司祭とは意見が合わず、グアテマラ行政と教会参事会のどちらが優位であるかをめぐり確執がたえなかった。そこに大地震で修道院やセミナリオが多く立地するサンティアゴ市は壊滅状態となった。国王と総督は新都グアテマラ市への遷都令を発し移動を迫ったが、大司教ララスは反対し旧都が先住民村落に近く、教会、修道院、学校・大学などの新都への移動には莫大な費用がかかるうえ、教育指導の実現には数年を要すると反対した。1777年7月28日、リベラ旧総督に代わりマルティン・デ・マジオルガ新総督は、2か月以内に教会参事会、大学、修道院、高位聖職者を含む教会関係者全員を新都に移動すべしと強行に厳命した。マジオルガ総督はスペインのインディアス大臣ホセ・デ・ガルベス宛てに書簡をしたためた。曰く、ララス大司教が教皇勅書を受領するまで新都への大聖堂と司教館移転に反対し、教会参事会も移動に反対していると告げた。総督はララスを大司教に推薦した教会参事会の成員4人を辞職させ大司教をスペインに帰国させることを示唆した。国王は総督の意見を入れ、カジェタノ・モンロイが次の大司教に任命されたのである(1779)³⁸。

旧都サンティアゴ市(現アンティグア市)と新都ヌエバ・グラナダ・デ・アスンシオン(現グアテマラ市)両都が宗教的中心地となり、教会、学校、修道院、病院が建設された。旧都サンティアゴ市(現アンティグア市)大聖堂は10年をかけ再建された(写真1)(1669-1679年)。大聖堂には征服者ペドロ・デ・アルバラードやマロキン司教の遺灰が埋葬されている。総督と大司教の論争後、新都に新たな大聖堂が建設され(Jones 1994: 77)³⁹、ブルボン改革により国王の直接支配が強まり、教会の世俗化が進んだ⁴⁰。

ギブソンによれば、植民地時代後期になると、修道会の宣教熱は低下し、教会全体は広大な不動産を所有する機関へと変貌した。先住民人口の減少は布教の重要性を失速させ、教会の土地は元来先住民の土地であったが仲介を経て教会所有となった。教会は土地が受動的に与えられたのだと主張した。教会は牧場や製粉所も所有し、金を信用貸するなど金融機能的業務も担った。初期において教会は国王からの支出金や十分の一税および個人的寄付に頼ったが、18世紀後半になると隣国メキシコ市の白人人口約6万人に対し、8000人以上が聖職者であったという。豪華な司教座聖堂や教会が建築され、信仰心の深さが物質的条件で測られた。教会側の言い分としては、人々の信仰の篤さが形になったのであり、聖職者個人が利益を得ているのではないと説いた⁴¹。

1778年、大司教区には4司教区、セクラル108人・レグラル23人がグアテマラ、ニカラグア、コスタリカ、レオン、チアパス、コマヤグアなどの地方で聖務に就いた。この頃の人口539,765人に対して教会424が存在した。グアテマラ司教区が創設された1530年代から数えて司教は代々16人。大司教区成立後(1743年)大司教7人が誕生した。しかし、19世紀初頭になると、中米の教会は司祭の減少と高齢化を迎えていく。フランス革命、ナポレオン戦争(1807-08年)による仏軍のスペイン侵入、自由主義と保守主義の対立など、時代の変換が音をたてて、辺境のグアテマラにも押し寄せてきた。ブルボン改革、イエズス会士の追放、教会の世俗化、人口増加が続いた。争乱期にラモン・カサウス・イ・トレス司祭はグアテマラに赴任したが(1811年)、大司教に着任できたのは4年後であり⁴²、彼はスペイン王国領・最後の大司教にして、独立国グアテマラの最初の大司教となった(1821年)。パトロナト・レアルはもはや

力を失い、教会所領地と富は非難的となり、財産と特権は危機に瀕し、その後は新政府によって差し押さえられていくのであった。

征服・植民が開始された当初において、ローマ教皇庁は教会未設立の「辺境の地」への布教を可能にするために、大きな特権をレグラルに与えた。すなわち、正規には司教の手に在る秘蹟の管理をレグラルに与えたのだ。ところが驚くべき速度で布教地が拡大し、スマラガが最初の司教として着任した時、自らは劣位な立場にあると認識した。司教には権威がなく、セクラルの数は未だ極めて少数であり、修道会は司教とは独立していた⁴³。先住民人口は疫病の蔓延で激減し、先住民を対象としたレグラルの布教は低下した。一方で、短期間のうちに植民都市が建設され、教区が整い教会が建設され、征服者の子孫や植民者そして混血人口が増加すると、先住民村落地域が無人となった。そこに取って代わって居住したのが新たに増加した非先住民であった。18世紀、スペイン国王は従来のレグラルに代わり、大司教にセクラルの任命権を与えた(1753,1757年)。1760年代以降、カルロス3世(1759-1788年)はレグラルよりもセクラルを優先する方針に切り替えた(Jones 1994: 68-69)。かつて政教一致の原則の下に統治されてきたカトリック教会は、スペイン国王の方策によりレグラルとセクラルの葛藤を生み、その葛藤自体は独立戦争を経て韜晦し、新たな時代を前に、より厳しい対応を迫られることになっていく⁴⁴(Añoveros 1994: 168-169; Ennis 1977:63-72; Jones 1994: 77-78)。1492年を境としてイベリア史中世から世界史の近代がスタートした。王権が教会を保護し、教会が王権を後見した。3世紀にわたる政教一致「パトロナト・レアル」は終焉を迎え、イスパノ・アメリカは政教分離を唱え、スペインからの独立を謳う時代を迎えていくことになる。

グアテマラ総監領時代のカトリック布教は征服戦争と同時に「王権教会保護制」を盾に聖職者たちにより開始された。先住民の宗教と神殿は破壊され廃墟となり、その上にトリック聖堂が建設され、同時に魂の征服とも言われるカトリック要理の宣教が開始された。さて、魂は征服されたのであろうか。後述第4章でも述べるように、筆者が20世紀末から21世紀初頭にかけてフィールド調査したグアテマラ中西部高地のサンティアゴ・アティトラン市では、ツトゥヒル・マヤが人口95%を占める共同体である。後述するように、聖週間においてマヤの祖先神マシモン(マム)が蘇り、マシモン仮面像を中心とした祝祭儀礼が白日のもとに堂々で行われる。一体、当地方を宣教したフランシスコ会のカトリックの布教は水泡に帰したのであろうか？植民地時代のカトリック布教はレタブロ、祭壇、コフラディア、祈祷の中に織り込まれ、何を私たちに語りかけようとしているのであろうか。

1 MacLeod 1984: 106; ギブソン 1981: 75-79; 小林 1994: 23-24)

2 桜井 2017: 43; 2019: 69.

3 布野修二 2013: 332-333.

4 Añoveros 1994: 168.

5 ギブソン 1981: 84-85.

6 アコスタ 1966 II:455; 斎藤 1993:166; ピコン=サラス 1991:86-87.

7 Pasinski 1990: 113.

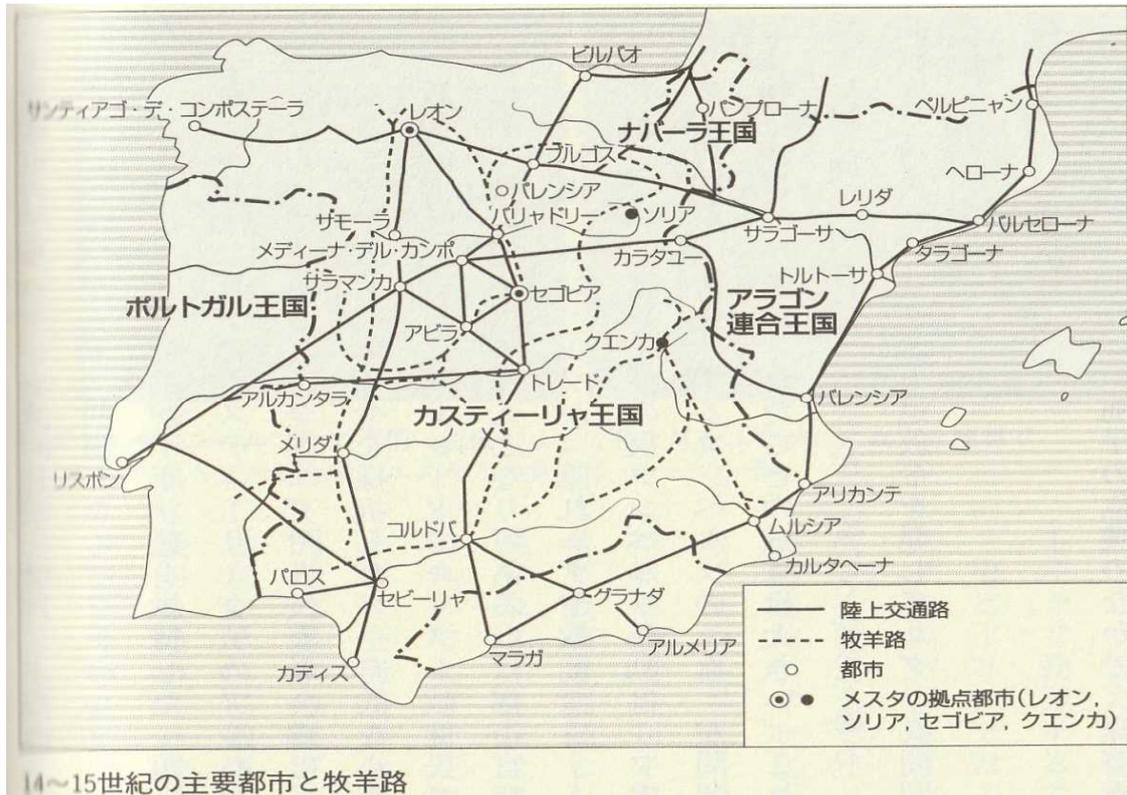
8 近藤敦子「独立前後」桜井三枝子編著『グアテマラを知るための67章』pp.132-135。

9 桜井 1998, 2016。ギブソン 1981: 83-84; ヒル 1981: 24-25; Añoveros 1994: 155-182; Jones 1994.

-
- 10 ギブソン 1981: 83-84; ヒル 1981 :24-25; Añooveros 1994: 155-182 ; Jones 1994.
 - 11 藤田 1982: 53-54.
 - 12 ピコン・サラス 1944 : 87,95.
 - 13 藤田 1982: 53-54.
 - 14 Añooveros 1994: 156-157; Jones, 1994: 58-83.
 - 15 小林致広 2007: 1-5.
 - 16 T. Gage 1987: 344.
 - 17 Añooveros 1994 : 159.; ブルゴス 1987: 34-35.
 - 18 Cline 1972: 26-29.
 - 19 Añooveros 1974: 160.
 - 20 Añooveros 1994: 189.
 - 21 林屋永吉『マヤ神話 ポポル・ブフ』1997年。(Añooveros 1994: 161-164)
 - 22 立岩礼子 2014: 141.
 - 23 Añooveros 1994: 161.
 - 24 Añooveros 1994: 161, 163.
 - 25 Añooveros 1994: 161.
 - 26 Añooveros 1994: 162.
 - 27 Añooveros 1994: 162-163.
 - 28 Añooveros 1994: 161-164.
 - 29 Añooveros 1994: 166-167.
 - 30 Añooveros 1994: 167.
 - 31 Añooveros 1994: 167-168;; 桜井 2017: 39-54.
 - 32 Añooveros 1994: 168.
 - 33 Añooveros 1994: 168.
 - 34 Fuentes y Guzman Tomo II: 169.
 - 35 Añooveros 1994: 173.
 - 36 Jones 1994: 68
 - 37 Jones 1994: 77.; 桜井 2016: 46.
 - 38 Añooveros 1994: 169-70; Jones 1994: 68-72.
 - 39 Jones 1994: 77.
 - 40 Añooveros 1994: 168-169; Ennis 1977: 63-72; Jones 1994: 77-78.
 - 41 ギブソン 1981: 95-97.
 - 42 Jones 1994: 78.
 - 43 Ennis 1977: 65.
 - 44 Añooveros 1994: 168-169; Ennis 1977: 63-72; Jones 1994: 77-78

第三章 スペイン、バジャドリー市の聖週間儀礼

第一節 中近世イベリア半島の兄弟会



「危機の時代のスペイン」 関哲行『スペイン・ポルトガル史』立石博高編、山川出版社、2000、p. 128.

東西軸に、ブルゴスーレオンーサンティアゴ・デ・コンポステーラ。

南北軸に、レオンーサラマンカーセビーリャへと向かい ⇒ そして、中南米に

中世スペイン社会はユダヤ人（ユダヤ教徒）、ムデハル（キリスト教支配下のムスリム）、バスクやカタルーニャ地方などの言語、異なる宗教とエスニシティというモザイク社会に例えられる。広大なスペイン帝国が成立し、カトリックによる政治・社会統がされると、ユダヤ人やムデハルが追放された。この近世スペインのモザイク社会統合の役割の意一部を担ったのが、兄弟会 *cofradía* あるいは *hermandad* と呼ばれる「擬制的家族」である。

「旧キリスト教徒」とは四世代、異教徒の「血」が混じらないキリスト教徒で、職業、階層、居住地、性別を問わず兄弟会を介して「神の恩寵を受けたスペイン帝国」への参入を許されたといわれる。そして、これに対立するのは、改宗ユダヤ教徒のコンベルソ、改

宗ムスリムのモリスコ、エスニック・マイノリティの黒人やムラート（白人と黒人の混血）、そしてインディオである（中南米）。スペインやポルトガルの兄弟会は中南米や日本を含むアジア地域にも扶植され社会的「基本細胞」である兄弟会を介して、スペイン帝国への政治・社会的な参画が可能となった。こうして、王権と教会は対抗宗教改革の主要案として、またスペイン帝国維持のためにマイノリティ兄弟会を含む多様な兄弟会に関心を深めた¹⁾。

概観 バジャドリード市に関する地理的・歴史的概観

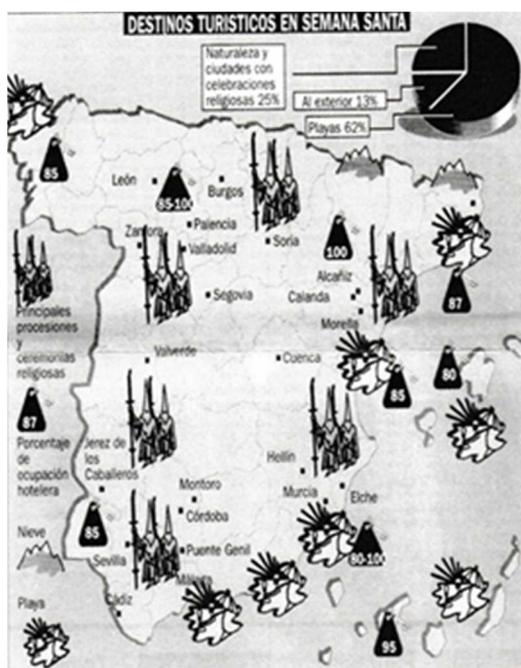


図 1. 「聖週間休暇にどこで過ごすのか？」

図 2. バジャドリード市

El Norte de Castilla 紙、1994 年 3 月 31 日

El Norte de Castilla 紙、1994 年 3 月 30 日

同市はスペイン北西部、カスティーリャ・イ・レオン自治州の同名県の県都であり、人口 33 万 3680 人（1990 年）。エスケパ川とビスエルガ川の合流点に位置し、都市名はイスラムのアミール（司令官、総督）の居住地を示す Balad Walid に由来する。レオン王国出身者によって再征服後、再植民された。13 世紀に王宮が造られ、15 世紀、16 世紀前半は事実上、カスティーリャ王国の首都となり、王国議会（コルテス）もしばしば開かれた。1559 年に王宮はバリャドリードを離れ、91 年には大火により市街地の高台部分が崩壊した。フェリペ 2 世の命により再建されたが、現在ではハプスブルグ家の都市計画の特徴は失われてしまっている。1601 年、再び王国の首都となったが、王宮は最終的にこの都市を離れた。イサベル様式ファサードのサン・パブロ、コレヒオ・デ・サン・グレゴリオなどの教会があり、

後者には、A・ベルゲーテらの彩色木彫の美術館がある。フランコ体制下で、工業都市に変わった²。

1. 兄弟会

兄弟会の会員資格は開放的／閉鎖的の二類型で、機能的には以下の三類型がある。

1. 慈善型、2. 篤信型、3. 職能別

慈善型と篤信型は、開放的兄弟会に属し、宗教儀礼を通じた会員の霊的救済と教化、病気や貧窮時の会員間の相互扶助と慈善を目的にして、職業、階層、性別、居住地、異なるエスニシティの「旧キリスト教徒」住民より構成された。一方、閉鎖的兄弟会は職能型兄弟会やユダヤ人兄弟会、モリスコ兄弟会、黒人兄弟会などである。ただし、中近世のスペインにおいて二項対立的類型論で分類できる訳ではない。

特定の聖人を崇敬の対象とする兄弟会は中世中期以来、スペイン各地の職能別兄弟会に代表される閉鎖的兄弟会であった。多くは同職ギルドに属する都市在住の手工業の結成したものであったが、農牧民や海民の兄弟会も存在した。17世紀前半の兄弟会規約によれば、カスティールブランコ村の男女住民は、聖クリストフォルスを守護聖人として兄弟会を組織し、介護と葬儀の相互扶助を実践した。また、海上での危険な漁労や物資輸送に従事したバスク地方のベルメオの海民は、漁師聖ペテロを守護聖人とした兄弟団を組織し、病気、けが、貧窮時の相互扶助と兄弟会内部の平和維持などを誓約した。一方、軍事に特化したサンティアゴ騎士修道会を職業別兄弟会の一類型とみなすことも可能であろう。サンティアゴ騎士修道会は、カスティールリャとレオン王国の対立激化（12世紀後半）時期にカセレス市に創設されたカセレス兄弟会に起源をもつ。十数名の下級貴族（騎士）と修道士により創設され、その目的はムスリムからのフロンティア地域の防衛とサンティアゴ巡礼への保護であった。そして1175年に同兄弟会は教皇庁の許可のもとに下級貴族（騎士）と修道士が共生する**サンティアゴ騎士修道会**へと発展し、聖ヤコブ(Santiago)を守護聖人とした。当会では騎士が武力を担い、修道士は騎士の霊的救済に従事した。当会では病気や高齢となった騎士や修道士を介護する施療院も備え、会員の相互扶助を担った³。

近世になると、カトリック教義が民衆へ浸透し、トレント公会議や対抗宗教改革を背景に、プロテスタントと対抗するために開放的篤信兄弟会が台頭した。サンティアゴ王立施療院 **Hospital Real de Santiago**（15世紀末、カトリック両王）と関係の深いサンティアゴ施療院兄弟会 **Cofradía de Hospital de Santiago** がその好例である。すなわち、前者は慈善活動の大規模化と効率化、医療の「社会化」を目指した近世スペイン有数の総合施療院 **hospital general** で、その運営母胎が后者である。1504年の施療院創建文書によれば、サンティアゴ施療院監督官が兄弟会代表を兼ねる一方、職業、身分、性別、出身地（国）を問わず、所定の入会金を支払えば、カトリック教徒誰でも会員になれた。聖ヤコブの祭日（7月25日）には、総会が王立施療院・礼拝

堂で開催され、宗教行列が行われた。会員が施療院で没したときは市内在住の総ての会員が葬儀への参列義務を負った。

対抗宗教改革の一環として篤信兄弟会が増設され、16世紀後半には最多となったが、17世紀には兄弟会規律の弛緩や財政難を背景に、教会による兄弟会の再編と統合化が進んだ。しかし、18世紀後半の啓蒙改革期には**改革派官僚**が兄弟会を民衆信仰の牙城、スペイン「近代化」を疎外する要因として指弾した。さらに、1830～60年代、自由主義運動の余波を受けて、教会・修道院財産が解放され、ギルドと奴隷貿易が禁止された。この自由主義政策は、トレントの公会議以上に兄弟会に打撃をを与え、兄弟会の消滅と再編を招いた。慈善活動や相互扶助の主たる担い手が国家に移行したこともその一因であろう。19世紀後半以降、兄弟会の多くは会員の居住地を基盤とした開放的な街区兄弟会 *hermandad de barrio* として再編され、第二共和制、スペイン内戦、フランコ体制という激動の時代を経て、存続していく⁴。以下に關の著作から巡礼路沿いの中小都市アストルガの兄弟会など数点の事例を紹介する

2. 兄弟会の理念と統廃合

11世紀末、ポルトガルの国境に接するサンティアゴ・デ・コンポステーラへ寺院（地図1.）への巡礼が盛んとなり、巡礼街道に面する小都市が発展する。中でもレオン西方の小都市アストルガに着目すると、14世紀後半に一部の有力商人と下級貴族が寡頭支配をし、多数の都市民衆が支配下に置かれた。ここに16～24の兄弟会が組織され、ブルゴス市に次ぐ施療院のある都市となった。聖ステファヌス兄弟会は寡頭支配層や聖堂参事会委員を中心としたエリート兄弟会で入会金も高額であったが、開放的で水平的な社会的結合を目指していたといわれる。15～16世紀になると、2500人を要する典型的中小都市になったが、司教座教会、アストルガ公の館、城砦、市場を備え、商業・手工業が盛んな地方政治・経済・社会・宗教的中心地として機能した⁵。

関はカベロ・ドミンゲスを引用し、アストルガ市の兄弟会規約の内容を紹介している。主たる内容を記すと、会員の物的・靈的な相互扶助と連帯、会内部の平和を希求する自治規定、病気で困窮した会員への介護や食事給付、結婚、出産時の会員への祝福、会員の葬儀、宗教行列への参列義務など。また、兄弟会代表 *juez* は下級裁判権や規約違反者に対しては、罰金を求め、総会での秩序維持に努めた。当市の兄弟会は、その起源、職業・身分構成、労働規約の有無、救貧活動の内容によって、1. 職能別兄弟会、2. 篤信（慈善型）兄弟会、3. 聖職者兄弟会、4. ハンセン病患者兄弟会の四類型に区分された。これら四類型の兄弟会は統廃合を繰り返し、トレント公会議の影響の下で、16世紀後半から17世紀には2会（特殊兄弟会と聖ステファヌス）を除き総てが2. 篤信（慈善型）兄弟会に統一され、1635年には「五つの聖痕兄弟会 *Cinco Llagas* 」となった。そしてトレント公会議後の1590年に貧民の真偽を区別し、「真の貧民」のための施療院を二つに統合した。ここにおいて、近世的救貧制度

が、アストロガ市に定着し始めたのである⁶。

3. 兄弟団の組織

入会： 都市住民、属域住民いずれも入会金を納め規約遵守を誓約し、総会で承認されれば、会員として認知された。新会員は会員名簿に登録されると、義務を負担した。会員は聖会員と免除会員から構成され、他に少数ながら施療院管理人や総会・葬儀への参加を召集する役などの専属職が居た。会員は病気の場合を除き、総会・祝祭・会員の葬儀に参列する義務があり、違反者は罰せられた。正会員より高額な入会金や会費を納入する者には職務の一部が免除され、その中には聖職者も含まれた。

会員が病気になったり困窮したときには、施療院で食事・衣類・看護を受けることができ、金銭の貸与や、貧窮会員の死去には兄弟会が負担して葬儀が行われた。このような物的・霊的サービスは会員家族や奉公人にも適用された⁷。

4. 兄弟団の財政と慈善活動

主要財源は入会金、会費、寄進財産、罰金収入、都市内外の不動産からの家賃や地代収入であったが、専従職の俸給や祝祭関連費用に充当され、実際に施療院費用には兄弟会収入の一割程度であった。このため、慈善活動に大幅な制約を受けた。

施療院の活動対象は、都市内外の兄弟会会員、会員家族と奉公人であり、その延長線上に病人や貧民、巡礼者など外部の「貧民」が救済された。男女合わせて最大収容人数は十数人程度であったようだ。施療院管理人は貨幣と現物の他に、兄弟会マーク入りの服と一室を無料で使用できた。宿泊者に料金を請求すると罷免された。宿泊日数は原則二日以内、パン、ワイン、野菜を基本とした。トレント公会議後の1590年、当市の施療院は男性用と女性用の2つに集約され、慈善活動の質が高められた。

関は旧カスティリヤ地方都市ブルゴスが、サンティアゴ巡礼の影響下、都市的に成長し、14～15世紀にカスティール経済の主軸が東西軸（巡礼路）から南北軸（南のアンダルシア地方と北の旧カスティリヤ、バスク地方を結ぶ軸）へと変換し、巡礼路都市が衰退したと記している。ただし、その例外として、ブルゴス市は西ヨーロッパの羊毛貿易に支えられ、羊毛や鉄、オリーブ油を英・仏に輸出し、一方で、西ヨーロッパ産の毛織物製品などを輸入する国際商業都市であった。市内にコンスラード（商人ギルドで商業裁判権を有する）が配置され、ロンドンやナントなどにブルゴス商人の居留地が樹立され、北西大西洋商業ネットワークの結節点の一つとなった。15世紀末から16世紀末の人口は推定1万人余で、教区数は15であり、市民は何らかの兄弟会に所属したという⁸。

以下、続けて関を引用すると、守護聖人の祭日について以下のように事例をあげて説明する。

① ガモナルの聖母： 祝日は8月15日

- ② 聖アントニウス兄弟会： 1月17日
- ③ 聖ヤコブの祭日： 7月25日
- ④ 聖カタリーナ兄弟会： 11月24～25日

聖カタリーナ兄弟会は絵師、彫刻家、銀細工師などの職能別兄弟会から発足し、後日、篤信（慈善）型兄弟会へと移行した。16世紀前半まで、絵師、彫刻家、銀細工師、金箔師、ガラス細工師が大半を占め、60名に限定されていたという。当会が230名に増加したのは、16世紀半ばのトレント公会議以降である。聖カタリーナの祭日には全会員が灯明を手にし、施療院内の聖カタリーナ像を神輿に乗せ、サン・レスメス教会と施療院の間を宗教行列したという⁹。

第二節 マイノリティ兄弟会

さて、中近世のマイノリティ兄弟会の事例として、16世紀に「血の純血規則 *limpieza de sangre*」がスペイン社会に浸透し定着すると、コンベルソとモリスコは「旧キリスト教徒」の兄弟会から排除され、独自の兄弟会を創設せざるを得なかった。エスニック・マイノリティを代表する黒人とムラートは、アメリカ貿易の拠点セビーリャ市で、1580年のポルトガル併合後、多数の黒人奴隷が流入した。貴族、官僚、有力商人、手工業者などが黒人奴隷を所有し、兄弟会による家父長的保護が必要とされた。黒人やムラートは言語、宗教、親族関係を奪われ、「擬似親族集団」としての兄弟会に入会することで、自らのアイデンティティを保持しつつ、マジョリティ社会への同化を促す不可欠の社会的装置として機能した¹⁰。

関によるマイノリティ兄弟会の事例解説を続けて引用していきたい。中世末期サラゴース市のユダヤ人兄弟会として、以下1. 靴職兄弟会 2. 病人介護兄弟会 3. 慈善兄弟会 4. タルムード・トーラー兄弟会などの事例4例。近世都市グラナダとムルシア地方のモリスコ兄弟会。そして、近世都市セビーリャの宗教的マイノリテの黒人兄弟会組織の場合、会員資格と会員の権利・義務・財政基盤・慈善活動を実施した。また、マイノリティ兄弟会の例として、中世末期サラゴースのユダヤ人兄弟会には、職能兄弟会と慈善型兄弟会があり、会員資格は市内在住のユダヤ人に限定された。16のユダヤ人兄弟会のうち、職能別兄弟会が5、慈善型が10、その他、公的兄弟会1である。関は上記1、2、3に子供達の初等教育振興を目的として、タルムード・トーラー兄弟会を加えている。最後に、中南米植民地の黒人とインディオ兄弟会の事例を簡略に記している。中南米植民地の黒人とインディオ兄弟会はセビーリャの黒人兄弟会をモデルとして結成されたようである。ペルー副王領の鉱山都市ポトシのコパカバーナのマリア兄弟会は、インディオの聖地を擁するチチカカ湖岸の集落で、先インカ期の巡礼投宿地であった。征服後「上からの」カトリック教化とインディオの伝統的宗教の維持のなかで、コパカバーナ教会が建設され、聖母像が安置された。17世

紀初頭、ポトシ銀山で落盤事故があり、インディオが坑道内に2週間以上にわたり閉じ込められた。その際、奇跡的に彼らを救済したのが、「コパカバーナの聖母」であった。これを契機にポトシのインディオがマリア崇敬をつよめ、閉鎖的なマリア兄弟会に加入した。他にも、16世紀末のペルー副王領リマ市ではスペイン語能力のある都市型インディオ（ヤナコーナ）がコパカバーナのマリア兄弟会を結成し、聖母像が涙を流したという奇跡が報告されている。また、リマ市で結成された最初の黒人兄弟会はセビーリヤの黒人兄弟会の支部として成立している。こうしたことから、セビーリヤとアメリカ植民地のマイノリティ兄弟会の連続性は否定できない¹¹。

また、米国ハーバード大学によるメキシコ南部チアパス州マヤ集落学術調査報告書においても、先住民たちの演出による先スペイン期の祖霊の出現や儀礼的ユーモアの事例の報告に事欠かない。例えば、筆者はブリッカー著（Bricker, L.）の *Ritual Humour in Highland Chiapas*（原題：チアパス高地の儀礼的ユーモア）を『カーニバル』と題して黒田悦子師と共訳出版した。著者ブリッカーはカーニバルには儀礼的ユーモアがつきものであると興味深い示唆している（次章・後述）。また、16世紀、ユカタン半島フランシスコ会神父ディエゴ・デ・ランダはマヤの因習を忌み嫌い、地域の首長以下ユカタン・マヤ人を異端審問にかけ（1562年）、マヤの絵古文書を悪魔の書として焚書し、現在では4点を残すのみである。ところが、彼は焚書後に『ユカタン事物記』と題してマヤの信仰・文化・因習・社会などに関する記録を多く残した。同書の第22章「インディオたちはどのようにして身体に彫り物をいれたか。彼らの泥酔、酒、宴会、道化、音楽、および舞踊について」を読めば、3世紀余を過ぎても、祭りの状況は現在の状況とさほど変貌したとは思えない。ここでは、後述第4章におけるグアテマラ・マヤ地域サンティアゴ・アティトラ村の聖週間に祖先神「マシモン像」が出現するが、まさに、ブリッカーの説く儀礼的ユーモアの一例と見られる。¹²

日本史の16世紀後半、ポルトガルのミゼルコルディア兄弟会をモデルにして、長崎や平戸、府内などに慈悲の組が組織され、特に「日本のローマ」とされた長崎の「慈悲の組」は1609年当時、150人の会員を擁し、二つの施療院を備え、マカオと同一の兄弟会規約を有していたことをキリシタン研究者の川村信三師が紹介している。このように兄弟団はスペイン本国のみならず、中南米を含むスペイン帝国領各地や日本で在地の民衆教化に重要な役割を担っていた¹³。

関によれば、閉鎖的兄弟会員として、スペイン寡頭支配層と中近世スペイン社会の底辺に位置するマイノリティと在地住民は皮肉にも「対等」となった。兄弟会は職業・階層・居住地・性別、エスニシティを問わず、全ての人々の「生老病死」によりそう「擬制的家族」であった。前近代社会にあって会員の相互扶助と慈善活動を担う兄弟会は決定的な社会的意味をもち、中近世スペイン社会、スペイン帝国の「基本細胞」として機能した。キリスト教、ユダヤ教、イスラームという三つの一神教が対立

しながら「併存」し、16～17世紀には中南米、アジア、アフリカを内包する広大な帝国を樹立した中世スペイン社会において、関は兄弟会のグローバル・ヒストリーが模索されて良いと結論している。

第三節 サンティアゴ・デ・コンポステラ

スペイン北西部ガリシア地方の都市で大司教座への参拝者で有名な巡礼地で、16世紀に創設された大学も位置する。12使徒の一人である大ヤコブがスペインで宣教し殉教したのち、この地に埋葬されたという伝承に基づき、9世紀初頭にアストゥリアス王アルフォンソ2世がその墓の上に教会を建てさせ、後にこれは壮大な大聖堂に改築された。聖ヤコブ（サンティアゴ）に対する崇敬は、11世紀以降、イベリア半島北部だけでなく西ヨーロッパ全体に広がり、当地はエルサレム、ローマと並ぶ3大巡礼地の一つとなった。特にフランス各地から出てピレネー山脈を越えてここに至る幾筋もの巡礼路ができてにぎわった。さらに聖ヤコブはイスラム教勢力と戦い、レコンキスタ（国土回復運動）を進めるスペインのキリスト教徒に勝利を約束すると信じられ、スペイン、巡礼、交易などの守護聖人となった。1170年には巡礼者保護のために聖ヤコブ騎士修道会が創設された¹⁴。

西欧の騎士団に関する研究者・橋口倫介教授編の還暦記念論集には、西欧中世における救済施設－施療院の系譜に関する論考が集められている。例えば、聖ヨハネ騎士団は別名、病院騎士団とも呼ばれ、フランスを起源とする。11世紀中葉以降、気候の温暖化や農業技術の発達により耕作面積が増大し、人口急増で都市部近隣農民を吸収して膨張すると、衛生状態が悪化し疫病が蔓延した。救済施設が発展し、病院騎士団が成立、聖ヨハネ騎士団が誕生した。14世紀、百年戦争やペストの猛威。慈善活動の破綻。専業乞食の増加。施療院は乞食の巣窟となり、犯罪の温床になったと東丸恭子は述べる¹⁵。以下は、筆者がスペインで撮影した写真である。



写真1. サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂



写真2. 世界各地から巡礼者を呼ぶサンティアゴ

筆者撮影、2014年。

第四節. スペイン、旧都バジャドリ市の聖週間儀礼報告 (1994年調査)



ガリシア地方におけるサンティアゴ (聖ヤコブ)

布教図《Flos Sanctorum》
木版画、アルカラ・デ・エナーレス、
1566,

Historia de Compostela,
J.Filgueira Valverde, Ediciones
Xerais de Galicia, S.A., 1970,
P. 111.¹⁶

1. 宗教組織「兄弟会 cofradía」設立と山車(paso)製作年代について

スペイン史のうえで兄弟会に関する圧倒的内容を示した歴史家ルメウ・デ・アルマス (Antonio Rumeu de Armas) によれば、スペイン最古の兄弟会はトレド市の la Santa Caridad 会であり、パソには 13 世紀もしくは 14 世紀作製の *Santas Justa y Rufina* 両者の彫刻像を載せている。一方、当バジャドリ市最古の兄弟会は、下記・表 1 でみるように、1498 年に設立された「聖十字架のペニテンシア」会で、パソは同年作製された「ベラクルスの聖母」である。以下、1994 年、桜井撮影の動画とフィールドノート、および当時蒐集した資料 (新聞など) に依拠して報告していくものとする。なお、バジャドリ市の聖週間行列は夜間にされることが多く、本章ではそのイメージを伝えるために、バジャドリ市近郷に位置するサモーラ市彫刻美術館に常設されているパソの静止画・写真 (1994 年筆者撮影) を主に活用している。パソの彫刻作品は両市ともにフランス人・彫刻師 Juan Juni によっている。

表 1 を参照すると、15 世紀末から 16 世紀にかけて以下の 6 信徒会が設立された。①「聖十字架のペニテンシア会」1498 年、②在俗フランシスコ会 (15 世紀末)、③「キリストの受難会」1531 年、④「嘆きの聖母マリア会」1536 年、⑤「ピエダーの聖母マリア会」1578 年、⑥「ナサレのイエス会」1596 年である。それ以外の 14 団体はおしなべて 20 世紀中葉と末に設立されている。1994 年・調査時に設立されていた信徒会の総数は表 1 の如く 18 会であった。

次に、「キリストの道行き」を視覚的に訴える彫刻を載せたパソ (山車、以下パソで記述)・全 28 基の制作年代をみると、最古が 1498 年に製作された④「ベラクルスの聖母」の 1 基、16 世紀に⑦と⑧の 2 基、17 世紀には 18 基と多作され、18 世紀に⑥の 1 基。残る 6 基の内、20 世紀前半に①、②、⑨の 3 基、20 世紀末に⑩と⑫の 2 基で、製作年代・不明が⑬の

1 基となっている。全 28 基の内、(1) 17 世紀までに 22 基が作製されたバジヤドリ市の歴史的背景について考えてみたい。

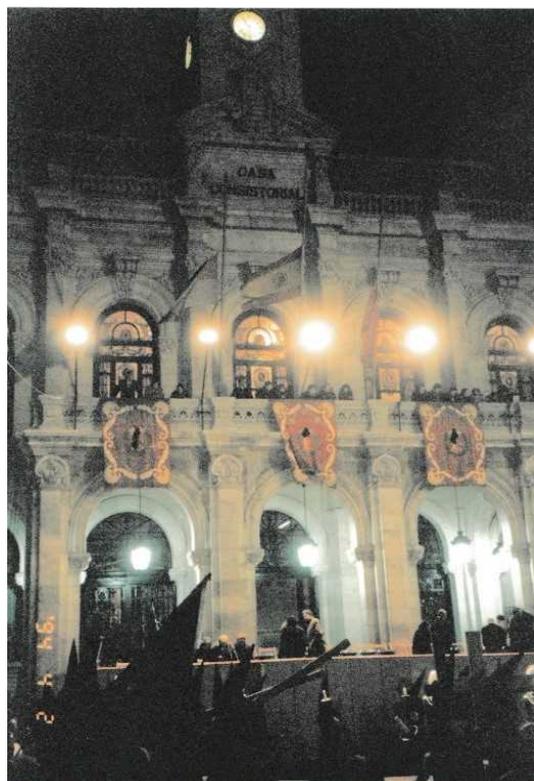
1. 兄弟会の設立年、所属教会、聖像パソの作製年

兄弟会の名称	設立年度	所属教会	所有している像やパソの名称
最後の晩餐	1940 年	使徒聖ペドロ	①希望のイエス像 (1958) ②最後の晩餐 (1958)
ゲッセマニ園の祈り	1939 年	聖十字架	③ゲッセマニ園の祈り (1629)
柱に縛られるイエス	1930 年	聖ミゲル、 聖フリアン	④ 鞭打たれる救世主 (1650) ⑤柱に縛られしイエス (1619)
復活したイエスと 喜びのマリア	1960 年	ポルタ・コエリ 修道院	⑥涙する聖ペドロ (1720)
兵士に囲まれるキリスト	1944 年	聖十字架	⑦Ecce-Homo (1620)
ナサレのイエス	1596 年	ナサレのイエス	⑧ナサレのイエス (17 世紀)
衣を剥奪されるキリスト	1943 年	使徒聖アンドレス	⑨カルバリオへの道 (1614) ⑩磔刑への準備 (1679) ⑪衣を剥奪されるキリスト (1993)
キリストの受難	1531 年	聖キルセ、 聖女フリータ	⑫許しを与えるキリスト (1656)
十字架の昇天	1944 年	聖女カルメン	⑬十字架の昇天

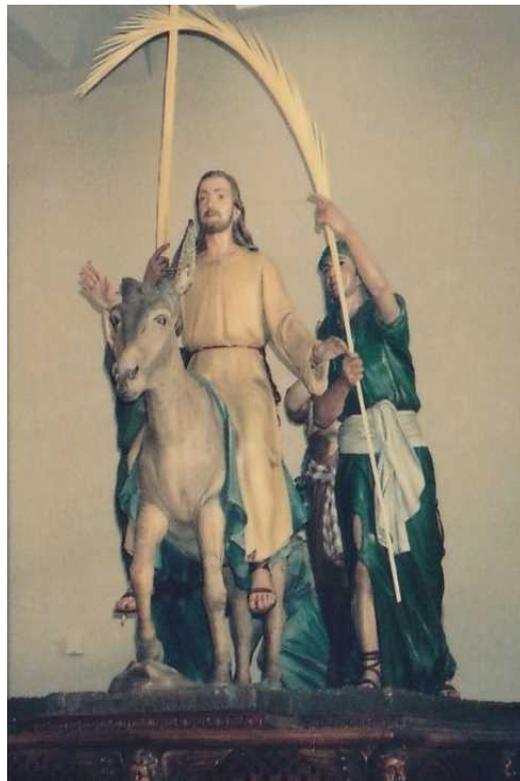
七つの御言葉	1929年	使徒サンティアゴ	⑭父よ、許したまえ、彼らはなすところを知らざれば (1610年) ⑮今日、汝は我とともに樂園にあり (17世紀) ⑯母よ、そこに息子がおろう (17世紀) ⑰主よ、主よ、何故私を捨てたもうのか (16世紀) ⑱喉が乾く (1612-1616) ⑲全てはなされた (17世紀) ⑳あなたの御手に全てを委ねます (国立彫刻博物館のレプリカ)
つづき 兄弟会の名称	設立年度	所属教会	所有している像やパソの名称
イエス・キリストの御血	1929年	嘆きの聖母マリア	21 キリストの御血 (1953)
死して十字架より降ろされしキリスト	1939年	聖十字架	22 十字架より降ろされたキリスト (1623、1757)
ピエダーの聖母マリア	1578年	聖マルティン	23 第五の苦悩 (1625)
聖十字架のペニテンシア	1498年	聖十字架のペニテンシア	24 ベラクルスの聖母 (1498)
在俗フランシスコ会	15世紀末	無原罪の御宿り	25 衣を取り去った十字架? (1993)
埋葬	1931年	聖ホアキンと聖女アナ修道院	26 横臥するキリスト (1631-1636)
聖棺	1946年	聖ベニート修道院	27 聖棺 (17世紀)
嘆きの聖母マリア	1536年	嘆きの聖母マリア	28 嘆きの聖母マリア (1561)

22基の中で、17世紀中に作成されたパソは以下の17基である。①「ゲッセマニの園の祈り」(1629年)②「鞭打たれるキリスト」(1650年)③「柱に縛られるイエス」(1619年)④「Hecce-Homo」(1620年)、⑤「ナサレのイエス」(17世紀)⑥「カルバリオの道」(1614年)⑦「磔刑への準備」(1679年)⑧「許しを与えるキリスト」(1656年)⑨「父よ、許したまえ、彼らはなすところを知らざれば」(1610年)⑩「今日、汝は我とともに樂園にあり」(17世

紀) ⑪「母よ、そこに息子がおろう」(17世紀) ⑫「主よ、主よ、何故私を捨てたもうのか」(16世紀)、⑬「喉が乾く」(1612-1616年) ⑭「全てはなされた」(17世紀) ⑮「十字架より降ろされたキリスト」(1623, 1757年)⑯「第五の苦悩」、「横臥するキリスト」(1631-36年)⑰「聖棺」(17世紀)。(2) 何故17世紀に続々とパソが製作されたのであろうか。また、女性会員が多く参加しているが、中近世においてもそうであったか。今後の研究課題としておきたい。聖週間は毎年動く移動祝祭日である。『毎日のミサ典書』によれば、「灰の水曜日」から40日間の断食節がはじまり、その最後の週の日曜日から聖週間が始まる。復活祭は「枝の主日」から始まり「白衣の主日」をもって終わる。「昔」の信者は15日間仕事を休んで復活の祝日にあずかった。聖月曜日、イエズスはベタニアのラザロを訪ねる。聖火曜日、イエスは捕らえられる。聖水曜日、イエスは大司祭、そしてピラトのもとに出廷させられる。聖木曜日、晚餐と洗足。聖金曜日、磔刑・受難。聖土曜日、火と蠟燭の祝別。そして、一級大祝日の復活の主日、死後3日が経ち墓には屍は無く、イエズスは復活した¹⁷。



1. バジャドリー市、1994年4月2日
聖土曜日、夜間の行列



2. 棕櫚の日曜日 ロバに乗るキリスト



3. ピラトはイエスに死を宣告する。



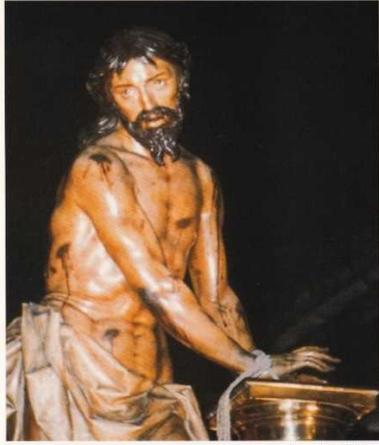
4. イエスは十字架を受け入れる。



5. 聖木曜日、最後の晩餐



6. 聖木曜日 ゲッセマニの園、血の汗



7. イエスは衣服をはぎ取られる



8. イエスは十字架から降ろされる



9. 悲しみの聖母 ピエタ



10. El Norte 紙の伝える夜間の聖行列

第五節 儀礼の過程

1994年3月18日夜8時半

聖週間の公告がカスティリャとレオン両市の文化観光協会会長により、医学部の建物の前にあるフランシスコ会修道院教会でなされる。

1994年3月25日金曜日

夜10時、カルメン教区教会より聖十字架のコフラディアの団員が、肩に「死せるキリスト」と「嘆きの聖母」のパソを乗せて行列がスタートする。行列はセゴビア通りを進み、グティエレス・センプルン広場を抜け、途中でビア・クルシスの14の留で祈りがささげられる。

1994年3月27日 枝の主日

午前 10 時半に、大聖堂で大司教によって棕櫚の葉の聖別がなされるた後、正午に棕櫚の葉の行列がスタートする。聖十字架のコフラディアが、「エルサレム凱旋入場のキリスト」のパソを担ぎ、その他行列に参加しているのは、各コフラディアの子供、学童、高校生、市民などである。カスカハレス通りから、スペイン広場、ソリーリャ広場を抜け、聖十字架のペニテンシア教会に到着する。そこにおいて、大司教が参加者を祝別し、行列はホザンナと神を賛美する歌を歌い、子供らの手にする緑の棕櫚の葉や枝が揺れて楽しい雰囲気の流れる。

夜 8 時半、アウグスティノ・フィリピノ教会から、七つの御言葉のコフラディアが被昇天の聖母マリア教会に祀られているの「苦悩のキリスト」のパソを担ぎ行列を進め、使徒サンティアゴ教区教会へ至る。

1994 年 3 月 28 日 聖月曜日

夜 8 時半、聖十字架のペニテンシア教会から嘆きの聖ロサリオの行列が出発する。行列には、以下の 6 つのパソが加わる。果樹園での祈り、柱に縛られしキリスト、ECCE-HOMO?、カルバリオへの道、キリストの磔、聖十字架の聖母で、この 6 つのパソに 6 つのコフラディアが各々担当する。行列は聖十字架のペニテンシア教会を出て、第一のミステリオのなされるペニテンシア教会に到着する。サンマルティン通りで第二のミステリオが、サン・パブロ広場で第三のミステリオがなされ、赤十字病院の近くで第四のミステリオが、そして、最後にサン・ベニト教会で第五のミステリオがされた。5 回のミステリオは 5 つのコフラディアにより朗読された。そして振り出しのペニテンシア教会に戻ると聖母マリア賛美の祈りをして解散する。

1994 年 3 月 29 日 聖火曜日

夜 8 時半、使徒聖アンドレス教区教会から、嘆きの聖母マリア像と道行きのキリスト像の二つの山車が劇的に出会うシーンがなされる。道行のキリスト像のパソをひくのは遺骸のキリストのコフラディアである。サン・アンドレス広場、緑十字広場、聖十字架広場を通りぬけて、元の教会に戻る。

夜 8 時 45 分、嘆きの聖母のペニテンシアル教会から嘆きの聖母のコフラディアが同名のパソを担いでスタートし、大学広場とサンタ・クルス広場に抜ける。嘆きの聖母像と道行きのキリスト像をのせたパソが「出会う」のは、聖十字架宮殿入り口正面であり、ここで祈りが捧げられる。そして元の教会に戻ると聖母賛美の祈りを唱えて散会する。

夜 11 時 15 分、聖十字架ペニテンシアル教会から、プロメサの巡礼行列が「柱に縛られたキリスト像」を載せた山車を同名のコフラディア団員によって担がれて進む。聖母ピラール教会に着くとプロメサの更新がなされ、やがて元の教会に戻る。

1994 年 3 月 30 日 聖水曜日 4 つの行列が 4 つの教会から出る

夜 8 時半、ナサレのキリスト教会から「我が父ナサレのキリスト」と「苦しみのキリスト」の 2 つの山車が、各々同名のコフラディア団員に担がれて進む。14 の留ごとに異なるコフラディア団員たちにより祈りが捧げられる。

夜中の 12 時、サン・マルティン教会からピエタ（十字架からおろされたイエスの遺体を抱いて嘆く聖母）の行列が、「第五の苦しみ」のコフラディア団員によって同名の山車が担がれて進む。市内を一巡し元の教会に戻る。

夜中の 12 時、使徒サンティアゴ教会から、7 つの御言葉のコフラディアの団員の担ぐ「イバラの冠をいただいたキリスト」像の山車を担ぎ、平和と和解の行列がなされる。ペニテンシアの行列は元の教会に戻る。

夜中の 12 時、サン・ベニト修道院教会から、聖セプルクロ（聖体安置所）のコフラディア団員は「磔刑のキリスト」像の山車を担ぎ、14 の留でビア・クルシスの勤行をして進む。

1994 年 3 月 31 日 聖木曜日

午前 10 時半、大聖堂で大司教による聖油の秘蹟のミサがなされる。

昼の 12 時半、聖十字架宮殿から「光のキリスト」の山車が同名のコフラディア団員によって担がれ行列が聖十字架広場、大学広場の正面で一回留まり祈りが捧げられ、元の大聖堂に戻る。

午後 6 時 45 分、マグダレナの MARIA 教区教会から「御血を流されるキリスト」像と「第五の苦悩」像を載せた山車が、各々同名のコフラディア団員によって担がれ進む。この行列は大学病院とピオ・デル・リオ・オルテガ病院の前でペニテンシアの勤行を行う。教区の保健担当者がペニテンシアの儀に参加する。

午後 6 時半、大聖堂において大司教のもとに *Coena Domini* のミサが上げられる。

午後 7 時、使徒サン・ペドロ教区教会から、「希望のイエス」像と「最後の晩餐」像が同名のコフラディア団員により担がれて行列が進む。

午後 8 時、ソリーリャ広場から嘆きの聖母 MARIA の行列が行く。この行列には以下 5 つの山車が同名の 5 つのコフラディア団員により担がれる。「聖ペドロの涙」「十字架のエレバシオン」「カルバリオの丘」「聖衣を取り除いた十字架」「嘆きの聖母」の 5 コフラディアに「ゲッセマニの園の祈り」のコフラディアが加わる。ソリーリャ広場、サンタ・アナ広場、市庁舎のあるマヨール広場、オチャボ広場、自由広場を通り大聖堂に戻り、そこで祈禱を捧げる。

夜 8 時、聖キルセ・聖女フリタ修道院教会から、「イエス・キリストの受難」のコフラディア団員らが「鞭打たれしイエス」像、「聖なる贖罪のキリスト」像、「5 つの傷跡のあるキリスト」像の山車を担ぐ。三位一体広場、聖ミゲル広場、などを通過して大聖堂に至り、ここでペニテンシアの儀礼を済ませる。そして再び行列をして大体もと来た道を通りスタート地点の教会に戻る。

夜 11 時、ナサレのイエス教会から沈黙の行列がスタートする。「苦悶のキリスト」像の山

車がナサレのイエスのコフラディアの団員によって担がれている。

夜中の 12 時、サン・ロレンソ教会から寝棺の行列が「横臥するキリスト」像をのせた山車が寝棺のコフラディア団員によって担がれて、サン・ピオ十世教会まで進み、そこで荘厳ミゼレーレの祈りが捧げられる。ポルティカダ広場や西広場を戻り、最初の教会に帰る。

夜中の 12 時に、使徒サン・アンドレス教会からもう一つの行列が出発する。この行列は「死せるキリスト」像の山車を担ぐ同名のコフラディア団員たちや教区保健事務局員たちにより構成されており、サン・アンドレス広場から出て、振り出しに戻ってからサン・アンドレス教区教会に入る。

1994 年 4 月 1 日 聖金曜日

早朝 4 時半、嘆きの聖母マリア教会より、「磔のキリスト」像、「横臥するキリスト」像、「嘆きの聖母マリア」像の合計 3 つの山車が、嘆きの聖母マリアのコフラディア団員によって担がれて、自由広場へと向かう。ここで、聖十字架のコフラディア団員の担ぐ「孤独」像とナサレのイエスのコフラディア団員が担ぐ「死せるキリスト」像の山車と合流し、5 つの山車は大学広場を抜けて、大聖堂に到着する。ここで苦行の留の祈りが捧げられ、元来た道を通り元の教会に戻る。

午前 8 時、無原罪の御宿りの聖母教会からピア・クルシスの行列が「衣をなくした？聖十字架」が、在俗フランシスコ会の同名コフラディア団員によって担がれ、14 の留の前で祈祷の朗誦がなされて進み、フランシスコ教会に入る。そこで、サルベ（聖母マリア礼賛）と勝利の賛美歌が歌われる。

午前 8 時半、七つの御言葉の公告がマヨール広場で正午に行われるが、触れ書きを読上げる係りが、司教宮殿正面扉でこの言葉が記された羊皮紙を高僧から受け取り、市内の各個所で読上げることになる。8 時半に司教局で、8 時 40 分にサン・パブロ広場で、8 時 50 分にリオ・オルテガ病院で、そして 9 時に病院診療所で。このようにほぼ 10～15 分おきに場所を変え 11 時までには 13 箇所まで公告がなされていく。予定としては、11 時にサンティアゴ教会の中庭でサンティアゴのコフラディアが既述の 7 つのコフラディアに加わる。

そして、正午になると、市当局の権威者を前にして、マヨール広場で最後のプレゴン（公告）の説教がシロスのサント・ドミンゴ修道院 C.セルナ・ゴンサレス院長によって読上げられる。七つの御言葉の一つずつが各山車によってあらわされるのである。

午後 5 時、大聖堂において大司教によってミサがあげられる。

夜 7 時半、嘆きの聖母マリア教会から救い主の受難の聖行列が始まる。18 のコフラディアが 28 の山車を引く。ソリーリャ広場、マドリード広場、スペイン広場などを通り、カノヴァス・デル・カステリョ広場で行列が終わる。嘆きの聖母教会では同名のコフラディアが大司教の祝別を受け、賛美歌を歌う。

1994 年 4 月 2 日 聖土曜日

夜中の 1 時半、嘆きの聖母マリア教会から、同名のコフラディアにより同名の山車が出て、マヨール広場や大聖堂、自由広場を通り元の教会に戻り賛美歌が歌われる。

午後 7 時半、聖十字架教会では嘆きの女王として処女マリアを賛美する儀礼がなされる。市を代表する画家にして彫刻家である芸術院会員の A・ゴンサレス・ゴンサレス氏の奉納や、E・エミリオ・フェルナンデス神学博士の瞑想が捧げられる。

夜 11 時、大聖堂において大司教の司式のもとに復活祭の前夜祭がなされる。

夜 12 時、サンタ・アナ広場で「横臥するキリスト」像が同名のコフラディア団員により担がれて、サン・ロレンソ教区教会から聖ホアキン、サンタ・アナ修道院博物館へ移される。

1994 年 4 月 3 日 復活の日曜日

午前 11 時半、ポルタ・コエリ修道院から「復活したキリスト」像と「喜びの聖母」像をのせた山車が復活したイエスのコフラディア団員によって担がれて、スペイン広場、マヨール広場を通り市庁舎まで進む。

正午、サン・ベニト教会から聖棺のコフラディア団員が「喜びの聖母」像と「空の聖棺」の山車をマヨール広場と市庁舎に向けて出す。上記の行列が市庁舎で「出会いの場」を構成し、ここで短い祈りが捧げられる。その後、各々の行列が元の教会に戻る。

午後 1 時半、大聖堂において、大司教の司式のもとに荘厳ミサがあげられる。

夜 7 時半、バリャドリッド市の守護聖人サン・ロレンソをまつる同名の教区教会で、荘厳ミサがあげられ、一連の行事が終了した。

以上が 1994 年 3 月 27 日の枝の主日から始まり、4 月 3 日の復活の日曜日にいたる聖週間儀礼の概略である。それでは、信徒会が設立された年代の古い順から列挙していくと、以下となる。15 世紀が最古で 1 会、16 世紀に 4 会、17 世紀に 1 会で合計 6 会が設立されている。18 世紀と 19 世紀には新たに信徒会が設立されず、20 世紀前半に 14 会と設立ラッシュを向かえる。こうした、現象の歴史的背景とは、一体何であったのか？次に信徒会の山車 28 点を製作年代順に記すると、以下となる。

1498 年「ベラクルスの聖母」が最古の 1 点、

16 世紀は以下の 2 点： 1561 年「嘆きの聖母マリア」、16 世紀「主よ何故私を棄て給うたのか」。

20 世紀前半・設立の「七つの御言葉」信徒会が、1610 年「父よ、許し給え。彼らはなすところを知らざれば」を始めとして、何故 **17 世紀作製・最多 7 点**の山車を所有するのか現段階では不明である。

17 世紀には以下の 12 点と多作されている。「ゲッセマニの園の祈り」、「鞭打たれる救世主」、「柱に縛られるイエス」、「エクセ・ホモ」、「十字架より降ろされしキリスト」、「第五の苦悩」、「着衣を剥奪されたキリスト」、「横臥するキリスト」、「聖棺」、「カルバリオの道」、「磔刑への準備」、「ナサレのイエス」。

20 世紀に作製された山車 5 点： 「希望のイエス」、「最後の晩餐」、「キリストの御血」、「衣

を剥奪されるキリスト」は同名のコフラディアとフランシスコ会とが所有で 2 点。
作製年度不明が 1 点： 「十字架の昇天」（同名の信徒会） 以上で、28 点となる。

【資料としての映像再現の現状ご報告】

1994 年スペイン調査は単独によった。規模のおおきな聖行列であり、報告してきたようにほぼ聖行列は夜間にスタートした。したがって、動画撮影用カメラを使用して撮影した。
映像資料 1： 業者に依頼し、VHS (テープ) 動画のディスクかき換えは終了した。しかし、テレビ付属機器でしか、映像を閲覧できない。残念だが、静止画映像資料で報告している。
映像資料 2： 調査地バジャドリ市での撮影は VHS が主体である。また夜間の聖行列の**静止画**撮影は必ずしも良い仕上がりにはならない。従って、本論では、本・発表資料用に、近接するサモラ市の彫刻美術館で撮影した写真を使用した。理由としては名彫刻家として名高い Juan de Juni など仏人彫刻家がバジャドリ市と合わせて両市の山車 **paso** を作製しているからである。また、バジャドリ市国立彫刻博物館や同市役所発行の以下の資料からも引用した。

El Museo Nacional de Escultura de Valladolid, Juan Jose Martin Gonzalez 著、Editorial Everest, S. A. n.d.. 発行年不明。1994 年入手。

Cofradia de El Santo Sepulcro, Valladolid: Ayuntamiento de Valladolid, Junta de Semana Santa, n.d., 発行年不明。1994 年、入手。

【追記】「信徒会・兄弟会 *cofradía*」の設立とパソ(**paso** 山車)の製作年代について

表 1. 参照

15 世紀末から 16 世紀にかけて 6 信徒会が設立された。①「聖十字架のペニテンシア会」1498 年、②在俗フランシスコ会 (15 世紀末)、③「キリストの受難会」1531 年、④「嘆きの聖母マリア会」1536 年、⑤「ピエダーの聖母マリア会」1578 年、⑥「ナサレのイエス会」1596 年である。それ以外の 14 団体はおしなべて 20 世紀中葉と末期に設立されている。1994 年の桜井調査時では、コフラディア総数は表 1 の如く 18 会であったが、現 2023 年では 2 会が増設され 20 会となっている。

次に、「キリストの道行き」を視覚的に訴える彫刻を載せたパソ 28 基の制作年代をみると、最古が 1498 年に製作された④「ベラクルスの聖母」1 基、16 世紀に⑦と⑧の 2 基、17 世紀には 18 基と多作され、18 世紀に⑥の 1 基。残る 6 基の内、20 世紀前半に①、②、⑨の 3 基、20 世紀末に⑩と⑮の 2 基で、製作年代・不明が⑬の 1 基となっている。全 28 基の内、17 世紀までに 22 基も作製された歴史的背景とは何であったのか。

17 世紀中にすでに存在していたパソの名称と製作年は以下の 17 基である。①「ゲッセマニの園の祈り」(1629 年)②「鞭打たれるキリスト」(1650 年)③「柱に縛られるイエス」(1619 年)④「Hecce-Homo」エクセーホモ「この人を見よ」；茨の冠をかぶったキリストの肖

像画 (1620 年)、⑤「ナサレのイエス」(17 世紀)⑥「カルバリオの道」(1614 年)⑦「磔刑への準備」(1679 年)⑧「許しを与えるキリスト」(1656 年)⑨「父よ、許したまえ、彼らはなすところを知らざれば」(1610 年)⑩「今日、汝は我とともに樂園にあり」(17 世紀)⑪「母よ、そこに息子がおろう」(17 世紀)⑫「主よ、主よ、何故私を捨てたもうのか」(16 世紀)、⑬「喉が乾く」(1612-1616 年)⑭「全てはなされた」(17 世紀)⑮「十字架より降ろされたキリスト」(1623, 1757 年)⑯「第五の苦悩」、「横臥するキリスト」(1631-36 年)⑰「聖棺」(17 世紀)。

何故、17 世紀に何故パソが多製作されたのであろうか。本稿では調査報告につとめ、その歴史的背景については、今後の研究課題として残しておきたい。

-
- 1 関 哲行「第六章 スペイン」河原温・池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』東京大学出版会、2014 年、pp.313-355.
 - 2 フアン・ソペーニャ『スペイン・ポルトガルを知る事典』池上岑男・牛島信明、他監修、平凡社、1992 年、pp. 261-262.
 - 3 関 哲行 前掲書、p. 315.
 - 4 上掲書 pp.315-319.
 - 5 上掲書 pp. 321-322.
 - 6 上掲書 p. 322
 - 7 上掲書 p. 322-323.
 - 8 上掲書 p. 325-326.
 - 9 上掲書 p. 322-323.
 - 10 上掲書 pp.329-331.
 - 11 上掲書
 - 12 V・R・ブリッカー著『カーニバル』(Victoria R. Bricker, *Ritual Humor in Highland Chiapas*, University of Texas Press, 1973) 黒田悦子・桜井三枝子共訳、人文書院 1986 年。
 - 13 川村信三「アレサンドロ・ヴァリニャーノ日本宣教政策決定の評価」『超領域交流史』上智大学出版、2009 年、pp. 218-241.
 - 14 木寺康太『岩波キリスト教辞典』2002, Pp. 446-447.
 - 15 東丸恭子「西欧中世における救済施設—施療院の系譜」橋口倫介編『西洋中世のキリスト教と社会』1983 年、pp.161-177.
 - 16 Valverde, J.Filgueira, *Historia de Compostela*, Ediciones Xerais de Galicia, S.A., 1970, P. 111.
 - 17 バルバロ、フェデリコ、『毎日のミサ典書』ドン・ボスコ社 昭和 42 年 (1967 年)、(解説) pp.352-486.より要点記載。

参考文献

Rumeu de Armas, Antonio, *Historia de la Previsión Social en España*,
1981, Ediciones “EL ALBIR”, S.A.

Valverde, J.Filgueira *Historia de Compostela*,
1970, Ediciones Xerais de Galicia,S.A.

新聞史料

El Note de Castilla, 1994.

El Mundo, 1994.

Guia de las Cofradias Valladoli

<https://www.valladolidcofrade.com>

2023年7月20日

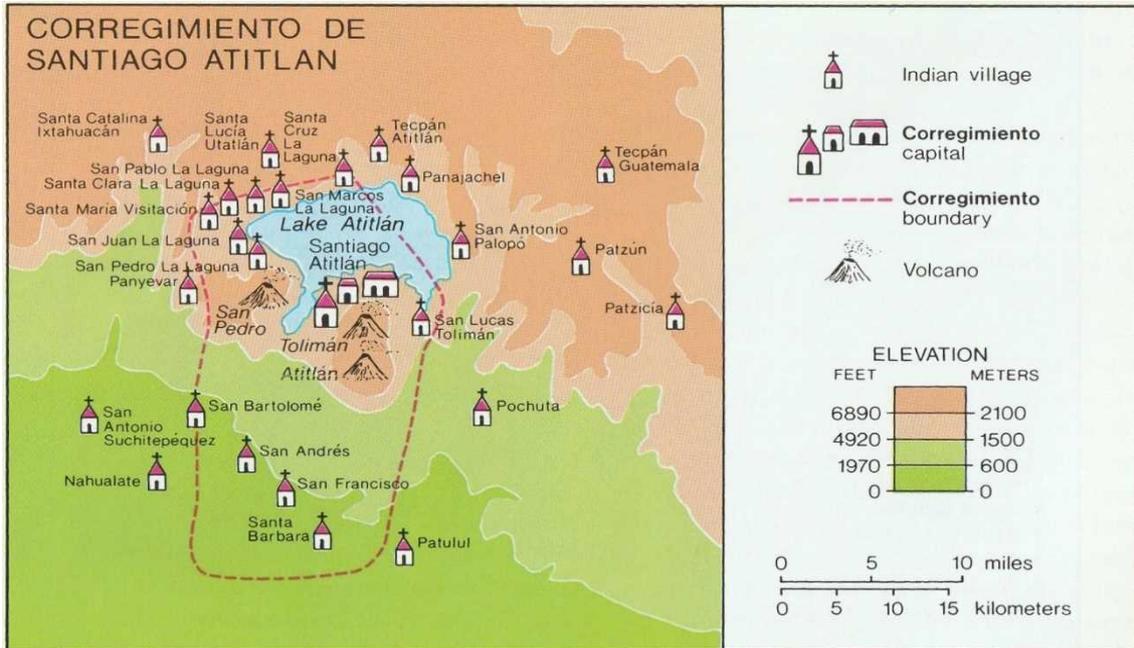
WikipediA

Cofradías penitenciales históricas de Valladolid

2023年7月12日

第四章 中米グアテマラ国ソロラ県、

マヤ先住民・サンティアゴ・アティトラン村の聖週間儀礼



出典： *Historical atlas of Central America*, Hall, Carolyn and Hector Perez Brignoli,
University of Oklahoma Press, Norman, 2003, p. 113.

第一節 グアテマラの政治的・社会的背景

第一章でスペインによる中米地域の武力的征服、第二章で精神的征服、第三章で、スペインのバジャドリ市における聖週間儀礼について報告した。第四章ではツトゥヒル・マヤ語圏に位置するサンティアゴ・アティトラン村の聖週間儀礼について報告していきたい。当該地域はグアテマラ総監領首府アンティグア市から遠隔地に位置し、アティトラン湖という天然要塞に守られ、スペインによる征服前の先住民社会の伝統的文化・習慣が比較的良好に残った自治体である。Orellanaによれば、征服初期段階から兄弟会の基本的要素が根付き、守護聖人祭日を祝い、毎日のミサにあずかり、病人を見舞い、死者を弔い、月毎に死者のためにミサをあげてもらった。兄弟会維持のために会員は供託金を納め神父の生活も支えた。供託金を預かる箱には3つの錠が組み込まれ、三人の会員宅で保管されたから、解錠するには三人が揃わないと開けないシステムであった。兄弟会には所属会員表があり、役員選挙や会合の取り決め、蠟燭代金や香などの支出記録が記載されていた。当該村で最古の台帳はサン・フアンの兄弟会のもので、1712年から始まっている¹。

兄弟会は先住民のアイデンティティを守り、精神的安定をもたらした。教会にとっても供託金で司祭を養い地方教会を支え、教会の支配的立場を確立しえた。記録が残り、教会法に従っていたからである。ところが急増する無許可兄弟会に対して、アウディエンシア旧法が発令された。先スペイン期の古い習慣のもとに偶像を崇拜し乱痴気騒ぎをし、酒におぼれ、仕事を放棄し、さらに貧しい先住民から集金し鶏を供出させている。特に無許可の兄弟会は排除すべきと不法兄弟会の除外が1537年3月20日、発令された (Auto 1637: f. 169) ²。

以下、アティトラン村落調査 (1991年～継続) を報告するものであるが、当該地域の先学研究を述べておきたい。マクブライドの『グアテマラ南西部における文化的・歴史的地理学』(1945年)、ソル・タックス編集『アティトラン沿岸諸村』(1968年)には後述ダグララスによる当該村の政治・経済・農業・宗教・教育に関する報告がある。メンデルソンの一連の著作 (1957, 1958, 1959b, 1965) にはマシモン儀礼についての詳述がある。さらに、同村の医療と治療 (Douglas, 1969)、民俗音楽と伝承 (O'Brien, 1975)、社会・経済史的研究 (Madigan, 1976)、社会・政治的研究 (Carlsen, 1992)、地域とグローバルな視点からみた汎マヤ主義 (Fischer, 1996) などのテーマで博士論文が著されている。筆者はメンデルソンの調査研究を主に引用している。世界観に関して隣村サン・ペドロにおけるマヤの助産婦を調査したポールや、織物を通して象徴的空間認識を研究したターンとプレチテル及びカールセンの興味深い論文がある。特に歴史学者オレリャーナ、文化人類学者セクストンなどの著述は重要である³。

コーヒー貴族の誕生と土地なし農民

欧米で第二次産業革命が進展し都市工業社会が出現し中米のコーヒー需要が高まった。中米諸国では1870年代にコーヒーの開発と輸出に基づく先進外国市場に向けた経済発展と、政治経済構造上の再編成が展開された。1830年代のコスタリカのコーヒー生産の開始が、50年代以降グアテマラに、70年代にエルサルバドルに、80年代にはニカラグア、ホンジュラスへ拡大された。コーヒー産業は1870年代に物質的繁栄を唱える自由主義者が積極的振興策をとり飛躍的拡大をとげた。スペイン植民地時代の制度的残滓は一掃され、コーヒー特化の資本主義発展に適応する経済制度へと改革された。大土地所有制と強制労働体系を保障する法的基盤が政府により与えられ、国有地は売却され教会は所有農地を失い、農民は共有地 (エヒード) から追放された。農民は、コーヒー荘園で土地をえて半封建的隷属的な小作となるか、土地なし農民として季節労働者とならざるをえなかった。彼らの抵抗は近代化された警察や軍により弾圧された。その後、欧米市場との統合によりコーヒー産業はブームをむかえ、第一次大戦までにグアテマラの輸出額に占めるコーヒーの割合は85.2%に達したが、

国際経済の景気に脆いモノカルチャー的経済体質が植えられた。同時にバナナ・プランテーションを通じてアメリカ資本が独占的に浸透し、今世紀には外資のコントロールが政治経済を支配した。植民地時代以来の古い貴族やファミリーに代わって新しいコーヒー貴族が誕生した⁴。

社会改革派と旧制度派の葛藤

第二次大戦後、民主化を求めるなかで、社会改革を唱える学者ホセ・アレバロが大統領に当選（1945-51年）し、ハコボ・アルベンス大統領（1951-54年）により改革政治がさらに急進化された。彼は社会福祉政策を行ない、農地改革法を施行し農民層の支持を広げた。しかし、共産党が労働党として再編され、アルベンスがソ連との関係を緊密化しようとする、その事がアメリカ政府を刺激し、さらに軍事費を削減するために労働者を武装化しようとした事は軍とそれに直結した寡頭層に警戒心を呼び起こした。そして、1954年CIA工作と武器援助をえた軍人カスティージョ・アルマスがアルベンス政権を倒壊し、労働者・農民組合活動を禁止し政治は分極化した。地主層と軍中心の旧制度が復活し極端な反共政策がとられるなか、先のアレバロとアルベンスの流れをくむ軍部左派がゲリラ革命路線をすすめて抑圧されている農民開放を目指した。ゲリラ勢力はエル・キチェなど土着住民の多い農村部へと支持基盤を拡大していくが、政府側は準軍事的右翼テロ組織を育成し、組合指導者や中道政治勢力および農民部へと体系的対ゲリラ掃討作戦を展開していった⁵。

カトリック教会は、植民地時代以降、軍部とともに寡頭支配体制を維持する重要な柱であった。教会は貧しいものに対して神の摂理として諦観を強要し旧秩序をイデオロギーの面から正当化してきた。しかし、1870年代の自由主義によりカトリック教会の権威が崩壊し経済的・政治的権力が失墜すると、地方への布教が手薄となりこれに替わってインディヘナの政治的・宗教的ヒエラルキーが強化されるようになった。1944年になるとアクション・カトリカの活動が開始され、布教僧の不在地方に世俗の宣教補助者（カテキスタ）を育成し、正統派に反する土着宗教的要素のある儀礼や伝統的コフラディア儀礼を破壊しようとする一連の運動が開始された。以後、ウビコ将軍（1931-44年）により、インディヘナ共同体はともすれば役人にコントロールされる事となり、従来畏敬されていた長老の権威が失墜しがちとなった⁶。

先住民弾圧の嵐吹く

さて、教会は60年代の第二バチカン公会議、68年のメデジンにおける第二回ラテンアメリカ聖職者会議で、「罪は制度的なものである」との見方を明らかにし、貧富の格差など、制度や構造が人間性を低めているとすれば、教会はその制度自体を変革する義務があるとして、社会的関与を正統とした。隣国エルサルバドル（次章）ではオスカル・ロメロ大司教ら

により社会正義を求める教会活動が力を増した。グアテマラでもエル・キチェ地方を中心に組織化が浸透した。こうした教会活動と意識向上から行動に出た農民は「共産主義者による破壊活動」として弾圧され、拷問と殺害を受けた。民衆とともに解放の道を歩む「人民教会」の神父たちは人権侵害を加えられ国外に追放された⁷。

1978年ルカス・ガルシア将軍が政権につくと反政府勢力への弾圧はさらに激化し、学生運動、農民運動の指導者が殺害された。パンソスでのケクチ・マヤの大虐殺(1978年5月29日)などの弾圧に対してエル・キチェの農民たちは国際世論に訴えて政府に圧力をかけるためにスペイン大使館を占拠した。外交慣例を破った政府軍は大使館員をふくむ農民たちを殺害した(1980年1月31日)。78年から80年までに犠牲者の数は5,000人に及んだといわれる。クーデターで成立したリオス・モント軍事政権は各県単位の開発行政と反ゲリラ作戦を軍の指導の下に連結させ「銃口とインゲン豆戦術」により、地方農村部を直接コントロールした。この作戦で100万人が住居を追われ、1万人をこえる農民が虐殺されるという悲惨な結末を招いたのである。こうして先住民男性はいやおうなく民間防衛隊(PACs)に編成させられ1983年には約70万人の先住民が組織化された。このような弾圧激化に対して先住民側は抗議声明としてイシムチェ宣言を発表した⁸。

1992年度のノーベル平和賞は、軍部により両親と弟を虐殺されインディオ復権を訴える先住民女性リゴベルタ・メンチュウさんに授与された。『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』によれば、キチェ・マヤの共同体からインディオ派遣団に指導者として参加した父親はスペイン大使館占拠事件のさなかに軍の砲火を浴び死んだ。母親は政府軍将校らによる拷問のすえ密林に遺棄され、弟は家族の面前で生きながら焼き殺されたと記している⁹。

グアテマラの社会経済構造の最大の特徴は、就業人口に占める農業人口の割合が58.1%と高く農業国の性格が強いことである。しかし、国内生産にしめる農業の割合は25%と相対的に低い。これは多数の零細農民の存在によるものであり、土地所有の状況が不均等であることによる。たとえば、35ヘクタール以上の大・中規模農園は農場数で2.6%に過ぎないが農地面積では66.3%を占めており、一方小規模農園は農場数では97.8%を占めるが、農地面積では33.7%を占めるにすぎない。とくに、4ヘクタール以下の零細農場が農場数83.3%を占める一方、農地面積では12.3%を占めるにすぎない。このような零細農民はとくにグアテマラの西部高原に居住する先住民人口からなっており、この地域は全国の土地面積の26%を占めるが、人口の60%が居住している。これに対し、肥沃な太平洋海岸部は、大・中規模の農場主に所有されておりここで砂糖や綿花などの輸出作物が生産されている¹⁰。

高地の人口75%は基本的に地方に存在し、人口2万人以上の「都市」はケツアルテナンゴなど3市にすぎない。この地方の失業率と不完全雇用率は高くグアテマラでも最も貧しい地域とされており、こうした地方でこそ兄弟団(コフラディア)組織が制度的に発展したとロハス・リマは説いている¹¹。

第二節 サンティアゴ・アティトラン村概観

ツトゥヒル語¹² マヤの古都チアア (Chiaa) のあった地とされるサンティアゴ・アティトラン村 (以下サンティアゴ村) は対岸村パナハチェルとともにアティトラン湖岸の交通の要所である。昔から高地と太平洋岸低地の物産の交換の地として栄え、人々は交易商人として活躍するかたわら、コーヒーや主食のトウモロコシとインゲンマメを耕作し、手製の木製小船で湖の漁撈に従事している。しかし、1950年代末のブラックバスの放流がなされてから、湖の生態系に破壊的な結果をもたらされ、湖の小魚などの魚介類に依存していた漁民にとって深刻な事態を引き起こしている¹³。観光地として名高いパナハチェルと、サンティアゴ村を結ぶ定期航路が運航されるにともない、外国人観光客が訪れ、当地の織物や木製物産を購入する金額も村の貴重な財源となっている。

公式人口調査 (1973年) によれば、人口16,641人のうちインディヘナが15,879人、のこりをラディーノ (インディヘナとスペイン人の混血) が占めている。中心地区人口が11,426人で、残りは村周辺に居住しており、識字者は1,690人である¹⁴。現在、人口は3万5千人前後と推測されている。

村は図1-1のごとく、パヌル (Panul)、シェチボイ (Xechivoy)、パチチャ (Pachichaj)、ツァンフユ (Tzanjuyu)、パナッフ (Panaj) などの五区 (canton) と、一付属村のセロ・デ・オロ (Cerro de Oro)、およびパナバッフ (Panabaj) とツァンチャ (Tzanchaj) など5集落より形成されている。16世紀に建立されたカトリック教会と小・中学校および市場と村役場を中心に、上記5区が取り囲み、また付属村が北に2集落が南に位置している。細い湾をはさんで、対岸にサン・ペドロ火山、後背地にトリマンとアティトラン両火山を仰ぎ見る形となっているため、平坦地が少なく、中心五区は人口増加にともない細分化され人家が犇んでいる。耕作面積が人口増加に反して狭く、いきおい太平洋岸低地 (以後コスタ) との交易業に就くか、コーヒー、砂糖、果物などの収穫時期に契約労働者となる者が多い。太平洋低地 (コスタ) の土地耕作に従事する村人の増大は、外部世界との広い接触をもたらしている¹⁵。



図1-1 サンティアゴ・アティトラン村中心部のコフラディアの位置
(作図 村上忠喜)

1. 民族衣裳は共同体のユニフォーム

グアテマラのインディヘナ共同体は、風俗・習慣・伝統をよく保持しているが、その最たるものが、各共同体ごとに決められた民族衣裳を着ている事である。民族衣裳の差異により、何処の共同体の出身かが一目にしてわかる。サンティアゴ村では、男女ともに花や鳥をモチーフとした見事な手刺繍が、男性の場合は七分ズボンの裾に、女性の場合はブラウスの衿や肩部分に施されており、その布地も白地に赤か黒の縦縞の入った手織りで出来ている。男性の普段着は、上に労働しやすいティシャツを着け、下に前述の七分ズボンを着て、ウエストを幅広の手織りサッシュで結び、その結び目を前に垂らしている。祭りの時の正装は、特別注文の赤地に黒縞のシャツを着てアルゼンチン製のボルサリーノの黒帽子を被る。役職者

たちは行列に参加する際に、背広や黒マントをはおり、権力の象徴である長い杖を持ち、手織り布で頭部を覆う（写真1-1、1-2）。

女性は厚手の織り布で、腰から踵までを覆う巻きスカートを着け、上に刺繍入りのブラウスを着る。そして多目的用途に使用できる美しく厚手の手織りの布を肩から垂らしているが、これは寒くなれば肩かけに、赤子を抱える時はおくるみに、買物をすれば袋代わりに、日昼の強い日差しには帽子代わりになる。祭りの時の正装はこれに、深紅の細帯を頭部にぐるぐる巻きに着け、白地に赤縞のゆったりとした七分コート（ポンチョ）を着けている。高位役職者夫人は、年代の古い繊細な肩かけ織物を宝石のように誇らしく垂らして行列に参加する。

彼女らはロウソク持ちとして常に行列の先頭を飾ることが多く、村人らの注目を集めながら行進する。ある役職者によれば、こうした衣装に何よりも見事な赤い髪帯を飾った妻と行列に加わる時ほど誇らしい時はないと言う（写真1-2）。



写真1-1 聖十字架のコフラディアの役職者たち：祭主（左端）、宗教職能者（中央）白ズボンと書記（左から1番目）および第1から第5までの役職者。



写真1-2 村の守護聖人サンティアゴ像を祀るコフラディアの祭主夫妻。（撮影：杉山立志）

行政的役職

村の専門職（薬剤師、教師、医師）や行政職の多くは、ラディーノ（スペイン人と先住民の混血、メスティソのことをグアテマラではこう呼ぶ）に占められている。

行政職は下記であるが、村長は任期があり選挙で選ばれ、国から承認され給料が支払われるが、その他は無報酬である¹⁶。

一、村長（アルカルデ・ムニシパル、el alcalde municipal）

- 二、副村長（シンディコ・プリメーロ、el síndico primero）
- 三、村長補佐（シンディコ・セグンド、el síndico segundo）
- 四、村会議員（プリメル・consejero、el primer consejero）
- 五、村会議員（セグンド・consejero、el segundo consejero）
- 六、村会議員（テルセル・consejero、el tercer consejero）
- 七、村会議員（クアルト・consejero、el cuarto consejero）
- 八、補欠（スプレんテ、el suplente）

上記の他に、県庁から任命され報酬付きの書記、会計官、役人、徴税吏が村役場に勤務し、国から派遣される診療所医師、郵便局員、小・中学校教員が居住する。

無差別虐殺

サンティアゴ村は1990年12月2日の軍部による無差別虐殺で13名の犠牲者を出した。この不幸な事件は国際世論に訴えられ、村南部に「平和公園」が設けられた。村長は軍分遣隊駐屯への反対者であり、これが村民の信頼を篤くしていた。さらに、ある人権擁護団体から当地にその趣旨のセンター設置の打診があった時、村の安寧のために断っている。この事も村民の支持を多く集めた。しかし任期終了を目前として村長は暗殺を仄めかす脅迫電話を受けており、軍部による威嚇ではないかと関係者は推測し慎重である¹⁷。

当該村には1936年から1964年まで予備軍部隊が設けられ、村民男性の大部が村内で軍役に務めた経験をもっている¹⁸。しかし現在では、国家警察（P・N）および、軍兵士の姿が見られず、村の治安はインディヘナらによる自警団により警護される。自警団は数人のマヨールと、その下で働く青年らによるアルグアシルにより成立し、一年交替・無報酬である。グアテマラ国内では夜間（夕方7時頃から翌朝まで）のひとり歩きは極めて危険であるとされているが、私の場合、祝祭という特別時期ということもあろうか、村中心部における夜半の単独調査に支障はなかった。また、私たちが村周辺部から真夜中の儀礼調査を終えて宿舎に戻る際に、7～8人からなる警棒を携帯した自警団がどこからともなく現われ、詰問を受けた事がある。中には覆面した男たちもおおり、私たちが危険な者ではないと判明すると快く通過させてくれた。このように、サンティアゴ村は不幸な事件を逆手にとり、国軍の介入を許さずに自治を守っている数少ないインディヘナ共同体である。

もとはといえばゲリラ対策として農村の装丁を徹廃し準軍事組織PACs（民間防衛隊）と呼ばれる自警団が体制側により強制されたが、1991年以来政府と左翼ゲリラの和平交渉が続けられ、この廃止がゲリラ側から要求されている¹⁹。ある宗教職能者がゲリラ側から依頼されてマシモン儀礼を行なった事が後になって軍部に知られ、妻とともに投獄の宣告を受けさらにプロテスタント（福音教会）に宗旨変えするように強制されたという報告がある

20。私の調査時、テリネル（宗教職能者）は軍部により脚部に受けた刀傷を見せその迫害について語っていた。

プロテスタントの布教とカトリック側の巻き返し

アティトラン湖周辺のプロテスタント布教は1920年代に開始され、1966年代では5セクトが数えられた。信者数の多い順から記すと、La Centroamericana, Bautista, El Buen Pastor, Pentecostal,そしてPrincipe de Pazである。La Centroamericanaだけで、全プロテスタントの約二分の一の信者を擁している²¹。

1960年代、村内カトリック信者は3グループに分けられる。約20%がアクション・カトリカに属しており、残りが「コストウンブレ（慣習）」を継承するコフラディア（兄弟団）派と名目上のカトリック信者にほぼ同数で二分できる。名目上のカトリック信者は、カトリック信者であると自認しているものの、教会でもコフラディアでもこれといった活動をしていない人々である。コフラディア派に関しては後述するように習慣的儀礼に参加しその組織の一員としてカルゴ（義務）を果たす人々である。しかし、コフラディア派と名目上カトリック派を分ける明確な線が引かれているわけではない。コフラディアの儀礼に参加せず、さりとて改革に熱心なアクション・カトリカの活動に消極的な信者の数も多い²²。

教区司祭および宣教補助員の話を経ると、現在の教区はチャコヤ集落からセロ・デオロ付属村まで、5人の先住民修道女と一般信徒協力者団体により支えられている。信者は圧倒的にツトゥヒル・マヤ人であり、ラディーノもいるが少数であり活動が希薄である。

信者はアクション・カトリカ派、中道派、そしてカリスマティコ派に三別できる。カトリック信者とほぼ同数のプロテスタント信者（Fundamentalista Evangélica）がおり26の礼拝堂が建設された。彼らは米国系プロテスタント教会で礼拝しつつ、カトリックの祝祭・儀礼・慣習を継続している。過去10年間というもの司祭の入村が不可能となりその期間にプロテスタント信者が増大し、かつての慣習派が「改宗」と聞いた。現カトリック教会の司祭はコフラディアとの関係は寛容をもってつとめると筆者に語る。彼は村人の宗教的表現として従来習慣に固有の価値と意義があると認めている。ただし、祭りのたびにアルコールの痛飲が繰り返される事には賛成できないが、とにかく司祭たちが不在となった10年間というものコフラディアの成員たちが教会を守ってきたのだから、それを評価したい。慣習派の多くが「カトリック信者」である以上、良い関係を継続したいと語っている。

教会入り口には1981年軍部により暗殺されたStanley Francisco神父の胸像がまつられている。彼は1935年オクラホマにて誕生、1963年叙階を受け1968年より13年間当地の布教に専念（享年46歳）。『隣人のために命を捧げるほど大きな愛はない』という碑文が見られた²³。就寝中に凶弾にあったとされる部屋には弾痕のあとが生々しい。殉教者たちと「失踪」した村人らの顔写真が村役場に貼られている。不穏な政情は現在においても進行形である。

アクション・カトリカの布教活動は二段階に分けられる。1940年代末に村外在住僧が小グループを率いて布教を開始したが、旧慣習などを否定する行動に出たためにカリスマティック系コフラディア派とことごとく衝突し、その葛藤が頂点に達したのが1950年代初めである²⁴。メンデルソン（1966年）によれば、マシモン儀礼を中止させようとしたカトリック僧がその仮面を押収し村民の激怒をかったと記している²⁵。第二期は1963年の北米カトリック宣教団の到着であり、彼らとコフラディアの間の葛藤が再燃するかの兆しも見えたが、1966年には「共生関係」が生まれていた。宣教団は当該村のカトリック宗教におけるマシモン儀礼の位置づけに必ずしも全面的に承認したわけではないが、カトリック教義との相違を強調せず、宣教補助者らにその点でもめごとを起さぬようにと指導した。

1992年8月の日曜ミサに私が参加した際に、主祭壇正面に向かって柩が置かれていた。私が葬式か「法事」のミサかと思いきその旨を在俗修道女に尋ねると、彼女が苦笑ともため息ともつかぬ表情で「あの柩には遺体は安置されていないのです。からっぽなんです。でもあれを取りのぞくと皆が怒るので仕方がないんです。なんでもあの中には先祖が入っているとの事です」という答が返ってきた。

- 1 本報告はたばこと塩の博物館の依頼を受け、1回目1992年春季休暇3～4月、2回目夏期休暇7～8月、3回目1993年春季休暇3～4月の3回と、1992年10月28日の聖シモン祭の前後期間（私費）、さらに大阪経済大学海外出張補助金を受け1993年8月と、全部で5回の調査で得られたデータを基礎として記述されている。

たばこと塩の博物館上野館長、半田昌之総括ディレクター、榊令子学芸員、および京都外国語大学大井邦明教授とブランカ夫人にはプロジェクト参加の機会と支援を与えられた。考古学班を主体とするグアテマラ宿舎では京都文化博物館の南博史学芸員やたばこと塩の博物館研究員の伊藤伸幸、柴田潮音、中森祥諸氏と村上忠喜夫妻に大変世話になった。グアテマラ在住の児島英雄夫妻にも実践的な貴重な忠告を戴いた。グアテマラ、ポボル・ヴフ博物館の故サンチェス館長夫妻、バリエ大学文化人類学ポーレマンセ教授夫妻、ルハン・ムニョスS I S研究所所長、マッケニ医学博士には多面にわたる支援と協力を戴いた。また、調査地では故ロメロ氏及びテモ兄弟（薬局店主・看護師）およびサンティアゴ村のサルバドル・ラミレス村長と多くの村人から暖かい協力を得た。上記の人々の協力のもとに調査できた事に深い感謝を捧げるとともに、本報告書が何らかの形で村人に役立つ日があれば望外の幸せと考える。

- 2 聖週間儀礼調査に参加した下記の大学生諸氏には深い感謝を捧げる。

Sres.: Brenda R. Tevalan Sagastume, Ana Rebeca Rubio, Marco Tulio Gomez, Ernesto Arredondo Leiva, Sergio Romero, Juan Luis Lara Galo, Max Eduardo Leiva、杉山立志（当時、国立東京農工大学学生）。” ” ” ” ”

- 3 McBryde, Webster

1947 *Cultural and Historical Geography of South-western Guatemala*, Institute of Social Anthropology Pub. 4, Washington, The Smithsonian Institute.
Douglas, William G.

1968 “Santiago Atitlán,” in *Los pueblos del lago de Atitlán*, Sol Tax (ed.),
Seminario de Integración Social Guatemalteca No.23.

Mendelson, E.M.

1957 “Religion and World-View in Santiago Atitlan,” Microfilm Collection of Manuscripts on *American Indian Cultural Anthropology* No.52, The University of Chicago Library,
Ph. D. Dissertation.

1958a. “A Guatemalan Sacred Bundle,” *Man*, LVIII-170.

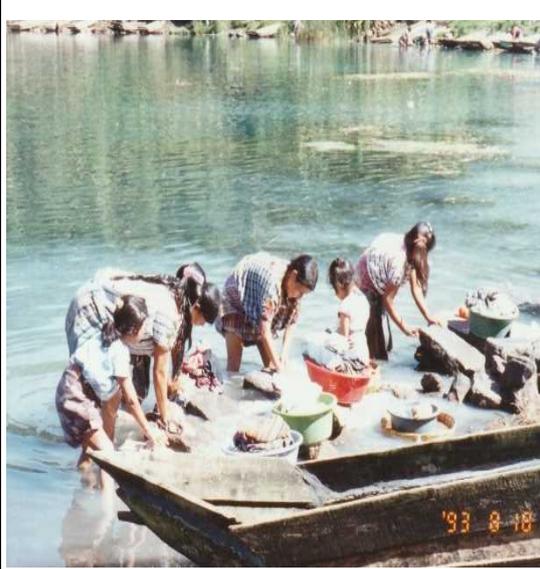
- 1959 “Maximon: An Iconographical Introduction,” *Man*, LIX-87.
 1965 “*Los Escandalos de Maximón*,” Seminario de Integración Social
 Guatemala, No.19, 1965.

博士論文としては以下 があげられる。

- Bill G. Douglas, *Illness and Curing in Santiago Atitlan, A Tzutuhil-Maya Community in the Southwestern Highlands of Guatemala*, 1969.
 Linda L. O'Brien, *Songs of the Face of the Earth: Ancestor Songs of the Tzutuhil-Maya of Santiago Atitlan, Guatemala*, 1975.
 Douglas G. Madigan, *Santiago Atitlan, Guatemala: A Socio-economic and Demographic History*, 1976.
 Robert S. Carlsen, *Of Bullets, Bibles, and Bokunabs: What in the World is going on in Santiago Atitlan*, 1992.
 Fischer, Edward Frederick, *The Pan-Maya Movement in Global and Local Context*, 1996.
 Paul, Lois and Benjamin D. Paul, *The Maya Midwife as Sacred Specialist: A Guatemalan Case*, in *American Ethnologist* 2(4), 1975, p.709.
 Tarn, Nathaniel and Martin Prechtel, *Constant Inconstancy: The Feminine Principle in Atiteco Mythology*, in *Symbol and Meaning beyond the Closed Community*, Gary H. Gossen (ed.), State University of New York, 1986, p.174 要約。
 Prechtel, Martin and Robert Carlsen, *Weaving and Cosmos amongst the Tzutujil Maya of Guatemala*, in *RES* 15, Spring, 1988, p.128.
 Sandra I. Orellana, *La introducción del sistema de cofradía en la región del lago Atitlán en los altos de Guatemala*, *América Indígena*, Vol. XXXV, 1975, pp.845-853.
 ———, *The Tzutujil Mayas*, University of Oklahoma Press, 1984.
 Navarrete, Carlos y Elsa Hernandez, *Ensayo sobre el sistema de transporte en Atitlan, Guatemala*, in *Estudio de Cultura Maya*, XVI, UNAM, 1985, p.215.
 Sexton, D. James, *Ignacio: The Diary of a maya Indian of Guatemala*, University of Pennsylvania Press, 1992.
 Carlsen, Robert, *Discontinuous Warps: Textile Production and Ethnicity in Contemporary Highland Guatemala*, in *Crafts in the World Market*, June Nash (ed.) State University of New York Press, 1993.
- 4 遅野井茂雄「中米・カリブ諸国の政治」細野昭雄・遅野井茂雄・田中高編『中米・カリブ危機の構図』有斐閣選書、1987年、25-27頁要約。
 - 5 前掲書、34-35頁、48-49頁要約。
 - 6 前掲書 50-51頁要約。
 Kay B. Warren, *The Symbolism of Subordination*, University of Texas Press, 1978, pp.87-88.
 - 7 遅野井前掲書、50-53頁要約。
 - 8 前掲書、58-59頁要約。
 小林致広『沈黙を越えて — 中米地域の先住民運動の展開 —』神戸市外国語大学外国語研究所、神戸市外国語大学研究叢書第16号、1986年、82、84頁。
 - 9 エリザベス・ブルゴス、高橋早代訳『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』新潮社、1987年、1-2頁。
 - 10 細野昭雄「主要国の経済発展過程と経済危機」『中米・カリブ危機の構図』有斐閣選書、1987年、140-141頁要約。
 - 11 Flavio Rojas Lima, *La Cofradía*, Seminario de Integración Social, Guatemala, 1988, pp.78-79.
 - 12 八杉佳穂「ツトゥヒル語」『言語学大辞典』（世界言語編第2巻）三省堂、1989年、1053-1054頁。
 - 13 Douglas, William G., *Varios Autores, Santiago Atitlán in Los pueblos del lago de Atitlán*, Seminario de Integración Guatemala, No.23, 1968, p.240.
 - 14 Santiago Atitlán, in *Diccionario Geográfico de Guatemala*, Tomo III, Francisco Gall (compilador), Instituto Geográfico Nacional, 1983, p.685.
 - 15 *Diccionario*, *ibid.*
 - 16 筆者がSíndico Primero（45歳）から聞き取り調査した際（1993年4月4日）の情報である。

- Douglas (1968) . pp. 260-261との相違が名称などにみられるが、聞き取ったままに記述した。
- 17 'Amenazan de muerte a ex-alcalde' in Prensa Libre, 22 de julio, 1993.
 - 18 Douglas, *ibid.*, p.243
 - 19 石井章「中米紛争と農業問題」遅野井茂雄編『冷戦後ラテンアメリカの再編成』アジア経済研究 1995年、第11章、329頁。
 - 20 Sexton, James D. (ed.), Ignacio, University of Pennsylvania Press, pp.8-9.
 - 21 Douglas, *ibid.*, p.254
 - 22 *ibid.*, p.254.
 - 23 メリノール会所属のスタンレー神父の遺体は当初、主祭壇の飾り衝立て地下に埋葬されたが、後に教会正面入り口右手の現位置に、ブロンズ胸像と碑文で埋葬された。血、骨、遺体の一部がオクラホマ州の生地埋葬されている。
 - 24 Douglas, *ibid.*, p.254.
 - 25 Mendelson, E. Michael, 1959b, p.57. Mendelson, E. Michael, 1965, p.66

第三節 儀礼の過程



2-1. アティトラン湖、昼間、女性の洗濯、日常的風景が、非日常の儀礼として下欄の夜間、男性役職者によりマシモンの着衣が洗濯される。以下 1993年撮影



2-2. アティトラン湖、夜間、宗教職能者の祈祷、非日常の風景、聖週間儀礼はキリストの復活とマム祖先神の復活を意味する。



2-3. 満月の下、マヤ神話の世界が蘇る。口にするタバコは嗜好品ではない。祖先神マシモンの着衣を洗浄する際の薫香。



2-4. 3泊4日をかけて、枝邑Chicacaoから熱帯果実を採集し帰村した若者。恰も、飾り祭壇のキリスト、聖母、サンティアゴ諸像を覆い、マヤ式祭典を見せることになる。

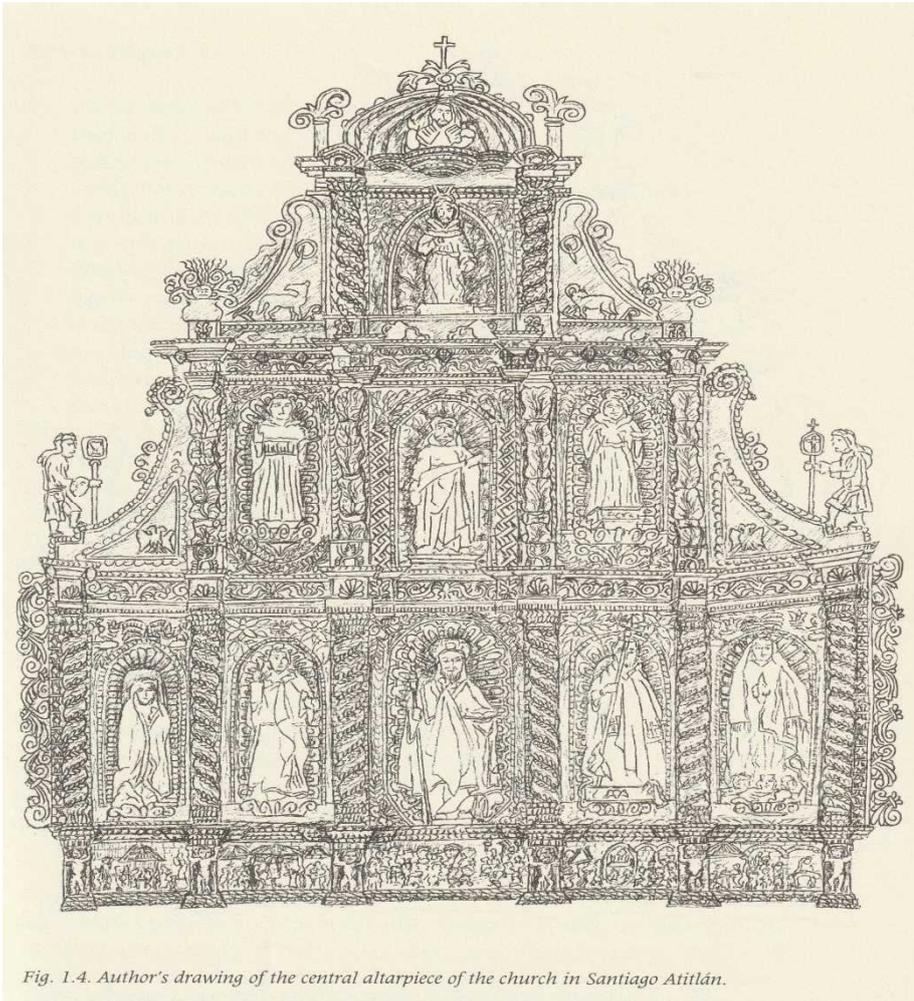


Fig. 1.4. Author's drawing of the central altarpiece of the church in Santiago Atitlán.

2-5 サンティアゴ・アティトラン教会内、飾り祭壇

出典： Christenson, A. J., 2001, p. 7.

1993年の聖週間は4月4日の枝の主日から始まり、4月11日復活の日曜日で終わった。注目させられたのは、前述第3章スペインのバジャドリド市（白人の町）や後述第5章エルサルバドルのチャルチュアパ市（混血の町）と異なり、第4章マヤ系先住民の村落サンティアゴ・アティトラン市の聖週間儀礼では、カトリック教会で典礼が行われると同時に、土着マヤの祭礼が地面下から噴出するかのよう表れる（前頁・写真2-4）。後述するように、あたかもカトリック儀礼と土着儀礼が同時に二重奏のように演奏・演劇化される風景が見られる。

聖週間が始まる前に、まずカトリック教会の主祭壇、広場、聖行列地点などを飾る熱帯果実や供花を求めて、三班の青年・成年の巡礼隊がコスタと呼ばれる太平洋岸熱帯低地へと出発する。この採集地域は植民地時代（あるいは前植民地時代）から、ツトゥヒル・マヤ王国領であったと思われる。主邑は高地（1600m.）に位置する現サンティアゴ・アティトランで

あったが、太平洋岸低地を付属村として従え、婚姻関係も結ばれていた。また貨幣としてとして先スペイン期で通用していたカカオの植生に適している。このような枝邑への巡礼事例は他の2地域には見られない(前頁掲載 写真2-4)。以下報告していくものとしたい。

1 前夜祭諸儀礼

熱帯果実採集隊の出発(3月31日水曜日)と帰村(4月3日土曜日)

午前8時、村役場正面回廊には、巡礼に出発する若者陣と彼らの背負い籠が並ぶ。この熱気は昨年から10数年ぶりに熱帯低地(コスタ)への巡礼が再開したからである。昨年は空白期間を埋めるかのように40数人が参加した。なぜ10年におよぶ空白期間が流れたのか?政府軍がグアテマラ内戦で山岳地地域に隠れるゲリラと加担するマヤ人に対して殲滅作戦を展開したからである。隣国エルサルバドルの「マタンサ(大虐殺)」と変わらない軍部・政府の暴力である。

隊長第二マヨールと楽士や若者19名を加えた総勢21人の一行は、村長の激励スピーチを受け、行政的、宗教的役職者たちへの挨拶し、出陣前のような興奮と緊張の面持ちである。軽装で寒暖の差や起伏の多い80キロメートルの徒歩巡礼に向かう。腰にさした木製警棒、帽子と革製サンダル、肩にかけた地厚手織り布、空の背負い籠、そして『ガソリン』と呼ぶクシャ酒を入れたプラスチック容器などが携帯する全てだ。本プロジェクトからは、グアテマラ上層階級を占める白人大学生のレベッカ(女性)とマックス(男性)が参加する。彼らの寝袋、水筒、満載リュック、登山靴の姿に比較すると、装備の多さに気付かされる。一行は村境を通過し、コーヒー栽培林へと進む。この旧道は昔から海岸部低地のツトゥヒル・マヤの枝村チカカオへと通じ、現在でも人々は頻繁に徒歩で山地と低地海岸部を産物交易のために往復する。

果実採集巡礼隊の帰村

午前8時、村境に出迎えが集まる。迎少年たちが絶え間なくマトラカを回し音をだす。そうしないと神様のご機嫌が悪くなるからだと言う。聖十字架のコフラディアのテシェル(女性役職者)2人は午前4時から大量のトウモロコシ餅「小タマル」調理に多忙。

坂下から果実隊が疲労の色濃いながら誇らしげな一行が見えてきた。背負い籠から深紅の「エビの花」、紫罗兰の花、艶やかな緑葉があふれ色彩豊かだ(写真4-2)。セントロ(村中心部)から賑やか



写真4-3 村境まで隊員を歓迎しに集まるコフラディアの役職者たちは威信を示す手織り布(スーナ)を首から垂らしている。

な楽隊とマヨール一行が威儀をただして出迎えに到着した。太鼓とチリミア笛を先頭に各コフラディア役職者たちが正装で迎える（写真4-3）。

果実隊は出迎えの人々のために、楽団の奏でる歓迎の曲にあわせて重い箎を背負ったまま跳びはねダンスをする。その後、セントロへ向かう。マトラカ少年を先頭に太鼓と笛、宗教的役職者、楽団、果実隊の順序で行列が進む。村役場と市場では村の衆が待ち構えている。10時頃、村役場正面回廊階段に箎が並び壮観である。赤い髪帯を巻いた若妻が誇らしげに夫の籠に香煙をふりかける。隊員以下は村長や役職者に挨拶していく。村長室隣室に控えた楽団が演奏音量をあげる¹。

10時半頃、一行は再び箎を背負い、第一マヨール宅へと凱旋行進を進め、マヨール宅敷地土間に保管された。村長・村役職者をはじめ、隊員たちに、プリキと呼ばれるビーフシチュウ碗と大量のトルティーリャが振舞われた（12時10分）。

2 聖週間儀礼の行程

【4月4日 日曜日 枝の主日】

聖週間が始まる。教会中庭では人々が棕櫚の葉を手にして、「ロバ上のキリスト像」が出るのを待つ。村長室では第一、第二、第三マヨールとコロソ椰子採集隊員11人が集合する。コロソ椰子は教会の主祭壇部正面の供物棚、教会広場、緑アーチに括る供花だ。果実採集隊から帰村したばかりの2人が再度コロソ椰子採集隊に参加する。内1人は幼児を亡くしたばかりの若い父親で神の怒りを慰撫し災いがこれ以上家族に降りかからないように祈願すると語る。フルーツ隊に比べると椰子採集隊員の平均年齢がやや高いと見受けた。

9時半、当プロジェクトから男子大学生セルヒオとエルネストが参加する。カベサ（長）J氏が村境の道傍に跪き祈る。10時、一行は第三マヨールに率いられ太平洋岸低地マサテナンゴ県のサン・バシリオへと向かう。全行程3日間でコロソ椰子を採集しほぼ睡眠をとらずに歩き続ける。果実採集隊より長距離にも関わらず1日短縮で帰村するから、この巡礼のほうは肉体的にきつい。

【4月5日 聖月曜日 教会清掃】

午前8時、各コフラディア員が教会内の側廊部に設けられたニッチ（小祭壇）の清掃にかかる。兄弟団専用の小祭壇の床面に莫菴を敷き、聖像の清掃を始めた。9時半頃、合図のもとに中庭噴水池で待機していた女性たちが一斉に水瓶を頭上にのせて教会内へと列をなして入り、床面に水を流す。若い男性たちが手にデッキブラシを持ち、一列に並び床面掃除をしていく。全てが規則正しく進む。

10時半頃、教会中庭の噴水池のそばに長老格役職者が教会所有の銀製聖具を並べ、古い銀器を磨いている。古いミサ聖典書や死亡記録の信徒帳、司祭服が虫干しにされる。私が信徒帳に関心を惹かれ頁をめくっている間は何も言われることはなかったが、内容をノートに

記そうとすると長老に叱責された。まだ、私への信頼度は「道半ば」であるようだ。教会と信徒館・全体の清掃は午前8時に始まり11時頃に終了した。統制のとれた作業であった。

【杉枝採集の出発】

午後6時半頃、第二マヨール以下総勢35人が第一マヨール宅に集合し、パナバフ集落方面へ向かう。ツァンチャ集落のコーヒー農園に到着すると、第二マヨールはチカカオ巡礼の時と同様に、地面にロウソク4本をたて祈祷し、神に杉枝を伐採の許可を請う。満月の光のもと、月明かりを頼りに杉の木に登り、アルグアシル2人が枝を切り下に投げる。待ち構える男たちが運搬しやすい長さに揃えそそえる。約1時間で作業が終了し、第二マヨールが携帯したクシャ酒とパティンという魚肉入りのトウモロコシ団子を皆で共食する。アルグアシルたちは、杉枝を村役場通路に置き、第一マヨール宅で夕食を振る舞われる。第一マヨール宅の家人は大量の食物調理に多くの人手と経費を必要としたであろう。役職者がこのような「祭りの出費義務」を果たすことで、彼らの村内におけるステータスは上昇する。

【仮面像マシモン聖衣の洗淨儀礼】

午後8時、聖十字架の兄弟団宅からマシモン衣装洗濯用に特化した三点の洗濯石が三人の団員に背負われ湖へ向かう²（夜9時）。行列は先頭にマトラカ少年、役職者夫人、そして黒マントに長い儀杖を手にした団員が続く。テリネル（宗教的職能者）は団員に囲まれて進む。彼はマシモン仮面像の使用済み衣類を収めた丸網袋を肩に担いでいる。赤い髪帯正装のアルカルデ夫人、他の団員夫人（テシェル）2人とその親族という構成である。私も参加し彼女らのように、ロウソクを胸の高さに抱え行進するが、バナナの葉で風よけを作らなかつたので湖岸から吹く風で灯がよく消える。この灯が消える毎に夫人たちは縁起が悪いとでもいう表情を見せるので私は肩身が狭い思いをした。自分で捧げ持ち歩いて初めて気付いたが、このロウソク照明は歩く人々の足元を明るくするには余りに位置が高すぎる。むしろ行列を見物する人々にロウソク持ちが誰であるかが判明するかのように顔を下から照らしている。夜間石だらけの道を転ばずに歩くために、団員夫人たちは幼い娘か孫に懐中電灯を持たせて足元を常に照らさせ、介添え役を連れ歩いた。

セントロで人々の声援を背に暗闇の中を進み所定の湖岸に到着した（午後10時頃）。満月が湖上に写り火山のシルエットが薄暗がり映えてさながら神話の世界を彷彿とさせる。ひたひたと押し寄せる波の音、ロウソクの灯に浮かび上がる陰影のある女性の横顔。四月とはいえ湖上の風は冷たく強く吹く。対岸の遠くから、時折り楽団の奏でる曲が聞こえてくる。どこかの兄弟団が終日雇った楽団に夜明けまで演奏させているのであろう。

平丸石が岸边に置かれると、第三・第四・第五の団員が腿まで裾をまくりあげ水中に入る。テリネルが祈りを唱えながら網袋からマシモンの衣類を丁寧に取出し3人に手渡していく。満月の光だけをたよりに洗濯がすすむ。水中の寒さから時折3人は岸边でテシェルらの差し出す酒を飲み暖をとる。香持ち男3人がしきりに洗濯男3人に香煙をかける。テリネルは

洗濯済み衣類を受けとると水を絞らず、そのまま広げビニール袋に丁寧に納めていき、代わりに網袋から「使用済みの仮面像衣装を各自に手渡し洗濯させる。運んできた衣類全ての洗濯が終了すると4人は湖の岸辺に跪き祈禱をささげる（午後11時頃）。

【マシモン像の妻マリア・カステリャナ仮面との対面】

洗濯済みの衣類を入れた網袋を担ぎあげるテリネルを囲み、人々はパナバフ集落を抜けテリネルの家のあるツァンチャ（Tzanchaj）集落へと3キロの道程を歩いていく。満月下、先頭にマトラカ少年、ロウソク持ち女性グループ、最後にテリネルや第三・第四・第五コフレードたち男性が行列をなし、コーヒー園の続く未舗装道を進む。真夜中にテリネル宅敷地に到着する。祈禱所にはマシモンの妻像マリア・カステリャナ仮面がガラス箱に祀られている。私は米人調査研究書や論考を読んで現地調査に就いたが、「マシモンに妻が居た」とは書かれていない。「妻」はマシモンと相似した木製仮面でタバコをくわえ仰向きに寝ている。テリネルは香とロウソクをガラスケース正面床に置き、祈りを唱え始めるが、感極まって泣き声となる。大きな目から涙があふれ、人々はツトゥヒル・マヤ語で語られる彼の祈りの言葉に聞き入っている。暖かいココアが振る舞われると寒さと空腹が癒され、私たち一同は翌朝までここに留まった。それにしても、これはキリスト復活祭と、どう関係あるのか。

【4月6日 聖火曜日】コロソ隊帰村

午前中、コロソ隊が太平洋岸低地（コスタ）から、教会主祭壇を飾る熱帯果実コロソ（椰子の実）を担ぎ帰った（冒頭の写真12-4）。

午前9時半、マトラカの鳴る音が聞こえ、コロソ椰子の実採集部隊が帰村する。一行は長距離を睡眠を取らずに行進しただけに、疲労の色濃い表情であるが、村人の歓迎で元気が蘇る。役職者婦人（テシエル）らがコロソに香煙をかけ隊員に飲み物を振舞う。一行は第一マヨール宅へ向かうと、先着・熱帯果実とともに保管され、香煙で浄化される。村人らによれば、熱帯果実が熟された状態にならないと不吉だという。これらは、教会の飾り祭壇前に設置された、供物棚につるされる。

夜間8時頃、マヤの祖先神マム、すなわちマシモン像の再生

午後6時40分、聖十字架の兄弟団宅。宗教職能者・テリネル一行が、昨夜、湖水で現れたマシモン衣類を聖十字架団員宅へ運ぶ。室内大机の上には、マシモン衣類を入れた網袋が置かれ、新調の黒いボルサリーノの帽子が二つ重ね置きしてある。二重・帽子の間から絹スカーフが垂れている。8時、村長と行政職者5人が訪れ上席に着座すると、部屋の窓と扉が中から閉められ電灯も消された。テシエルが手にするロウソクの灯だけが照明となる。室内には聖十字架団役職者たちの他に見物者が立錫の余地もなく詰めている。玄関口・土間で楽士たちが美しいメロディと歌を始める。

暗がりの中、大机に梯子がのせられると、団員が屋根裏からマシモン仮面像構成材を降ろす。床面にゴザが敷かれ、テリネルと第一、第二団員が入る。すると、もう1枚の大きなゴ

ザが彼らの頭上に被せられる。人々の目は遮られた。上下のゴザの間でマシモンが構成されていく。他の団員が上のゴザの四隅を腰の高さで持っているが、見物客がこのゴザの下に潜りこんだり、ゴザをめくって中を覗いたりすることがないように警備する。

ゴザの端が垂れて全体を覆うので、下で何が行なわれているのか私たちには見えない。大机の上にある網袋から第四団員（ルカフ）が、手際よく衣類をゴザの中の人間に手渡していく。最後に黒帽子にスカーフを重ねたものを手渡す。マシモン像の甦りである。テリネルが汗びっしょりで睡眠不足と飲酒で疲れた表情でゴザから現れる。アルカルデが彼らと役職者達やテシエル達に飲み物をふるまう。狭い室内は人いきれで空気が圧縮して熱い。やがて照明がつくと上ゴザがとり払われた。

今年のマシモンが「誕生」したのである。テリネル以下団員一同は満足げに見下ろしている。ロウソク持ちのテシエルがマシモンの右手に移ると（写真4-7）、窓や扉が開かれ新鮮な空気がさっと入りこむ。村長以下、満足気にマシモンをみて退場する。この間、歌い演奏する楽士らの演奏が参加者をして至福の思いにさせる。この村、音楽・彫刻・絵画など芸術的才能があふれていると。トゥン太鼓とマラカスなどのリズム楽器が祝祭の華やかさを演出する。サンティアゴ・アティトラン村の「神」が、キリストに先駆けて再生された。

【4月7日 聖水曜日】

午前10時頃、第一マヨール宅に熱帯果実を盛った平型籠22個にが並ぶ。人々は青いプラタノが熟しているかチェックする。熟していれば安堵、熟していなければ、それは、巡礼隊員同士が喧嘩や静い・禁欲を犯すなど、タブーを遵守しなかったからとされるからだ。かつて、こうしたタブーを犯した男は村の牢獄に入れられたという言い伝えがある。コロソは15本あった。果実採集隊の若者たちは服装を着替え、巡礼時携帯した警棒のかわりに約30センチ竹のキープと呼ばれる棒を右手にもち、左肩上に果実満載の籠やコロソ椰子を抱えてセントロへ行進する。

村長室入口には杉枝葉アーチが置かれ、アーチにはコスタで採集されたバナナ、メロコトン、子鹿の剥製などが吊り下げられている。一行は、大きな上質ゴザの上に果実満載の籠とコロソを並べる（12時30分）⁴。ほどなくテリネルの肩に担がれたマシモン一行が到着し、ゴザの中央に村長と対面するかたちで寝かされる。村長の大机には第一シンディコをはじめ行政的役職者が着席し、村長の右手に全兄弟団の団長が座す。に行政的役職者と宗教的役職者の長が出席している。第一マヨール、果実隊隊長の第二マヨール、宗教職能者テリネル、聖十字架の兄弟団団員と夫人たちが誇らしげに座している（写真4-8）。隣室では音量を最大限にした楽隊が耳を聳せんばかりに演奏し、入り口付近には村長室内を見ようと押しかけた村人で鈴なりである。市場と役場が隣接し買物客兼見物人が役場回廊を埋めつくす。村長による隊員へのねぎらいの言葉が終了すると、隊員たちは誇らしげに再び供物を担ぎ、テリネルはマシモンを肩にのせ、楽隊を従えて教会へ向う。祭りの熱気が最高潮に高まる。

教会堂内に入ると驚いたことに、聖人像が祀られている巨大な飾り衝立てが、一面、供物棚で覆われた状態だ。4本柱間にワイアがはられ、ここに採集供物が括られ（写真4-9）、一方、飾り衝立内のキリスト像、聖フアン像、聖母像の三像が衝立から降ろされ、輿（アンダ）に移されている。

さて、教会広場まで行進したマシモン一行は、驚いたことに、教会に入らずに教会広場の礼拝堂へと進む。礼拝堂内部には緑色の柱が設置され、この柱に緑葉の茂る枝がX型に交差して取り付けられている。マシモンがテリネルの肩の上で楽隊の曲にあわせて優雅に踊りながら礼拝堂に入ると、マシモン仮面像はこの柱に括りつけられた。礼拝堂で楽団員が演奏を開始。香の煙は参詣者が後を絶たぬことを示す。群衆はこの「復活したマシモン像」を見るために広場を埋め尽くしている。マシモンは復活した。



写真1. 左端の木製マトラカ音で民衆に祭事を知らせる。



写真2. マヤの祖先神マムの復活



写真3. 広場を埋める群衆は、キリストと祖先神の復活を称える。



写真4-10 丸屋根礼拝堂内で緑柱とX型緑樹枝に縛りつけられるマシモン像（撮影：Juan Luis Lara）。



写真4-11 巨大な供物棚は献納された果実とコロソ椰子で構成され、キリスト教聖人像を祀る飾り衝立ては「遮蔽」されキリスト教色が払拭される。正面にたつのは果実採集巡礼隊の隊長を勤めた第二マヨールで、その指導力で隊員の尊敬を集めた。（撮影：Max Edwardo Leiva）

【4月8日 聖木曜日】

カトリック儀礼とマヤ儀礼の二重奏は、盛り上がる。カトリック聖週間儀礼といかなる関連があるのか不明ながら、午前先中に、聖フアンのコフラディアで先スペイン期的要素の強い「鹿の踊り」「聖マルティンの踊り」そして「サンタマリアの踊り」が行なわれる。③午後、教会中庭では母親が付き添い十二使徒に扮した少年による「最後の晩餐」の場面。さらに④深夜には市場・南北に走る道路上で聖フアンの疾走儀礼が成年男性たちにより夜を撒して行なわれる。以上の4点を時系列順に報告する。

聖木曜日の夜、キリストは翌日、磔刑になることを予知しゲッセマニの園で血の汗をかいで祈ったという。第3章のスペイン、バジャドリー市ではその情景を映すパソ（山車）が市内を練り歩いた。ひるがえって、スペイン人伝道によるマヤの村落教会内では忠実に聖書の場面が演じられていく一方で、予想もつかない儀礼が聖フアンのコフラディアで行われる。以下、箇条書きで示していこう。

- ① 午前8時半、聖ニコラス団員が教会内正面に「嘆きのマリア」「道ゆきのキリスト像」「聖フアン像」を並べ置く。教会内の主祭壇部に上質ゴザが敷かれ、紫色ビロードのクッションが置いてある。人々はこれを指してスペイン語で「キリストの頭（Cabeza de Cristo）」と呼んでいる。午後ここで洗足の儀礼が行なわれるための準備である。

- ② 鹿の踊り・^{サン}聖マルティン・サンタマリアの踊り

午前9時、サン・フアン宅では役職者夫人たちが床に座し、大机に男性コフラーデが座り、

宴会食プリキ（肉・野菜煮込みシチュー・トルティーヤ）を食べている。床には新しい松葉が敷かれ清浄な香り。後方に伴奏楽士7人が控えギター演奏に合わせ美しいハーモニーを聞かせている。ギター奏者3人、トゥン太鼓、チリミア笛、マラカス、コンボ太鼓（撥打ち）など各1人ずつ7人構成で、儀礼伴奏グループである。（写真4-12）。

やがて役職者夫人3人が祭壇に進み跪き祈祷を捧げる。アメリカ人青年たちが入室するがその内の1人はツトゥヒル語を少し解し、楽士の中に加わりコンボの演奏に入る交渉をした。聖フアンの宗教職能者はナベイシルと呼ばれており、酒に酩酊しているのか薬物を飲んでいるのか不明であるが恍惚とした表情で曲に合わせてステップを踏んでいる。香炉がしきりに振られる。10時頃プロジェクト隊員5人も到着し、各自寄進をするので俄然アルカルデが張り切る。ここにはマシモンを祀る聖十字架コフラディアのように大勢の村人が来ることもなく、当該コフラデーたちとアメリカ人および私たちだけである。アルカルデが頭のスーテを巻きなおすと楽士たちの演奏に力がこもり、第六、第七団員が部屋の隅（図3-6のHの位置）に積まれた鹿皮をとりあげる。第六団員が雄鹿の皮を頭からすっぽりと被り、第七は雌鹿の頭部つき鹿皮を頭からかぶり、右手に小動物・剥製を持ち、第六コフラデーの後に従う（写真4-13）。両者は対になり膝を折り小腰をかがめてユーモアのある様子で踊り、やがて中庭に出るとまたしても円を描いて踊る。彼らは室内に戻ると扉にむかって跪き十字を切り、祭壇の前と大机の前で同じ動作を繰り返す。



写真4-12 宗教儀礼につきもの美しい民族音楽を奏でる楽士たち（ギター、マラカス、トゥン太鼓）は一種の専門職だ。奏でられる和音とリズムは参拝者を至福の時間へと魅了する。



写真4-13 聖フアンのコフラディアでは第六と第七コフラデーにより鹿の踊りがされる。

その後、団員たちが窓や扉を閉め室内を暗くする。アルカルデ夫人が小ロウソクを皆に配って回る（写真4-14）。祭壇（向かって）左手に錠付き木箱があり、ナベイスルはそこから緑色ビロードの長枕風の包みを取り出す。これが聖マルティンと呼ばれるご神体である。

次にナベイスルとアルカルデが対になって踊る。ナベイスルは包みを、まるで眠る嬰兒を抱き捧げるようにして曲に合わせて円を描いて踊ると、後につき従うアルカルデは小座布団に小動物の置物をのせて踊る。2人とも顎下から細長い布を垂らし、胸の高さで折り曲げたところに各自の捧げ物をかかっている。

ナベイスルの恍惚とした表情と和音の美しいメロディに、居合わせた者は幸福感に浸る。ロウソクの燈がきらめき、嬰兒の誕生を祝福するような至悦の時が室内にみなぎる（写真4-15）。

祭壇（向かって）右手に天井から吊された木箱があり、ナベイスルはこれを開けてサンタマリアと呼ばれる物を出すと、先程のように白布の上にこれ



写真4-16 「サンタ・マリアの踊り」が続く。赤いビロードのクッションは「子宮」を、垂れた紐は臍のおを、2つの袋には男性の種と女性の種が別々に入っている。これは、人類創世の神話に基づいた



写真4-14 秘儀「サン・マルティンの踊り」の間、窓・扉は閉じられ電気照明は消される。暗闇の中でテシエルたちの持つロウソクの灯のもと、幻想的な神話の世界が再現される。



写真4-15 ご神体「サン・マルティン」と呼ばれる緑の包みを捧げ踊る宗教職能者（右）は、祭主を従え恍惚とした表情で踊る。

をのせ、円を描いてステップを踏む。サンタマリアとは深紅のビロードのクッションの上に白い天使のような顔が三つ並んでいる物をさす(写真4-16)⁶。アルカルデは25センチ位の銀色十字架の大小を捧げ持っている。ナベイシルとアルカルデが時計の針と逆方向に円を描いて踊る(10分位)。2人は祭壇(北)の前で跪き大机(西)へと膝行するが、その時ナベイシルは陶酔の表情から一瞬素面に戻り⁷、コフラーデに机の下のトゥン太鼓を叩くように指示し、再び陶酔の表情に戻り、やがて踊りが終了した。居合わせた人はサンタマリアに参拝する。聖フアンにおける鹿の踊り・聖マルティン・サンタマリアの踊りの儀が全て終了したのは午前11時半頃であった。それにしても、一体この儀礼がキリストの磔刑前夜・聖木曜日といかなる関係があるのだろうか。なぜ、サン・フアンのコフラディアでは教会儀礼とは別個のマヤ独自の儀礼がなされるのだろうか。

③ カトリック教会中庭における最後の晚餐

午後2時20分、「最後の晚餐」劇が教会中庭で、十二使徒演じる少年達が大テーブルに神妙な顔を座している(写真4-17)光景から始まった。少年たちの後に母親たちが心配げな表情で床に座している。ベネディクト会神父がツトゥヒル語で聖書を読み上げていく。この日アメリカ人教区司祭はセロ・デ・オロ教会へとミサをあげにいき、代わりにツトゥヒル出身の神父が司式につとめている。果実採集隊員の若者たちが第二マヨールの命令下、キープ棒を片手にして12回異なるメニューの皿を厨房から運んで来る。十二使徒に扮する少年たち(写真4-17)はご馳走に手をつける事は一度もなかった。背後で待機する母親たち(女性親族)が、全て皿のものを携帯したバスケットの中に入れていく。主に肉と魚の料理がトルティーヤ付きで交合に差し出された。かくして「最後の晚餐の儀」は終了した(午後3時38分)。この間、南回廊には聖器具係達、教会聖歌隊、吹奏楽団と、サンティアゴ村の役職者一同が揃っているが、マシモン楽士団の姿は見えない。神父は六人の男が支える天蓋の下で、祈りの言葉を唱え、人々に祝福を与えながら中庭北門を出て教会を外周し、正面入り口から主祭壇へと向かう(4時頃)。

教会内では神父が紫色クッションの位置に進む。十二使徒に扮した男たちの足を一人ずつキリストに扮した神父が洗っていく。(4時50分～5時10分)。神父はツトゥヒル語でミサを司式しキリストの血と身体を顕現する葡萄酒とパンを



写真4-17 教会の中庭では聖書に基づきキリストと12使徒の「最後の晚餐」劇が、12人の少年により演じられる。背後に母親が控えている。七・五・三のような風景である。(撮影：杉山正幸)

口に含む。鈴の音にあわせて一同跪き、祈りを捧げ周囲の人々と挨拶を交わす。和やいだ雰
囲気が流れる。やがて聖体拝領のため人々は長い列を作り祭壇へとすすみ神父から聖体を
受け自席に戻り祈る。かくしてカトリック教会の聖木曜日のミサは終了した(午後5時半頃)。

④ 聖フアンの疾走儀礼

この聖フアンの疾走儀礼は、正確には木曜日真夜中より金曜日未明にかけて行なわれ
る。聖フアンがキリスト受難の報せをいち早く聖母マリアに知らせたという聖書に由来し
ており。聖フアン像は、棕櫚の葉兜を被り青色コスチュームを着けている(写真4-18)。
聖金曜日午前1時、青色衣装のサン・フアン行列が以下の四聖像を担いで教会を出る。
マトラカ少年→太鼓・チリミア笛→ロウソク持ちコフラーデ夫人の順番である。
以下の四像「道ゆきのキリスト」「嘆きの聖母」「聖ニコラス」「聖フアン」の順→聖器
具持ちの男性→黒ボンチョのコフラーデたち。やがて行列は二手に別れ南北に走る市場
道路の北辻に「道ゆきのキリスト」、「聖ニコラス」、「聖フアン」の3像が残る。一方南
辻には嘆きの聖母像が、走って来る聖フアン像に背中をむけた形で置かれ、この一角にマシ
モン楽士団が陣取り演奏に備え、聖十字架のコフラディア団員たちとコフラーデ夫人が像
周囲にロウソク持ちとして座している。

北辻にいる4人の元気な若者が聖フアン像の輿を担ぎあげると全力疾走で聖母像にむか
って一直線に道路を駆け抜ける。少年たちが威勢よくマトラカを鳴らし輿に遅れまいとつ
いていく。往復10分ほどで戻ってくる輿担ぎ四人はキリストと聖ニコラス像にむかって聖
フアン像を2回勢いよく揺すりあげ、再び氣勢をあげて聖母像に向かって疾走していく。こ
の往復が未明五時頃まで幾度もくりかえし行なわれた。聖フアンが聖母にキリストの受難
を急いで知らせたという聖書の場面を表現していると。悲しい知らせなのに、ずいぶんと
派手でバカ騒ぎのような演劇である。

【4月9日 聖金曜日】

受難への自己同一化

正午、少年から壮年にいたるまで男性は皆長さ50cm.、70cm.、120cm.など様々なロウソク
を手に行っている。第一ピシュカルやアルグアシルらが教会内祭壇床に巨大なキリスト磔刑
十字架を斜めに置いている。これを起立させるために十字架の背面と前面から10本位の長
柄の二又で横木を支え、二又の先端は包帯のように白布で巻かれている。長梯子が横木の両
端に据えられ、2人の男が梯子を横木に白布で結び固定すると、二又を取りのぞき梯子だけ
で十字架を起立した状態で支える。人々の目にはよろよろとたてられる十字架上で弱々し
いキリストが苦悩で身をよじらせているようにみえる。物悲しいトランペットの音。キリス
ト磔刑像一点に人々の視線が収斂され、その瞬間、堂内を埋め尽くした人々が感動のどよめ
き声をあげる。やがて目を伏せ敬虔な面持ちで祈りを口々に唱えていく姿は、キリストの受
難苦の極致に自己の苦悩を重ねキリストに同一化しているようにみえた(写真4-19)。

荘厳な寝棺行列



写真4-19 美しく装飾された花絨毯と緑アーチの道を、荘厳な寝棺のキリスト行列が進む。



写真4-20 重い寝棺を担ぐ若者たちは揃いの赤いシャツを着て、一晚中村内を一巡し、キリストの受難に自分の難行を介して一体化する。

磔の足元には母マリア像とマグダラのマリア像⁸が据えられる光景は忠実な聖書の再現。その後、キリスト像は十字架から降ろされ、巨大なガラス棺に寝かされた。寝棺の聖行列はゆっくりと教会から村内を一昼夜かけて巡回する。柩の担ぎ手は青年たちでサンティアゴ村男性揃いの正装を着けている。赤と黒の細い縦縞の長袖シャツに白地に赤い縦線の入った手織り布製の七分ズボン、頭には高価な黒布帽子をかぶっている。担ぎ手青年たち50人ほどは10歩進んで7歩下がるといった歩調で進むので教会の階段口に出るだけでも1時間をかけている。若者たちは気心が知れているからか呼吸をあわせて階段を一步一步と慎重に降りていく。下がり終わるまでは重い寝棺のバランスを失うと総崩れになるので全員で必

死に歩調を合わせる。アーチ⁹下の地面には色とりどりの花びらで聖画を描いた絨毯が敷かれている。この上を行列は少年十二使徒→ローマ兵士たちと聖器具もち→コフラーデとその夫人たち、女性聖歌隊→寝棺のキリスト→嘆きのマリア→聖フアンの順序で進む（写真4-19, 4-20）。

午後5時半、寝棺行列が教会広場の十字架にさしかかるその時、マシモン礼拝堂入り口でテリネルの肩にのったマシモンがスカーフをなびかせて行列の中に割って入り、キリストの後に道化師のように騒々しいながらも神妙についていく。花絨毯をいく荘厳な寝棺行列を見入る観衆には毎年わかりきったシナリオ通りとはいえ、この奇妙な闖入者マシモンの



写真4-21 広場を埋め尽くす大群衆の喝采を浴びて華々しく登場するの

登場を喝采しはやしたてずにはいられない。祭りのクライマックスである（写真4-21）。

トリックスターのマシモンを従えてキリストの寝棺行列はゆっくりと厳かに進む。やがて最後のアーチに寝棺がさしかかる、やにわにマシモンはキリストを追い抜き全速力で市場に降り、小学校脇を抜け坂道を走り、石ころだらけの道をスカーフをなびかせて走りに走り抜ける。少年や子供たち、男たちが、マシモンに遅れまいとテリネルをとり囲み一緒に走りに走る。こうしてマシモンは聖十字架のコフラディアへと戻った。午後6時であった。一方、寝棺行列はまるで何事も起こらなかつたかのように荘厳な歩調で村内を順行していく。

スペインのバジャドリ市、エルサルバドルのチャルチュアパ市、いずれにもこのようにけたたましい闖入者は現れていない。一体、聖週間をツトゥヒル・マヤの民はいかに理解し、受容したのであろうか。そして、この奇習はいつ頃から、行われているのだろうか。マシモンは何を意味するのだろうか。

マシモンに関わらない限り、どの儀礼も聖週間儀礼の「約束事」に叶っている。筆者の頭の中は試行錯誤し混乱する。

【4月10日 栄光の土曜日】

ペニテンシア（難行）行列の帰還、早朝6時、寝棺のキリスト行列一行が一晩かけて村内を巡回し戻ってきた。前日嘆きのマリアと聖フアンの両像が寝棺につき従っていたが、聖フアン像だけが棺の後に伴っており、マリア像は見られない。重い寝棺を肩に担ぐ贖罪の行進

が終わり、寝棺は教会内部を一巡し床に降ろされた。担ぎ手たちは肉体的疲労とひきかえに精神的に満たされた表情で解散していった。

サンティアゴの兄弟団宅では、聖母マリアが苦しみを忘れるために「自殺未遂」か？

午前9時サンティアゴのコフラディアでは湖岸隣村サン・ホルヘ・ラ・ラグーナより楽団が雇われて軽快なダンス音楽を奏でている。松葉の敷きつめられた床の上で泥酔者が前後不覚に寝そべっているかたわらで、男性3人が手をとって輪をつくり踊っている。やがて女性3人も同様に踊り始めるが、1人は深酒で眼がすわり動作が朦朧としている。祭壇には昨日の寝棺行列から抜けでた嘆きの聖母マリア像がいつの間にか騎馬上のサンティアゴ像とサクラメント像の間に祀られている。聖母は胸前方に組んだ両手に短刀を握りしめている。余りに不思議な姿なので、兄弟団員に質問した。すると、その答にびっくりした。「息子を失う悲しみで自ら命を断とうとしている表現である」と。カトリックで禁じている自殺がここでは公然と聖週間に表現されている。さらに、聖母はこの悲しみを慰めるためにサンティアゴのコフラディアで一晩中踊りあかしているのだと村人は語る。踊りは神に捧げる祈りの一形態だ。くたびれ果てるまで踊り、睡眠不足と泥酔で踊り倒れる行為が神への奉納となる。やがて、聖母はサンティアゴのコフラディアで一夜を過ごす、騎馬姿のサンティアゴ像に護衛され教会に夕方6時頃戻った。入れ替わりに聖ニコラス像が教会の留守番を終えたかのように自分のコフラディア宅へと戻っていった。

【4月11日 復活の日曜日】

直会の儀

早朝ミサ。祭壇部の花は赤紫から純白の花に統一される。午前9時半頃果実隊とコロソ隊の若者たちが供物棚を解体し、棚の果実類を籠に盛りつけている。供物果実を示す金色や銀色のラベルがしてある。これらが役職者たちに配られ直会の儀となった。午後5時に騎馬上のサンティアゴ像は自分のコフラディアへと帰宅した。以上を章末に「表5-1 サンティアゴ・アティトラン村の聖週間儀礼の行程表」としてまとめた。さらにマシモン儀礼に着目し、マシモンの登場する5日間（4月5日から9日まで）を、教会などの儀礼と対照してまとめたのが「表5-2 マシモン儀礼と教会儀礼の対照表」である。

注

- 1 サンティアゴ村の民族音楽グループはコフラディアなどを主体とする伝統的儀礼に必ず伴するが、教会内賛美歌隊や行政的行事などに演奏する吹奏楽団とは異なっている。村内にはツァンフユ区のティハシュー（Tijaxu）とパナフ区のマヤ民族音楽グループ（Grupo Folklórico Maya）がある。私の調査期間中見聞した演奏は常に前者であるが、ギター奏者2人、縦長太鼓、トゥン太鼓、マラカス、チリミア笛など各奏者合計6～7名であった。この編成とは別個に太鼓とチリミア笛奏者2人が対となって常に宗教行列の先頭を行く。
- 2 これら洗濯石3点は次のように時期を定めて保管される。一つは常に聖十字架コフラディアの聖ミゲル像の足元に置かれ、5月3日の聖十字架祭に全役職者交代に際して、新アルカルデ宅に他の聖器具類と共に移される。残る二つはローシュ宅に翌年聖月曜日まで大切に保管される。

- 3 カベサの任期は翌年1月までである。
- 4 一簣にプラタノ6本、カカオ2個、メロコトン2個、パタシュテ1個が盛りつけられる。全部でプラタノ25本、カカオ90個、メロコトン90個、パタシュテ130個が採集されていた。
- 5 モリーナ（1983）によれば、マシモンは私たちの調査時と同様に、丸屋根の小礼拝堂の柱にくくりつけられた。村上忠喜氏との私信によれば、1990年、92年と、マシモンは教会正面入口の右脇ベンチ上にくくりつけられた。黄色屋根のカピーリャの縁柱にはRecuerdo de Pedro Mendoza 1992, alcalde de ……（判読不能）と寄進者の名前が彫刻されている。Diego Molina F., *Las Confesiones de Maximón*, Artemis y Edinter, Guatemala, p.6 y 34.
- 6 これと類似したものでサンタ・マリアと呼ばれる聖像は、他に聖ロサリオ、聖グレゴリオ、聖アントニオに観察され、そして聖フアンと全部で四カ所において祀られている。
- 7 薬物か深酒で陶酔しているのか、あるいは両者と関係なく陶酔の表情が儀礼上要求されるのかは不明である。
- 8 左手聖十字架祭壇は大きな磔刑上のキリスト像があり、その足元に悲嘆にくれる聖母とマグダラのマリアの女性聖像2体が祀られている。そして十字架から降ろされた苦痛の「寝棺のキリスト」像がガラス越しに見える。ガラス寝棺は銀彫刻の美しい櫃状祭壇の上に祀られている。聖金曜日に巨大十字架につけられるキリスト像、2人のマリア像、寝棺行列のキリスト像などはすべてこの祭壇から登場する。
- 9 アーチは聖週間のみ教会広場や村内各辻に設置される。鳥居状の丸太アーチは棕櫚の葉、杉枝、cartucho, barba de viejoと呼ばれる苔などの緑葉に蔽われ、その上にブーゲンビリアの紫紅色の花が飾られる。そして海岸部低地の熱帯果実とかコロソ椰子の実が吊される。また、4～5年前の聖週間儀礼に参加したトゥレイン大学院生夫人によれば、アーチに飾られる鹿などの野性動物の剥製が現在よりもずっと多く見られたという。

第四節 まとめと考察

キリストの死と復活を物語る聖週間は、はからずもツトゥヒル・マヤの祖先神とされるマシモン像の死（解体）と復活（復元）の二重奏となった。歴史を振り返ると、当該地方にはスペイン人支配が行き届いていなかった。征服者アルバラードはマヤ人の貢納をエンコメンデーロのサンチョ・デ・バラオマ・エルビエホと二分することになっていた。彼が死に、その地位を継いだアルバラード夫人もアグア火山の噴火で死んだ。バラオマ家の後継者は当地に居住することを嫌った。一方で、ツトゥヒル・マヤの首長は貢納を納める限り、前スペイン期と同様に支配者の地位を享受できる時間を経た。

バラオマ一族は先住民をキリスト教化すべき義務があったが、旧都にとどまり続け当地のカトリック教会建設資金の提供すらしなかった。スペイン人の関心は当地域がカカオ豆の産地であったことだが、疫病の蔓延で人口減少となり経済的効果は望めず、従って350年以上もスペイン人為政者およびカトリック司祭ですら常住せずに時間が流れた。

1964年に着任したカトリック司祭は村民が伝統的マヤの信仰形態を維持していることに驚き、立腹し、両者間には葛藤が絶えなかった。そこに、米国オクラホマから1970年代にルーサー神父が教区司祭として赴任した。彼は村民を愛し、マヤの儀礼を廃絶しようとは考えなかった。兄弟団は守護聖人祭を支援し、団員の葬式を互助し、団員間の結束を強め紐帯を維持させる精神的支柱として機能した。

次ページの表4-1、表4-2は、『祝祭の民族誌』1998年、pp. 102-103から転載。

表4-1 サンティアゴ・アティトゥラン村の聖週間儀礼行程表

月日	場所	主催者	テーマ
3・31(水)	村中心→村境	行政職・宗教職, 村長	果実隊はコスタへの徒歩巡礼へと出発
4・2(金)	聖ニコラス宅⇔教会	聖ニコラスのコフラディア	第6金曜日の聖行列
3(土)	村境→村中心	行政職・宗教職, 村長	果実隊がコスタから帰村し, 宗教的役職者たちの出迎えと村人の歓迎のもとに役場まで凱旋行列
4(日)	教会 村中心→村境	教会、神父 行政職・宗教職	枝の主日。聖週間の開始, ミサ, ロバ上のキリスト行列 コロソ隊, コスタへの徒歩巡礼へと出発
5(月) 夜間	教会 聖十字架宅 湖岸・テリネル宅	教会世話役・コフラデー 聖十字架コフラデーとテリネルたち	教会堂内と聖人像の大掃除 マシモンの解体, マシモン衣類の洗濯→テリネル宅徹夜儀礼, 翌朝衣類乾燥
6(火) 午前 夜間	村境→村中心 第1マヨール宅 聖十字架宅	行政職・宗教職 行政職・宗教職 テリネル, 当該コフラデー	コロソ隊到着 第1マヨール宅まで凱旋行列。そこでコロソを保管 マシモンの再生・誕生
7(水)	第1マヨール宅→役場 聖十字架宅→役場 役場→教会 役場→教会広場 聖ニコラス宅	果実隊・コロソ隊, 村長 テリネル, 当該コフラデー 果実隊, コロソ隊, 杉枝隊 マシモン一行 当該コフラデー	村長室へと果実とコロソを運ぶ行列 マシモン一行, 村長室へ 教会内の主祭壇部へ 黄色屋根のカピーリャへ。マシモン帰依者たちの参拝がひきもきらない 聖ニコラスの衣装変えと踊り
8(木) 午前中 午後 深夜	聖ニコラス宅→教会 聖ファン宅 教会中庭→教会 市場の道路	当該コフラデー ナベシル, 当該コフラデー 少年12使徒, 神父 宗教的役職者一同	早朝, 聖ニコラス像行列 鹿の踊り, 聖マルティンの踊り, サンタマリアの踊り 最後の晚餐の儀→洗足の儀 聖ファンの疾走儀礼
9(金)	教会 教会→東西南北の辻を一巡する カピーリャ→聖十字架宅 行列途中からサンティアゴ宅へ	行政職・宗教職 青年志願者, 聖ファン像 マシモン一行 嘆きのマリア像	キリストの磔刑 キリストの寝棺行列 広場から寝棺行列を出し抜き聖十字架宅に帰還する 最愛の息子を失った聖母は村の守護聖人サンティアゴ宅で, 悲哀を忘れるために踊りあかす
10(土)	徹夜で村内を一巡し 教会へ サンティアゴ宅→教会	青年志願者, 聖ファン像 嘆きの聖マリア像と騎馬上のサンティアゴ像一行	早朝, キリストの寝棺行列教会に戻る 午後, 騎士サンティアゴ像に伴われて聖マリア像教会に戻る
11(日)	教会	神父	復活祭のミサ。主祭壇の供物棚解体, 供物の共食

(出典) 筆者作成 (1993年)。

表 4-2 マシモン儀礼と教会儀礼の対照表

サンタ・クルスのコフラディア	月日	教会、その他の集団の諸活動
<p>マシモンの解体=死 マシモンの聖衣類が夜更けに、湖岸の秘密の場所で役職者らにより洗濯される。真夜中にテリネルの家へと行列。テリネル宅にはマシモンの妻の像が祀られている。</p> <p>夜8時、マシモンの構成=再生の儀礼。窓や扉は閉じられ、照明も消される。役職者らはむしろ上下の間の狭い空間で、人々の視線を遮断しての秘儀を終了。今年のマシモンの誕生。</p> <p>人々の大歓声のもとに、テリネルの肩に担がれたマシモンは村長室へと行進する(11時)。</p> <p>村長の演説のあと、市場をぬけて、教会へマシモンと供物(果実)の行列。マシモンは教会広場の小礼拝堂の緑色の柱に吊され、ここに9日(聖金曜日)まで、祀られる。</p> <p>聖フアンのコフラディアでは、マシモンの祖型と考えられる聖マルティンとサンタ・マリアの儀礼が行われている。</p> <p>午後4時半頃、寝棺行列は教会を出て広場を抜け、市場へとむかう。寝棺の後にはマシモン像は、広場中央の十字架にさしかかると、やにわに寝棺をだし抜き(5時)、走り始め、サンタ・クルスの家に「帰宅」する。</p>	3・31(水)	フルーツ隊、コスタ(太平洋岸低地)へと、往復・80キロの徒歩巡礼に出発
	4・2(金)	第6金曜日の聖行列
	4・3(土)	村境にフルーツ隊を出迎える。凱旋行列が市場をぬけて、第1マヨール宅まで続き、そこに4日間保管される
	4・4(日)	枝の主日。聖週間の開始。ミサ
	4・5(月)	コロソ隊、コスタへと出発 教会堂内と聖人像の大清掃
	4・6(火)	コロソ隊到着。第1マヨール宅へ
	4・7(水)	吹奏楽団に伴われて第1マヨール宅から村長室へと、青年によるフルーツ隊とコロソ隊の華々しい行進
	4・8(木)	コロソや花や果実類は、教会の主祭壇奥の飾り衝立てを覆う巨大な供物棚に括りつけられる 教会中庭で、少年12使徒らによる「最後の晩餐」の儀
	4・9(金)	サン・フアンのコフラディアでは、午前中に聖マルティンと聖マリア「像」の御開帳。鹿の踊りと民族音楽演奏 夜間、道行きのキリスト像と聖マリア像は、市場の長い通りの両端に安置され、その間を聖フアン像が夜通し往復して駆けぬける儀が未明までつづけられる 教会内祭壇部に巨大な十字架が建つ。午後3時、キリストの磔刑。死。やがて、十字架から降ろされた像は大きな柩に寝かされて、寝棺の行列が1昼夜かけて開始される
	4・10(土)	昨夜、嘆きの聖マリア像は悲嘆を紛らわすために、サンティアゴのコフラディアに行き、1晩中踊りあかし、騎馬姿のサンティアゴ像に伴われて教会に「朝帰り」する
4・11(日)	復活の日曜日。供物棚から果実がおろされ、役職者らに配られる。 供花も赤紫から純白の花にかわる。8時と10時に教会でミサ	

(出典) 筆者作成(1993年)。

第五章 中米エル・サルバドル、サンタ・アナ県

チャルチュアパ市の聖週間儀礼



図 5-1. 出典：エルサルバドルの農地改革 Hall and Brignoli, 2003., p. 268

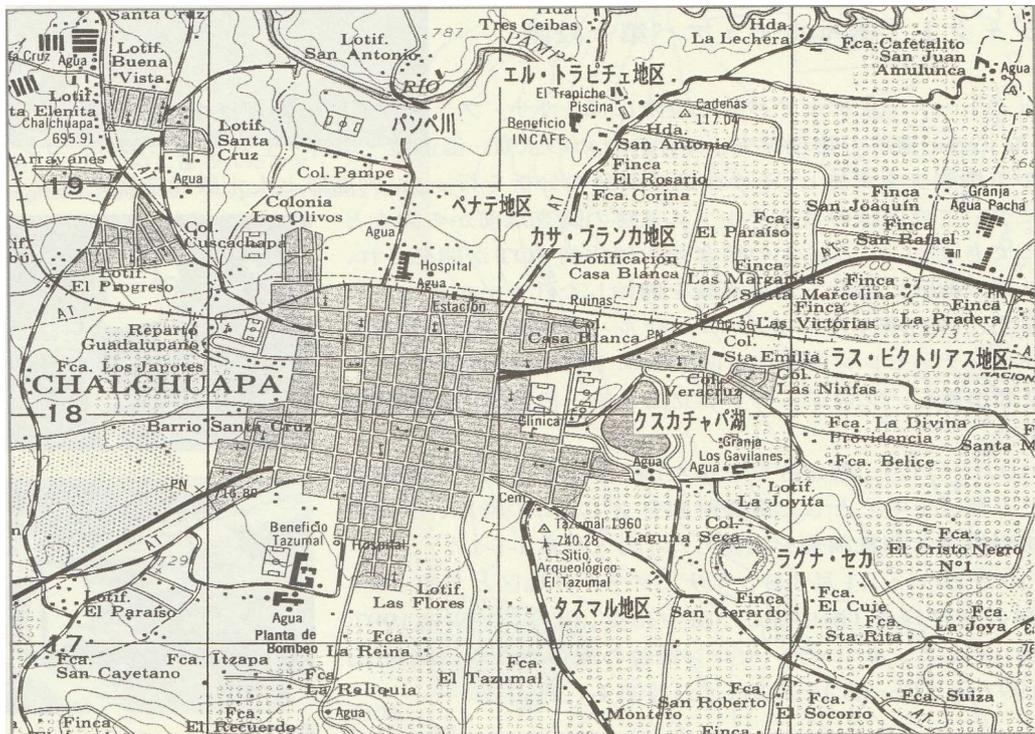


図 2. 5-2. 出典：「チャルチュアパ遺跡と考古学調査」『チャルチュアパ』大井邦明, 2000, p.19.

第一節 エルサルバドルの先住民に関する概略

エル・サルバドルはラテンアメリカ諸国中、一番人口密度の高い国である。22,000 平方キロメートルの国土に 500 万余の人口を抱えている。中央アメリカの中央部に位置しグアテマラ（西部）、ホンジュラス（北・東部）、ニカラグア（南部）諸国と接している（地図 5-1）。太平洋沿岸部は熱帯気候で高温であるが、内陸部は比較的気温が低い。1 都 13 県 261 郡より成立し、民族構成はメスティソ 84%、白人 10%、インディヘナ 6% である。言語はスペイン語で宗教はカトリック教徒が大部を占めている。先スペイン期 16 世紀には、北西部にポコマムと Choltey が、パス川の左岸からレンパ川右岸までの地域にピピルが、東部にレンカとポトンなどの先住民が居住していた。現在の首都サン・サルバドルは、クスカトランと呼ばれピピル王国が勢力を誇っていた¹。

スペイン人征服者コルテス配下のペドロ・デ・アルバラードは首長クスカトラン・アラカトルを襲撃し、1528 年にサン・サルバドルを建設した。植民地時代にはグアテマラ総督府のもとに統治され、牧畜・農業・藍の生産が盛んに行われた。1821 年にグアテマラの一部として独立し、中米連邦共和国時代を経て 1841 年に分離独立をした。1870 年以降、コーヒーに特化した農業政策がとられ、少数の大土地所有者と大多数の土地なし農民の間に富みの偏在が生じた。1929 年の世界恐慌と 1932 年のコーヒーの国際価格の下落で、アラウホ政権は危機に直面し、労働争議やストライキが頻発した。共産主義者ファブランド・マルティの影響下、ソンソナテおよびアウアチャパン両県でピピル系先住民農民が大規模蜂起を計画し、西部地域フアユア、ナウイサルコ、イサルコ、タクバ、アウアチャパン、ソンソナテ、サンタテクラなどの農場や軍駐留地を襲撃した。これに対して 1932 年 1 月に政権交代したマルティネス将軍指揮のもと、国家警備隊の機銃掃射は凄惨をきわめた。ソンソナテ県イサルコのインディヘナ共同体リーダーのフェリシアノ・アマをはじめ無差別虐殺で 3 万人におよぶ犠牲者を出し、世にいう「大虐殺（マタンサ）」に発展した。この事件以降、先住民は自己防衛のために表面的に言語・習慣・民族衣装を放棄し国家の同一化政策に従わざるをえなくなった²。

1950 年代は好調なコーヒー価格を背景に、国内の教育・住宅・保健・水力発電が図られた。1960 年代に中米共同市場に加盟し最大の受益国となるが、工業化により都市人口が増大する一方で、'67 年の農作物国際価格の下落で農村部の失業率が拡大した。仕事を求め隣国ホンジュラスへ移住する人口が増大し、両国間に緊張が高まり、世にいう「サッカー戦争」（1969 年 7 月 14 日）で中米地域統合は後退した。1970 年代、軍事政権は左翼団体や解放の神学の信奉者を弾圧し、A・ロメロ大司教を暗殺するにおよび（1980 年）、反政府側はファブランド・マルティ民族解放戦線（FMLN）を成立させゲリラ闘争を展開し内戦に突入した。この内戦で国外難民およそ 50 万人、犠牲者約 7 万人、失業率 50% と国内経済は疲弊し中米最下位に転落した。1992 年 1 月に和平協定が締結され 10 年余にわたる内戦が終結した³。

エル・サルバドルの先住民に関する歴史的背景を、現代のインディヘナ三共同体①モラサン県カカオペラ、②首都圏内パンチマルコ、③ソンソナテ県ナウィツアルコに求め、続けて内戦終結後の先住民文化復興運動の順に、主に M・チャピン（1991）を引用し概観を述べていきたい⁴。

[歴史的背景]

マヤ文明の中心地点がグアテマラ高地とコパン遺跡に高い水準で華開いた頃、エル・サルバドル西部はこの高文明の周辺部に位置していた。紀元後 900～1350 年の期間にエル・サルバドル西部に居住していたマヤ人は、メキシコ中央高原から南下してきたナワ語系ピピル集団の支配下におかれ⁵、16 世紀になると、当ピピル集団はスペイン人支配下におかれた⁵。

① カカオペラ

スペイン人は意図的に、チョコレートやココアの原料であるカカオ(cacao)と香油・薬剤・鎮痛剤の原料となるバルサム(balsamo)の主産地である西部に植民した。カカオ作物はデリケートな耕作法が要求されるので、スペイン人統治者はインディヘナの伝統的栽培システムと社会組織を温存する政策をとった。当初インディヘナはスペイン市場向けの栽培者として、後に農園の契約労働者（ペオン）として、スペイン人と共生せざるをえない状況におかれた。こうして、新しい社会的・政治的秩序のなかに、いやおうなくインディヘナは組み込まれた。グアテマラの先住民の場合は、スペイン人支配を逃れ遠隔地に移動し、伝統的文化を維持することが可能であったが、エル・サルバドルの国土は狭く、逃亡していける地帯がなかったからである。16 世紀末になると、エル・サルバドル西部地域は新大陸でも有数なカカオとバルサモ栽培地域と変化化した。こうしてスペイン国政令に基づき、牧畜禁止地帯として旧来のインディヘナの農業システムの温存化が図られた。それゆえ、伝統的な社会的・政治的構造が温存されたのである。先住民共同体は 19 世紀中葉までは、言語、土地所有形態、経済的独立を享受していたとチャピンは記す⁶。

しかし、アニル（アニリン）藍染料の生産地帯である中部、北部、レンパ川東部では事態が深刻であった。アニルはスペイン征服前から栽培されていたが、スペイン人はこのアニルを大規模商業生産の主軸にした。アニル生産に当たってスペイン人はカカオ生産とは異なる対先住民労働政策を用いた。広大な帯状の土地に藍色染料となるヒキリテ（jiquilite インディゴ）の木が植えられ、3 年毎に葉が採集された後、この土地は休耕地として放置された。アニル栽培には集中的労働力が要求され、スペイン人現場監督は良心の呵責なく非衛生的な状況でインディヘナを酷使した。また、旧大陸からもたらされた伝染病（マラリア、黄熱病、天然痘、麻疹、結核）は大多数の集落民を死亡させ、村落共同体を崩壊させた。そのため労働力不足を補うために、インディヘナ男性狩りが行われ、周辺のインディヘナ集落は老人・女性・子供だけが残り、労働力が不足し主食トウモロコシ耕作に事欠いた。1550 年から 1590 年にかけて 70 ヲ村が 52 ヲ村になり、人口 30,000 人が 8,300 人に減少した。

18 世紀になると、国内北部、東部、海岸部など牧畜地域では、インディヘナ共同体は姿

を消した。根無し草となった彼らは、あてどなく大農園やサトウキビ生産地帯の賃金労働者となった。どこから来たのか、どこに所属しているのかは不問にされ浮浪労働者が増加した。しかし、ソンソナテ、アウアチャパン、サン・サルバドルと北東端部には奇跡的に共同体が生き残った。この地帯は海拔 500m以上に位置し、マラリアや黄熱病などの伝染病の犠牲者にならずに済んだからである。植民地時代当初、インディヘナ共同体は広大な共有地を有し、これが伝統的に共同体の単位を維持していたが、国内にラディオの大農園が増加するにつれて、逆にインディヘナは土地を失った。スペインからの独立後、1840年代になると、化学染料の出現でアニル栽培が大打撃を受け、国はアニルの代替作物を求めた。それが、コーヒー栽培であった。1857年コーヒー栽培は多くの労働者を、山麓地帯のコーヒーの結実に理想的であるサンタ・アナ、アウアチャパン、ソンソナテ諸県に集住化させた。1861年には、サンタ・アナ市周辺とチャルチュアパに約 157 万本が数えられた。1930年代になると、コーヒーがエル・サルバドルの輸出作物の 90%を占めることになり、それゆえ、かろうじて国土の 25%を占めていたインディヘナ共有地は消失した⁷。

こうした状況下、1970年末に県内北部にゲリラが出現すると、国軍は大規模な対ゲリラ殲滅作戦を大量投下した。こうして、当該地帯は反乱区、解放地帯となり、村人はゲリラに加担しないと殺され、一方、国軍からはゲリラに加担したかどで攻撃された。人々は土地・家畜・作物を捨て、難を逃れ国際赤十字・国際援助団体の収容所や、教会・村役場・文化センターで不自由な生活を強制させられた。収容キャンプはラディオ用とインディヘナ用に別れており、難民は食料・水・燃料などを購入せざるをえなくなった。かつて、薪木・水・菓草・サイザル麻は村落周囲にあり購入の対象ではなかったから、村人は現金経済の中へと強制的に放り込まれ困窮度を増した。

そのような状態でありながら、否、だからこそ、彼らはマヨルドミーアという宗教的組織を維持した。宗教的役職者は、祭事暦に従い儀式を行い、年毎に代わる祭主志願者（祭時役職者）は食料・飲み物・ロウソク・花火などの出費を負担し、役職者夫人はテナンサスと呼ばれる祭事食を振る舞った。この組織の存在により、伝統芸能のロス・ネグリティスやロス・エンブルマドスという民族舞踏が保存されていった⁸。

② パンチマルコ

当市は首都サンサルバドルから 16km に位置し、面積 103km² である。中心地域に 5,237 人、16 街区（カントン）に 25,654 人、合計 30,891 人を抱える共同体である（1986 年）。スペイン統治下の 1611 年にプエブロに、1879 年にプエブロからビリャに昇格した。1770 年当時の人口 2,197 人、1879 年人口は 2,642 人であったが、1957 年には中心部に 2,503 人、周辺部に 9,170 人で総計 12,313 人に増加した。ラディオ人口がその内 30%を占めると推定される。ここでは植民地時代から 1880 年代まで共同体の運営する集中耕作がなされてきたが、1881 年に国内のインディヘナ共同体の取り崩しがなされると、村の共有地は小片に分割され、やがて少数の地主に土地が集中された。1950 年にはラディオの地主が土地の 75%を掌握し、その内の 2 人はこの土地の 47.7%を占有した。現在、土地なし農民と

なったインディヘナ男性は未熟練労働者として、女性は家政婦などとして首都へバス通勤し、僅かながら収入を得ている。1980年の農地改革法207条が公布され、小作人でも耕作している土地を購入する権利が謳われたが、財力のないインディヘナにとっては無縁の条例であった。ラディノ地主は土地が奪還されるのを恐れ、放置耕作地が拡大した。内戦中は悪魔の扉と呼ばれている山岳に、暗殺遺体が放置されるというおぞましい状況が見られた⁹。

パンチマルコで特筆すべきは、スペイン植民地時代に急増したコフラディア（信徒集団組織）が20世紀まで15団体も継承されていることである。極貧状態にもかかわらず、祝祭に伴う出費を重ねつつインディヘナたちは、この組織を死守してきた。今日では、首都に至近距離にあるこの共同体の祝祭儀礼を観光に訪れる人々が増え、マヨルドーモたちに注目が集まると、ラディノの村長（1987年）は自己アピールのために、この行列に好んで参列するようになった。儀典の詳細を取り仕切れるのはインディヘナ長老だけであるので、ラディノは祝祭経費の支援をするようになった¹⁰。

今日、エル・サルバドルの有力紙 *Prensa Gráfica*, (1999年3月29日 p. 22) には、パンチマルコの聖週間儀礼や聖十字架の祭り（同紙、1999年5月4日 p. 62）が掲載され、この共同体の知名度はあがっている。

③ ナウイツアルコ

当市は、首都から西へ54kmに位置し、総人口39,492人のうち中心部に8,999人、周辺部に約30,000人を擁している。1858年にビリャとなり、1955年にシウダーに昇格した。ラディノは商店主、レストラン経営者、機械修理や建築用の工房主、地方役人などの職業に就いている。インディヘナは「生活インフラ」すなわち上下水道・電気・ガスなどの公共サービスを受けていない。草葺屋根の木造で土間1室、窓の無い家に住んでいる者もいる。共同体の共有地は15～30マンサーナを残すのみである。男性はトウモロコシ・インゲンマメ・モロコシなどを自給用に耕作し賃金労働者として収入を得ている。女性・子供は繊維工芸と野菜・果実・小型家畜を売っている。プシュタン区では、敷物（ペタテ）を編む女性たちがいるが、きけば、材料のツールにC90.00を費やし1ダースの製品を作り、C120.00の収入を得るが、労働で得る収入はC30.00にしかすぎない。暇つぶしにペタテ作りをしているようなものだ。90%以上が貧困に苦しみ、貧困から逃れる唯一の手段は子供に教育を受けさせることであるが、貧困ゆえに子供の就学率は最悪である¹¹。

ラディノとインディヘナは別個のコフラディアを形成してきたが、ラディノのそれが1つしか残っていないのに比べ、インディヘナのコフラディアは22も存在している。インディヘナは自村のコフラディアに他村のインディヘナ巡礼を受け入れ、自らも他町村へ巡礼に出かけていく。

[内戦終結後の先住民文化復興運動]

内戦で分断された国情であるにもかかわらず、今日インディヘナたちは自身のアイデンティティを見つめ直しつつあり、共同体の社会的経済的状況の改善をはかり、かつての伝

統を回復しようとしている。1980年代に政府当局の農地改革に対処して、土地委譲手続きを求める農民組織の中から国立先住民協会（ANIS 後述）が誕生した。カトリック教会側もソンソナテ地方のインディヘナ支援の姿勢を見せた。国内全域のインディヘナも10年前には考えられもしなかったが、自己のアイデンティティを見直し始めた。

ソンソナテ県内にサント・ドミンゴ・デ・グスマンというインディヘナ共同体があるが、ここでは村長はラディノであるものの、インディヘナ共同体が中核となり村境に12マンサナ（約5ヘクタール）の土地を入手した。この土地には、当地の重要な収入源となるコマル（主食トルティリヤを焼く丸盆状の土器）の原料となる粘土の産地も含まれている。しかし、奇妙なことに1987年の播種時期直前に125人の農民にこの土地を分割してしまった¹²。

1980年の農地改革法第207条によれば、10マンサナの土地を借用している者は、その土地の名義を申請したり購入できることになった。ラジオ放送でこの法改正を聞けば、申請手続きは容易なはずであった。ところが、公布されるや、小作人たちはただちに土地から追放された。モラサン県からソンソナテ県に至るまでM・チャピンが訪れた所では、地主が土地を小作人に要求されるのを恐れて休耕地や牧場に変えてしまったのだ。1980年3月第一週目に、国軍と農地改革局役人（ISTA）が平和裏に会談し500ヘクタール内のおよそ230ヘクタールを接收し、農民の組合を結成した。コーヒー産地である西部のサンタ・アナ、アウアチャパン、ソンソナテ、ラ・リベルターなど諸県には収穫時期にカカオペラなどから労働者が集中した。コーヒー、サトウ、綿花などの大農園に農民組合が結成されたが、他県から集まる労働者の面前でこの門戸は閉じられた。組合いは会員数が増大すると全員への恩典が希薄となり、経済悪化で他県労働者との契約に応じる財力を持たなかったからである。こうして大部のインディヘナは農地改革の恩恵に預かることはなかった¹³。

土地購入をめぐる国立先住民協会（ANIS）の政治的葛藤は、1960年代末ソンソナテ県でアドリアン・エスキノ・リスコというインディヘナの首長が、先住民の意見の代弁者の役割を果たした頃から始まった。ANISの当初の目標は、ソンソナテ県内のインディヘナ共同体に共有地を奪還することにあった。農地改革法制定の3年前にANISは、公的立場からサン・ラモン共同体の土地購入用ローンの貸し出しに対応した。土地購入までの過程に支障は起らなかった。しかし、1983年に1人のラディノが自農園に通じる道路工事をする必要に迫られた。この土地は、ANIS支援のもとにインディヘナ農民20世帯が購入したものであったので、彼らは当然反対した。2月22日午前中、突然兵士を満載したトラックが到着し、インディヘナ74人を拉致した。この日の午後、村に近いチラパ川岸に多くの死体が見られた¹⁴。

事態を重くみたANISは生存を賭けて同盟団体を探した。UPDの創設、キリスト教民主主義党、農民・労働者組合らを支援した。1986年3月、国軍がANISの事務所を占拠すると、従来のANISと政府側のANISの二つのANISが存在する状況が二年間続いた。この期間に共有地入手関係の書類が紛失された。結局、最高裁にもちこまれ、申請は無効とな

ったが、従来の ANIS の事務所は元に戻った。組織会員 76,000 人を数え、内 2 万人が正式会員であったが、財源には限界があり運営能力も不足していた。当組織が共産主義から極右翼にいたるまで、頻繁にイデオロギーを変える姿勢に批判が多く集中した。しかし、当局やラディオがインディヘナを虐待したことに對しては勇敢に告発し、獄舎にあったインディヘナの釈放や、インディヘナのためのインテル・アメリカ会議（1978 年）を開催して、先住民イメージを肯定化させる効果をあげた。また、ソンソナテ県サン・アントニオ・デル・モンテでは、カトリック教会がインディヘナの住居改善・家禽飼育・飲用水設備・農耕改善などを支援した。活動は地味で非政治的であるが、教会内の極右翼は某新聞に当活動を「サルバドル農民や先住民の魂を汚す布教をする神父を告発する」と非難している¹⁵。

隣国グアテマラの先住民人口 40～60%に比較すると、エル・サルバドルにはまるで、インディヘナが存在していないかのように外国人観光客や研究者の目に映るが、注意深く観察すれば、地方周辺の貧しい農民という集合名詞でくられた人々の背景には、まだ復古できる民族集団の伝統・習慣を継承しているように考えられる。それでは、次にチャルチュアパ市について言及していきたい。

第二節 チャルチュアパ市に関する概観

チャルチュアパ市はエル・サルバドル、サンタ・アナ県内に位置し、県庁所在地のサンタ・アナ市より西方 16 キロ地点に位置し、北方にグアテマラ共和国と国境を接している。以下に当該市の地理的背景、略史、社会的背景を報告する。

【地理的背景】

チャルチュアパ市は北東にカンデラリア・デ・ラ・フロンテラ市、東部にエル・ポルベニル市、サン・セバスティアン・サルティリョ市と隣接し、南東部にサンタ・アナ市、南部にフアユア市、南西部にアティキサヤ市、西部にエル・レフヒオ市、そして西北部にサン・ロレンソ市と接している。市の総面積は 165.76km² で、中心部は 1.5km² にしかすぎないが、市を取り巻く周辺部は 164.18km² と広大である。ナワ語で「ヒスイの川」、「緑色の川」を意味するチャルチュアパは、海拔 700m の高原に位置し比較的涼しく爽やかで温暖であり、豊富な水源に恵まれた肥沃な地である。当市とグアテマラ国境を隔てて流れているのがエル・ココ・ヘレス川で、他にエル・パンペ、ガレアノ、リオ・グランデ川がある。また、湧水地点として、エル・トラピチェ、ラス・カデナス、エル・ガレアノ、チャパロン、ロス・モリトス、エル・チチカスタル、エル・セドラルなどがある。特にエル・トラピチェは後述するように当該市から至近に位置し、1896 年には給水設備所が建設され、伝統的宗教行事および市民の格好な憩いの場として欠かせぬ地である。さらに、湖沼として、クスカチャパ、サン・セバスティアンなどがあり、クスカチャパ湖では釣りや洗濯にいそしむ市民の姿を見かける。チャルチュアパ市を取り囲む丘陵・山岳としては、アパネカ・イラマテペク山系、マラ・カラ、シマロン、シエテ・セロス、エル・チンゴ（1777m）ラ

ス・ラナス（2000m）、エル・アギラ（2035m）などがあげられ¹⁶、こうした山麓地帯では整然と区画されたコーヒー農園の風景が見られる。

[略史]

植民地時代以降のチャルチュアパの略史を J. サラベリアの『チャルチュアパ』、S.モンテスの『エル・サルバドルの歴史民族学』、及び『エル・サルバドル地理学事典』を引用要約して紹介していきたい。

スペイン語文献記録に当該地が最初に表れるのは、1548年11月にスペイン王国よりテワンテペク地峡からパナマに至る地域の聴訴院長に命じられたアロンソ・ロペス・デ・セラトが2人の聴訴官に伴われて当該地域を視察した記録から判明する。この頃すでに先住民はスペイン人エンコメンデーロにより、カトリック教徒に改宗させられ支配を受けていた。また、年代記録者ファン・ロペス・デ・ベラスコ（1571～1574年）によれば、当時チャルチュアパには400人前後の人口に70人の納税者がおり、サン・サルバドル統治下85集落の1つであったと記録されている（注6）。1586年フランシスコ会司祭アロンソ・ポンセは年代記録者シウダ・レアルと共にグアテマラからニカラグアに向かう途中でアウアチャパンとアティキサヤを通過し、サンタ・アナ市を訪れた。シウダ・レアルによれば、当該村落はサン・サルバドル西端の要所に位置し、住民はナワ語を話しヒカラの実で食器や杓子などの道具作りをしていると記している。その後、アイルランド人神父トーマス・ゲイジが1633年にチャルチュアパを訪れ、住民はポコナム・マヤ語を話していると記述している。グアテマラ市にある中央アメリカ古文書館で1750年に見つかった写本には、先住民人口192人、納税者の年齢・既婚・独身などや、未亡人・老人・病人の免税について記述されている。1773年同古文書館で見つかった別の写本には、先住民納税者400人、納税額、免税者の理由などが記録されている¹⁷。

サンティアゴ・モンテスによれば、1774年頃には14のコフラディアやエルマンダーが存在し、各コフラディアの資金（レアル：ペソ単位）と家畜財は表1のごとくである¹⁸。しかし、現代では14コフラディア中で2つのコフラディアが残っているのみである（後述）。

表 1 18世紀チャルチュアパ地域に存在したコフラディアの財政

コフラディア名称	資金	牛頭数	雌馬頭数	雄馬頭数	ラバ頭数	ロバ頭数
サンティシモ	29	17	63	12	3	
聖十架	52	27	13	2		
ラス・アニマス	100.4	284	437	112	12	
聖セバスティアン	43.1	527	66	36	5	1
被昇天の聖母	19.6	66	41	22	4	
聖ファン	なし					
コンセプション	26.5	7	6	5		
聖ホセ	なし	1043	561	260	63	1
聖女ロサリオ	128.7	370	191	64	44	1
嘆きの聖母	106.2	205	138	61		1
処女マリア	57.6	684	420	128	31	2

サクラメント	66.2				
ラス・アニマス	86.5	2 8 7	4 3	2 8	
イノセンテ	なし				

出典： サンティアゴ・モンテス『エル・サルバドルの歴史民族学 II』（pp. 62-63）より桜井作表

18世紀後半、グアテマラ大司教コルテス・イ・ララス著『グアテマラ司教区における地理文化誌』によれば、チャルチュアパ市はアティキサヤと共に19の荘園（アシエンダ）とバリェおよびシティオを有し、人口構成は表2のごとく、先住民662人に対しラディオが600人とほぼ同数である。しかし、アティキサヤとバリェのラディオ人口を合計すると、1543人となり、ラディオに対する先住民人口比は、1543対663人で、約7対3の割合となり先住民人口のほうが少ない。当時の先住民はポコママ・マヤ語を話していたと述べているところを見ると、トマス・ゲージの訪れた時から150年間を経てもポコママ・マヤの人々が居住していたと考えられる。18世紀、エル・サルバドルは藍染料（アニル）の生産をしていたが、チャルチュアパはアニル生産地帯としてよりも、むしろ、グアテマラへの交通の要所に位置していたので、交易がもたらす富と肥沃な土地の作物で収益をあげていたようだ。コルテス・イ・ララスが1770年にこの地を訪れた際に、すでに現在の使徒サンティアゴ教会が建造されていた¹⁹。

表 2 18世紀チャルチュアパ地域の人口構成

チャルチュアパ先住民の所帯数	7 6	成員の数	6 6 2
チャルチュアパのラディオ所帯数	9 1		6 0 0
バリェのラディオ所帯数	3 7		2 7 8
アティキサヤのラディオ所帯数	1 0 0		6 6 5
司教区全体の所帯合計数	3 0 4 所帯	成員の合計数	2, 2 0 5 人

出典： サラベリア『チャルチュアパ』（p. 19）

チャルチュアパは植民地時代を通じてサン・サルバドル統治下にあり、1770年当地に司教区が設置された。1786年に（首都）サン・サルバドルにインテンデンシアが設営された時には、サンタ・アナ県の管轄下に属した。さらに、1824年6月12日ソソナテ県に併合され、やがて1855年2月8日にサンタ・アナ県の管轄下に戻った。1859年2月11日にチャルチュアパはビリャ（町）に、続いて1878年2月15日にシウダー（市）として昇格した。1880年3月1日に、当該市はチャルチュアパ地域全般の市庁所在地となった²⁰。

隣国グアテマラでは、1873年フスト・ルフィーノ・バリオス将軍大統領が、中米統一を外交ルートで実現しようとするが、不可能とみると自ら軍隊を指揮し、1885年2月28日に国内にて中米連邦を宣言した。エル・サルバドル、ニカラグア、コスタ・リカの三ヶ国はこれを不服としアメリカ合衆国とメキシコに仲裁を求めた。グアテマラ大統領バリオス将軍は1885年3月末からエル・サルバドルに侵入し、チャルチュアパの地で4月2日に戦

死した²¹。1962年にグアテマラ大統領イディゴラス・フエンテスは、バリオス将軍を中米統一の勇士として称える胸像を設置し、現在ここは小規模ながら歴史公園となっている。現在でもグアテマラ空軍が、将軍の戦死を慰霊すべくチャルチュアパ市上空で追悼飛行をしている。

【社会的背景】

表3のごとく、1971年人口は42,918人、1992年の人口は64,828人で、21年間で21,910人増であるから、毎年2.43%の増加率である。この率から、1998年末には推定74,280人と考えられる。古くから農業地帯であることは、1909年の生産高を記載した資料を見ても明らかである。例えば、コーヒー53,450qq.（重量単位で1キンタルは約46～50kg. 地域差がある）、サトウ1,963qq.、パネラ67qq.、カカオ20qq.、ジャガイモ220qq.、タバコ1,250qq.、チーズ245qq.、トウモロコシ47,015qq.、インゲンマメ15,708qq.、コメ13,175qq.である。また、ゴムの木5千本、杉1万5千本、牛1,800頭が数え上げられる。このように、主たる農産物はコーヒー、サトウキビであり、トウモロコシ、パイナップル、柑橘類、ユカ芋などに加えて花卉・野菜を栽培し、牧畜牛・馬、養豚・養蜂・養鶏などがさかんである。現在でもコーヒーの集荷・洗浄・乾燥・煎培を一貫しておこなうベネフィシオが市内7社も数えられる事から、当該地域がコーヒー生産地帯であると肯ける。他に、既成服、靴、乳製品、製糖、セメント管、煉瓦および瓦などの製産設備が、エル・タスマル、ラス・ビクトリアス、クスカチャパ、サン・イグナシオ、ラ・マグダレナなど諸地域に設立されている。市内中心地には、勸業銀行、クスカトラン銀行、農牧畜振興銀行、地方信用金庫、アオロメトなどの金融機関がある²²。

表 3 20世紀チャルチュアパ市の人口推移

年度	総人口	男性	女性	都市部	周辺地方	人口密度
1930	22,727	11,385	11,342	8,080	14,647	137
1950	28,039	14,129	13,910	9,855	18,184	169
1961	34,865	17,354	17,511	13,339	21,526	210
1971	42,918	21,350	21,568	18,859	24,059	259
1992	64,828			25,272	39,556	
1998	74,280 推定人口					

出典： *Diccionario Geográfico de El Salvador*, Tomo I, 1985:190-192; *Municipalidad de Chalchuapa*, 1998: 3-4 より桜井・作表

舗装道路として完成されているのは、アティキサヤ、トゥリン、アウアチャパン、サンタ・アナ、サンタ・アナ、ラ・カンデラリア・フロンテラ地域である。未舗装道路はサン・セバスティアン・サイトリリョ、ファユアである。鉄道 FENADESAL が東西に横断して走っている。グアテマラ市から長距離バスに乗って4時間前後でサン・サルバドル市に到着するが、グアテマラとエル・サルバドル国境の町は、西からアウアチャパン県のアドゥア

ナ・ラ・エチャドゥラとラス・チナマス、サンタ・アナ県のサン・クリストバルとグアテマラのエスキプラスに近いアンギアトゥなどが挙げられるが、チャルチュアパ市とラス・チナマス町間の道路拡張工事の完成も間近い。この道路工事が終了すると、首都サン・サルバドルからサンタ・アナ市付近を通過してチャルチュアパを貫けてグアテマラ市に至るルートが、両国民の往来を盛んにするであろう。特に、チャルチュアパにはタスマルやカサブランカなど考古学遺跡地帯が位置し、市当局が今後観光産業に並々ならぬ意欲を見せることから隣国グアテマラのマヤ文化復古運動に影響を受けていることは確かだ。今まで先住民を迫害し、抹殺してきた黒い歴史は、1992年の国連が定める「国際先住民年」により塗り変えられようとしている。

行政区域として、チャルチュアパ市の中心部は東西南北4区（東北のアニマス、西北のサンタクルス、東南のアパネカ、西南のサンセバスティアン）に別れ、周辺部は20カントン（街区）とそれらに属する77カセリオ（小集落）より成立している（注8）。

市の行政は、ファブランド・マルティ民族解放戦線FMLNの選挙戦勝利で、左派勢力が現在政権を掌握し市長にオスカル・O・アスセンシオ氏が当選した。市の審議会は市長と第一から第十まで十人のシンディコ、補佐役のスプレнте4人で成立している（写真①）。

市民サービスは、電話局、郵便局、国家市民警察（PNC）、救急体制、上水道、下水道、市場（1948年設立）、病院、診療所、サン・ビセンテ収容所、I S S S相談所、赤十字、個人診察所、バス輸送、第一審刑事法裁判所、刑務所、洗濯場、便所、競技場、フェリア会場、ガブリエラ・ミストラル幼稚園、小学校（エル・タンケ、ピエドラ・ラハダ、ポルベニル・ホコティリョの3村落を除く17街区に設置）などが「1998年度市政計画書」に記載されている²³。しかし、長期間に渡る内戦の影響で、インフラ・ストラクチャーの不備が目立ち、市長との面談によれば、電気・上下水道や道路工事が先決としても、劣悪な住宅環境を何とか改善したいと力説していた。

第三節 使徒サンティアゴ教会の活動組織

チャルチュアパ市の中心部セントロには、ホセ・マティアス・デルガド中央公園と使徒サンティアゴ教会が位置し、ここは市民の精神的よりどころである。この教会と公園に比べると、市長が嘆くのも尤もなことで市庁舎は余りに小さく老朽化し目立たない。ARENA 政党のカルデロン大統領が当市を訪問した時（1999年5月15日）に、市庁舎ではなく使徒サンティアゴ教会を訪れたのは、教会修復工事の落成式典参加が目的であり、かつ市長が対敵するFLMN 政党出身ということもあろうが、むしろ、当教会の占めてきた歴史的・社会的位置の重要性に因があろう。

1999年度の祭事暦を表4として記した。大祭は、3月から4月にかけての移動祝日の聖週間、8月15・16日の聖ロケ祭、そして7月25日の守護聖人サンティアゴの祝日である。その他に、10月第一土曜日の午後6時頃に始まる花火大会である。この行事は伝承によれ

ば、19世紀のある年に人々が大雨が降り続き洪水の不安におののいていた時、聖母のおかげで、聖女ロサリオの行列が出る頃には晴天となったとし、民衆はそれ以来、中央公園に集まって花火をあげて感謝をささげる習慣になったという。現在8人の花火師が600個の花火を二時間に渡って打ち上げるという。また、伝統文化保存協会ができ、5月3日の聖十字架の祝日や、11月28日の聖アンドレスの祝日に伝統文化を復古させている。11月26日には隣村アパネカから宗教的役職者が当市を訪れ、使徒サンティアゴ教会堂内に祭られている騎馬上のサンティアゴ像の輿をかつぎ、アパネカに連れ帰る。アパネカの守護聖人の聖アンドレスと隣村サン・ペドロの守護聖人像を加え3像がアパネカに集合し、毎日、村内の家々を巡る(写真2)習慣が継承されているのは大変興味深い。また、12月8日の「無原罪の御宿りの聖母マリアの祝日」には、聖母像の行列に両親に伴われインディヘナの服装をした子供たちが参列する。

表 4 チャルチュアパ市、使徒サンティアゴ教会の1999年度祭事暦

月 日 *移動祝日	祭 儀 名	担 当グループ	儀礼の行われる場所や内容
1月6日	御公現の日	聖ロケ	
2月2日	聖女カンデラリアの日	全教区	四旬節の開始
3月	聖ホセ像、		ピア・クルシス
3・28～4・4*	聖週間		
5月3日	聖十字架の日 午前6時半 午後2時		教会で司祭のミサ 中央公園
24日	マリア・アウキシリアドラ		アウキシリアドラ修道院教会
6月 *	コルプス・クリスティ		行列
7月25日	サンティアゴの祝日 午前10時 午後3時		教会でミサ 聖行列
8月15・16日	聖ロケの祝日		全市の行事
9月15日	正午12時		ミサ
10月7日	聖女ロサリオの祝日	青年グループ	行列
11月2日	死者の日、午前6時半		聖ミサ
26日	アパネカから騎馬上のサンテあ後像を迎えにくる。		聖ペドロ・クストラ、聖アンドレスなど3村の聖人像の集合がアパネカで行われる。
12月8日	無原罪の御宿りの聖母マリア		
24、25日	聖誕祭		

1999年桜井・作表

使徒サンティアゴ教会の主任司祭ルカス・エスパニャ神父と、チャルチュアパ市・使徒サンティアゴ植民地時代教会・建造物修復保存委員会委員長のロベルト・エルナンデス・カスティリョ氏との面談で、教会活動組織と、修復保存の活動について以下の情報を得た。

[教会活動組織]

ルカス・エスパニャ神父のもとに、常駐の聖具保管係（サクリスタン）と補助司祭（セミナリスタ）が教会に所属している。神父は信者団体の最高権威である教区役員会を通じて、精力的に布教活動に努めている。当該教会の司祭職は、グアダルペ・メレンデス神父→アルバレス神父→アントニオ神父→アレハンドロ・パルチャ神父を経て、現在のルカス・エスパニャ神父で五代目になる。同神父は内戦を経て荒廃した市民の精神状態を憂い、ともすれば薬物中毒に犯されがちな当地の青少年を救うべく、布教活動に精力的に取り組んでいる。以下がその活動組織である。

1. 侍者：約 18 人は、9 歳から 14 歳の少年で司祭がミサ聖祭を行う際に補助をする役目。自分から進んで志願する者、中にはプロテスタントなのに志願する者もいる。そして、後年になって修道者・司祭を志願する者も現れる。
2. 第三フランシスコ青年団：男女団員約 30 人で自らの信仰を深めるために、聖者アシジのフランシスコの生涯に倣って謙虚・従順の徳を育て、教理の勉強をする。第三日曜日にもミサの後に集会している。十月行事に主役をつとめている。
3. 青年団：約 175 人の 14 歳から 22 歳位の青年男女が幾つかのグループに別れ、讚美歌隊を形成し、布教に務める。
4. 既婚者グループ：7 組の既婚者夫妻が属しており、結婚生活の愛情・責任を各自が全うするように内省する。
5. 宣教補助員（カテキスタ）：青年 30 人位が少年・少女たちに教理を教えながら、相談役を務める。
6. コフラディア（信徒集団組織）：聖十字架（団員数約 400 人）と嘆きのマリア（団員数約 60 人）の 2 つのコフラディアがあり、8 グループに分かれて活動する（後述）。
7. 教義勉強会：週一回集会し、聖書・教理の勉強に務め、精神的・宗教的生活を深化する。グループ名はウルトゥレーリャである。
8. 聖体保管係：約 30 人の既婚夫人の集会で、コルプス・クリスティや聖週間では黄色の制服を着て讚美歌を歌い、夜間も通じて祈祷を捧げる。供花・ろうソクを絶やさずに務める。
9. 聖母マリア団：25 人ほどの 10 歳位までのしょうねんたちで、1. の侍者への予備軍。
10. アクシオン・カトリカ：大変活気のあるグループで、青年を対称にして布教に務める。毎日曜日午前 8 時と 10 時に讚美歌を歌う。第一日曜日に集会し、団員約 800 名で地区ごとに、45 グループに別れ 1 グループは 15 名から 20 名である。
11. 既婚夫人 25 人ほどが白服を着てエカリプスを首から垂らし、式典に参加する。
12. 秘跡の礼拝者：聖木曜日に参加する。

こうした 12 団体の各代表者が司教区委員会を形成し教会活動を円滑に運営する。

表5 使徒サンティアゴ教会組織

教区司祭 ↓ 教区役員会→	1	侍者、ミサ儀礼などに際して神父を補助する
	2	第三フランシスコ会年少組
	3	青年団
	4	既婚者グループ
	5	宣教補助員（カテキスタ）
	6	コフラディア 嘆きのマリアのコフラディア 聖十字架のコフラディア
	7	教義勉強会
	8	聖体保管係
	9	聖母マリア団
	10	アクション・カトリカ
	11	祈祷の伝導
	12	聖体の秘跡礼拝者

1999 年桜井・作表

【修復保存活動】

使徒サンティアゴ教会修復保存委員会は、1995 年 5 月 6 日一年間の準備期間を経て 1996 年 5 月 27 日に発足した。有志の人々の寄付金を募ることからスタートし、経済的基金援助をしてくれる団体を探した。当教会が国宝財として正式登録されているにもかかわらず、破損がはげしく、内戦状況で修復もなされずにきたことを憂い、当委員会（7 人で構成）は修復保存資金援助の申請書を文化スポーツ省に提出したところ、文化庁（CONCULTURA）のロベルト・ガリシア長官、カロリナ・アバロス局長およびマリア・イサウラ・アラウス文化遺産局局長から早速の快諾をえた。170 万コロン（C1=約 13 円；約 2200 万円）の資金を得ることになり、2000 年度末に修復工事が完了する予定がたてられ、毎年分割して資金援助がされることになった。委員会側は過去 4 年間でバザー、寄付、小旅行、食物販売などで 90 万コロンを集め、両者合計で 260 万コロンに達した。修復対象は教会建造物、祭壇、聖像、聖画、庭園となった。基本的に色の剥げ落ちた物はオリジナルに忠実に修復し、聖人像を保管するガラスケースは新調した。

1996 年度には主に外壁部と排水設備、1997 年度には天井部、屋根の修理にシャンデリアを購入。1998 年度には床部、大飾り祭壇（オロ）と聖体祭壇部、1999 年度には屋外部照明と司祭館、主祭壇と大飾り祭壇（オロ・イ・プラタ）などの修理改築工事がなされた²⁴。堂内主祭壇近くに二幅の大きな古い聖画がかけられていた。人々は一方を金の聖画、もう一方を金銀の聖画と呼んでいたものの、余りの落剥ぶりで何が描かれているのも判別しにくいほどであった。当初はこの二幅の聖画を隣国グアテマラの旧都アンティグア市まで運送することが考えられた。古くて汚い聖画は、往路エルサルバドルからグアテマラ国内への

通関で問題なく通過できるであろうが、復路に金箔・銀箔に美しく修復された暁にはどれだけの税金と通関手続きがかかるか誰にも予測がつかなかった。委員会は何回か会議を開き、結局グアテマラの旧都アンティグア市から4人の飾り職人を招聘し、2ヶ月かけて修復作業にあたってもらうことになった。注意深い修復作業の過程で、これらの聖画の下にもう一枚の聖画が描かれているのが見つかり、新たに聖画二点が生まれ、教会修復関係者一同は喜びに湧いた（報告書 ルハン・ムニョス原稿参照）。こうして5月15日、カルデロン大統領を迎え教会修復関係者一同は盛大な落成式を行うことができたのである。

第四節 聖週間儀礼の過程

チャルチュアパ市の聖週間儀礼の起源については、このような伝承がある。ある日、教会・市役所などが位置するセントロの馬つなぎ用杭に、一匹の雌ロバが繋がれていた。このロバの飼い主が誰で、どこから来たのかは誰にも分からない。3日間たっても、飼い主が表れないので、人々はロバの背にくくりつけてあった櫃箱をあけると、中から磔のキリスト像のついた十字架が出てきた。また底には写本があり、その写本には聖週間儀礼の式次第を指示する内容が記録されていた。それ以来、今日見るような聖週間の儀式が継承されてきたという。ところが、聖週間儀礼の聖木曜に、聖体保管容器の鍵を市長幹部に渡す儀式が、なぜか1984年を最後になってしまったこと。さらに、ソンソナテ県コンゴ地域の守護聖人が同サンティアゴであることから、5年ほど前までは聖像訪問がされていたが、今では中断されてしまった。これを聞いたときは、気落ちした。

さて、1999年度・聖週間儀礼に関する記録を報告するにあたり、前年度の写真（調査協力者マルロンとヘルベルト撮影）も加えた。調査にあたっては両学生の他に臨時助手を務めたR.アントニオ・ロペス君、チャルチュアパ小学校教諭A・ソイラ・ルイス嬢およびホセ・マヌエル・カストロ氏（通称ロロコ）の協力を得た。彼らの協力なしに筆者一人では、これだけ規模の大きな祭りの全貌を把握するのは困難であった。

前述したように聖十字架のコフラディアと「嘆きのマリア」の2つのコフラディアが存在し、以下の8グループに分かれて活動する。役員会、「キリストの受難」グループ、「道行きのキリスト」グループ、寝棺の輿を担ぐグループ、「嘆きのマリア」の輿を担ぐグループ、レヒドール・グループ、警護係、料理・洗濯・アイロンかけの女性グループである。

聖金曜日に重い寝棺の輿をかつぐグループは、さらに46人ずつが三分し、7ブロックごとに順繰りに交替し、4人の舵取り役に指示されながら、6人の香炉持ちを従えて行列する。「道行きのキリスト」と聖ペドロの両輿は聖十字架の団員によって担がれる。嘆きの聖母マリア像、マグダラのマリア像、および聖フアン像の3つの輿は全て女性団員によって担がれる。

「道行きのキリスト」グループのメンバーによれば、団員は約50～60人で、プレシデンテと呼ばれるリーダー（68歳）とその下にアルカルデ（55歳）がおり、この2人は行列

の先頭を白い長い杖を持って歩く。輿の担ぎ手は成人男性 27 人で、他に少年の香炉持ち (3 人)、香持ち・炭持ち・莫塵持ちが随行する。聖木曜日には、教会内入り口に「入牢させられた苦悩のキリスト」像を祀る (後述)。約 5 年前のこと、「道行きのキリスト」像の着衣物を脱がせて洗浄する際に、像の頭部に被せてあった長髪の鬘が取れた。頭部が禿げた状態なのを見た一人のコフラーデがけたたましく嘲笑した。その男性は教会を出たとたん気がふれてしまった。それ以来、白いカーテンをはりめぐらした空間内で、キリスト像をバルサモ入りの聖水で清めている。このバルサモ聖水は信心深い婦人が、グアテマラで購入し寄進したものだ。

聖週間日程表などの情報冊子 *Identidad* に「道行きのキリスト」団は、以下のようなメッセージを載せている。「聖水曜日と聖金曜日の聖行列にグループ員が参加するが、それに伴う出費約 2 万コロン (飲み物・楽士・集合所での光熱・水道費) の一般寄付を募りたい。また、基台の修理にグアテマラのアンティグア市在住のビルヒリオ・カスティリヨ匠とその弟子に依頼するにあたり、6 万コロンを要するので協力を仰ぐ」と記されている。また、同冊子には、聖十字架の宗教的役職者 (マヨルドモ) にロムナルド・マロキン氏 (1881~1962) が就任した頃が、このコフラディア全盛時代であったと年長者が述懐する。では、1999 年の聖週間儀礼の報告をしていきたい。

[3 月 28 日 棕櫚の日曜日]

午前 8 時 マリア・アウキシアドラ修道院教会で棕櫚の葉の聖別が行われる。ルカス神父が棕櫚の葉に聖水をかけ、信者たちに配布する。その内の数本は教会内で翌年まで保管され、焼いて灰にし「灰の水曜日」に信者たちの額に塗り、この日より四旬節が開始することになっている。一行は色紙飾りの大きな棕櫚の葉を先頭 6 人が捧げ (写真 5-1)、ブラスバンド楽団を先頭にして進む。白い貫頭衣に赤紫色マントを羽織ったキリスト像の輿行列が町中をいく。街中を行列は東→北→西→南の順で左まわりに行進する。人々は教会で聖別された棕櫚の葉を手に持ち讃美歌を合唱しつつ行列に加わる。輿の後ろには修道院経営の中・高等学校の学生たちが男女別に制服姿で整列して進む。輿の担ぎ手たちは紫色の貫頭衣 (トゥニック) に紫色の頭巾を被っている。行列の役職者たちのこうした衣装は全て個人的に購入したり詠えて保管している。両親や親戚のオジ夫妻たちが兄弟団団員であり、幼少時から聖行列や讃美歌隊などの教会活動に参加している子供たちが、教会儀礼の継承者である。

8 時半過ぎ頃に教会に到着すると鐘の音が鳴り響き、キリスト像一行は明るい曲を奏でる楽団と、堂内を埋める人々に歓迎され、エルサレム入城の場面を再現する。巨大棕櫚を持った一行は正面の主祭壇向って右手にキリスト像、輿を左手に据えた。助祭の説教がなされている間、正面入り口ではコフラーデたちが棕櫚の葉で十字架やブーケを作り賽銭と引き換えに信者に渡している。午前 9 時頃、ミサ行事が終了した。

[3 月 29 日 月曜日]

午前9時 聖十字架兄弟団の家では、キリスト像の聖衣を載せた12個のバテア（洗濯用木製盆）が小型の磔の十字架像の前に並べられている(写真5-2)。9時16分になると青い背広に身をかためた男性団員が床に跪、篤信家・ドローレス夫人（95歳）の朗誦に導かれて祈る。その後楽団、香炉持ち、十字架持ち、バストーン持ち（2人）の先導で二列になり頭上にバテアをのせた男性たちがトラピチェと呼ばれる湧水地点に向かって行進していく（9時半）(写真5-3)。この中で通称ロココ氏によると、彼は27才の時に父親を亡くし、その時期を転機に「道行きのキリスト」兄弟団に入団し10年目を迎えたと語る。彼は無期限、すなわち命ある限り団員を務めると神に間に「約束」したと語る。2人の息子も入団し、聖週間行列では香炉持ち助手と燭台持ちを務めている。

午前9時15分 一行は湧水地点トラピチェに到着する。キリストの聖衣が洗濯される場所を示す白布がW字型に川床に敷かれている（写真5-4）。すでに大勢の人々が聖水を汲み上げてもらい家に持ち帰るために、水入れ持参で待機している。下流に大池があり、子供らが水着姿で泳ぎたわむれているが、洗浄儀礼のされる場での水浴は禁止されている。

ここは、湧水地点なので給水所、洗濯場、遊泳者用の着替場が設置されている。ロータリーでは教会の年輩女性たちが、昼食プーサ用の運搬炉をしつらえ、調理の準備に余念がない。見物者・娘二人の話によると、二人はマリア・アウキシアドラ孤児院で成長し、今日は祖母が「洗濯係」をするので来ているとのことだ。

10時頃 「洗濯係」の女性たちがこの聖地に到着する。白服の若い娘2人と老婦人（65才～75才）たち数人が、素足になって川に入り、洗濯しやすいように石や岩を動かして洗濯場を設営する。大勢の見物者がこの女性たちに容器を差し出して聖水を容れてもらっている。そして、先述男性団員14人が頭上に洗濯盆を載せて到着した（10時20分頃）。盆にはキリスト像の着衣が折りたたまれて載っている。一同は川辺に跪き祈り、やがて河床で待機している女性たちに次々と洗濯盆を手渡しいく。川床に並べられた白衣は筆者から見るとWの字を描いているが、スペイン語にはWで始まる語は少なく、疑問のままに写真撮影・記録し報告した。後年、南米の民族学者・加藤隆浩先生から、「あれは、Wではなく、マリアを意味するMではないか？」という示唆をいただいた。そのアドヴァイスは私の疑問を解く鍵でもある。前述の第4章、隣国グアテマラのソロラ県サンティアゴ・アティトラン村では「水・女性・マリア・」という「女性概念」が聖週間儀礼に展開されている。一人の老女が白服に着替え岩場をおぼつかない足取りで河に入るが、やがて慣れた手つきで聖衣を石罅で洗っていく。白いワンピース姿の娘の若さと美しさが川面に映えて際立っている。主婦業で多忙な40～50才世代の参加が少ない。人々が聖水と崇めるのは、トラピチェ湧水そのものではない。あくまでも川に「キリスト聖衣」を水に入れた時点で聖水となるから、人々は土手の上から次々と水入れ容器を川床の女性たちに手渡し、水を満たしてもらっている。家に持ち帰るためである。

一方、車寄せ空き地では、洗濯盆バテアを頭上にした男性団員が東方に向かい十字架祭壇を設置した。11時半頃には洗浄された聖衣が青空のもとに干される。やがて午後4時18

分、アイロン掛けの済んだ聖衣がきちんと折りたたまれバテアに載せられて並ぶ。一行はバテアの脇で跪き祈りを捧げる（4時22分）。やがて、彼らは頭上にバテアを載せ二列行進して聖十字架兄弟団の家に戻るのであった。

午後5時 教会から楽団、燭台・香炉・十字架持ちなどを先頭に、水色・貫頭衣姿の「道行きのキリスト像」の輿がいく。その後ろに「嘆きの聖母マリア像」（ピンク色のドレスに白レースの長いヴェール）、「聖フアン像」（黄色のトゥニックに緑色のマント）、「マグダラのマリア像」（深紅色ドレスに短い白ヴェール）が続く。やがて西5番街と南4通りの交叉地点に差し掛かると、東側からキリスト像一行、西側からバテア一行の「出会い」の場面となる（写真5-5）。ここで、説教師が聖衣服払浄の意味を説明する。汚れた衣服は我々人間の魂を表わしており、神から遠ざかるほど黒く汚れる。聖水で清められた衣服は、洗われた魂を象徴すると。

洗濯盆一行は道路に跪きキリスト一行を待ちうける（5時20分）。まずキリスト像が聖衣に向かってお辞儀を3回し、その後マリア、聖フアン、マグダラのマリアも同様に挨拶をする。そして北方へとキリスト像を先頭に、他3像は並列して行列していく（5時半）。バテア一行が後続するが、聖像一行が教会に戻るのに対して、バテア一行は途中から聖十字架のコフラディア宅へ戻り、午後8時に散会そた。この間、道路では信心深い老婦人が花びらや紙ふぶきを播いて聖行列を歓迎する。讚美歌ピエダーと楽団演奏が聖週間第二日目を告げ、人々は続く木曜日の聖週間休日の始まりを待ち受ける。夕闇が迫り、日中の猛暑が一風の風で吹き払われ、心地よい風が人々に安らぎを与えてくれる。夜7時近くにキリスト像一行は教会に戻り、担ぎ手たちは跪いて祈り散会した。

[3月30日 聖火曜日]

午後5時20分サンティアゴ使徒教会から行列が出発した。順序はブラスバンド楽団（クラリネット、トランペット、トロンボーン2人、サクソ2人、コントラバス、大太鼓と小太鼓など9人～13人構成）で年輩者が多い。次の集団は紫色の装束で先頭3人は燭台持ち・幟持ち・十字架持ちである（写真5-6）。6人の白服少年随行者、大人と子供の紫色の随行者7・8人、2人が白色の杖持ちである。女性二人の香華係の内の一人がキリスト像にむかって香煙をふりかける。他の一人が小学校教諭ソイラ・ルイス嬢で花瓶を右肩に担ぎ上げ、二人は交代で後ろ向きに行進する（写真5-7）。後に白装束集団が以下のように行列する。8人に担がれた紫衣姿の「道行きのキリスト像」、男性4人が担ぐ「サンペドロ像」、白い杖持ち・行列の舵取り役男性2人。後ろ向きに進む青年コフラーデ4・5人。そしてこれ以後女性の担ぎ手で構成された御輿が3基「嘆きのマリア像」、「聖フアン像」、「マグダレーナ像」である（写真5-8）。1基を4人で担ぎ、交代者が2人加わる。女性たちの服装は、頭部に白色ベールを被り、白色ワンピース、白色の靴である。「嘆きのマリア像」はピンク色の貫頭衣・白色レースのマント。次の「聖フアン像」は黄色貫頭衣姿に深緑のマント。そして最後尾の「マグダレーナ像」は深紅色貫頭衣姿に白レース・マント。歩調を整えて輿はゆっくりと進み、吹奏楽隊は荘重なメロディーを奏で、見守る人々にキリストの受難

を知らしめる。聖ペドロが天国の入り口の鍵を預かる聖人といわれているから、道路上には「鍵」のデザインの花絨毯が数点ある。

行列は教会を出ると右手に出て中心街を練り歩く。道路には花絨毯が作られている。また「道行きのキリスト像」の留を表わす台を玄関口に置いて信仰を表現している家もある。夕方6時半、太陽も沈み町は暗くなり、涼風が頬をなでていく。行列は教会前公園に到着し教会正面に到着した（6時45分）。

教会堂内では階段状祭壇にアクション・カトリカのグループが、洞穴と岩場を背景に、最上段にロバに乗ったキリスト像を設置し、キリストを迫害するローマ兵士を現代若者風の服装で表現している。

午後7時 ピエダー、ピエダーと歌う声にも少々の疲労が聞こえる頃、教会正面から中に入り、祭壇向かって左手に「道行きのキリスト」像が安置される。聖ペドロ像は聖歌隊位置（祭壇向かって右手）に置かれる。「嘆きのマリア」、「聖フアン」、「マグダラのマリア」3像は教会正面入り口右手に安置された。行列男女の役職者たちの中に、昨日の「聖衣の洗濯」で主役を務めた95歳のドローレス夫人が紫色のワンピースを着て跪いている。参列信者は助任司祭の説教と翌日の集会予定時刻をきき散会する（午後7時15分）。

[3月31日 聖水曜日]

午後7時 教会祭壇部は赤い垂れ幕で覆われた。幕の前面に司祭たちと信者代表10人ほどが腰掛けて、順繰りに聖書のキリストの受難を読み上げていく。司祭の説教の間に、中央回廊の机の上に点された小ろうソク13本が二本ずつ消され、最後の一本が燃え尽きると、教会の入り口のドアが閉められる。カオス（混乱）を表現するかのように暗闇のなかでマトラカが鳴らされる。それから、一瞬、照明がすべて消される。恐怖でキーという声をあげる幼い子がいる。

その後、照明が点され説教が終わると、両目を包帯でまかれ両手を縛られた白服のキリスト像の輿行列が教会を出る（午後8時50分）。この輿は大型なので、白服と黒頭巾の男性10人に担がれて進む。白いワンピース姿のソイラ嬢が花瓶もちで随行している。白色長杖の頭部飾りは、喪を表わす黒い袋で覆われている。ドローレス夫人は黒服で参加。ロココ氏は半ば陶酔したような面持ちで裸足で担いでいる。きわめてゆっくりと進む。ラジエター1台ですべての聖像の照明をしている。町中の道路上に聖書の一場面や祈りの言葉「神は愛である」「聖霊、光の源」、平和の象徴・鳩の絵などが花や砂絵で描かれた絨毯が作られている。この上を輿行列が通り過ぎると壊されてしまうのだが、信心深い家族の努力で、聖水曜日から聖金曜日にかけて日毎に描かれる。時々重い鉄の鎖を地面に落として、キリストの受難の苦しみを象徴的に音で表現する。コピー店の前の砂絵は牢獄に繋がれたキリストの意匠であった。夜間11時半頃、行列は教会に戻った。

[4月1日 聖木曜日]

午後4時 教会内の主祭壇前部に赤い絨毯が敷かれ、小型の磔刑のキリスト像が置かれ、両側にコフラーデが座す。入り口に近いニッチ（壁龕）には牢獄に繋がれたキリストの場

面が再現され、この前に長い行列が続いている。人々は辛抱強く自分の番が来るのを待つ。前方の席には黄色いワンピース姿の聖体保管係の婦人たちが占めている。主祭壇は白一色で統一されている。

5時20分頃ルカス神父たちが祭壇に現れると、「十二使徒の洗足の儀」がなされる。使徒に扮した男性信者役職者は黒いスータンをまとい、肩から緑・黄色・赤の布かけている。ルカス神父の良く響く声が堂内に満ち、キリストの最後の晩餐の儀が読みあげられていく。人々は敬謙な面持ちで聞きいる。5時50分、神父が12人の弟子役の信者の右足を洗面器に浸して洗い接吻していく（写真5-9）。キリストの謙虚さの表われの再現であるが、見る者をして感激させる。一番最後の聖ペドロ役の年配男性が「主よ何故そのようなことをするのですか」と尋ねるとキリスト役の司祭が「今はまだ分からないだろうが、いずれ理解する時が来よう」と応じ、聖ペドロ役の脚を洗う。聖歌隊のが讃美歌が道内に響く。この後でミサが始まり、相互挨拶で終わると（6時半頃）、聖体拝領がなされるが、余りに大勢なのでルカス神父に加えてマリア・アウキシアドラ修道院のシスターと助任司祭の3人で手際よく聖体を配していく。司祭が聖体の入ったカリス容器を主祭壇の聖櫃に納め、こうして聖木曜日のミサは終了した。

[4月2日 聖金曜日]

午前9時頃 作業服姿の男性信者たちが教会主祭壇を純白に装飾している。9時半「道行きのキリスト像」の輿が設置され、担ぎ手たちが跪いて司祭の説教を聴いている。コフラーゲたちは流石に毎日続く勤行に疲労しきっているように見える。やがて、聖週間のクライマックスである道行きのキリスト行列がスタートする。この日の花絨毯は一番手がこんでいた。

午前10時 教会内に人々がつめかけている。純白のワンピースを纏ったソイラ嬢が大花瓶をかつぎあげ行列は進む。マトラカの音に先導されたビア・クルシスの行列は、町の中心街へと進む。勸業銀行の十字路には、嘆きのマリア一行と劇的な「出会い」をする場所なので、大勢の人で埋まっている。14の留の前で留まりビア・クルシスの朗唱がなされる。一行は炎天下のもとに飲み物もとらずに行列し、磔になるまでの行程を聖書のシナリオに沿って忠実に再現していく。11時45分頃、聖母たち三像との出会いの場面が声高に読み上げられる。「嘆きの聖母マリア」像には心臓に矢が刺さり紫色マントをはおる。聖行列ルートは交通規制で車輛進入禁止である。

キリストに倣い、両目を白布で覆った男女4人が肩つなぎに一列で進む。高校生楽団も加わっている。キリストの道行きに倣って、若い男性が十字架の輿を担いで進む一方で、純白・晴れ着に白い日傘の少女らが華やいで進む。午後1時45分、炎天下の行列を終えて教会に戻る。ソイラ嬢は疲労と強い日射でめまいを起し躓き倒れそうになるが、花瓶を割るには至らなかった。

午後5時44分に「磔から降ろし棺に移す儀」の説教が開始される。祭壇は黒幕で覆われ、中央部に据えられた十字架にキリストが磔にされている。神父をはじめ、輿を担ぐ男女の

コフラーデは黒の喪服姿である（写真 5-10）。コフラーデたちは輿のそばで跪いている。黄昏どきの熱射が斜めに堂内に入り込み、熱さと疲れで信者たちはぐったりとしている。

午後 6 時 40 分 神父が壇上で聖書のキリストの磔刑の場面を読むと、6 人のコフラーデたちは、丁重にキリストの被る茨の冠り・身体に打ち付けている釘をはずして盆にのせていく。磔から降ろされてたキリストは、やがて棺に移される。

二十四金の美しい装飾の施された寝棺は、グアテマラで修理され戻ってきたばかりだ。やがて、跪いて待機していた 40 数人の担ぎ手たちが立ち上がり、この重い棺輿を担ぎ上げる。寝棺行列は歩調を揃え、喪服姿のマグダレナの MARIA・聖母 MARIA・聖フアンの 3 像の前にすすむ。聖母が哀悼を表わすお辞儀を 3 回する。聖フアン、続けてマグダラの MARIA も同様にする。寝棺の担ぎ手は昨日と同じように黒と白のトゥニック姿で（写真 5-10）、女性は黒一色のワンピース姿で三像の輿を担いでいく。「道行のキリスト」の汗をぬぐう役を演じる娘さんは緊張して行列に加わっている（写真 5-11）。

燭台・十字架・幟持ちトリオを先頭に夜を徹して荘重な行列が進む（写真 5-12）。少年たちが次のような聖書の言葉の記された標識を持って跪く。1「神よ、赦したまえ、彼らはなすところを知らざるなれば。」2「女よそこにお前の息子がいよう。」3「今日、お前は私と共に天国にいよう。」4「主よ、主よ、何故私を見捨てたのか。」5「私は喉が渇く。」6「主よ、あなたの御手に私の魂を委ねます。」7「全ては成された。」。寝棺のキリスト・グループはおよそ 120 人の担ぎ手が、7 区ごとに 3 交替で進む。ブラスバンド楽団は荘重で悲しみに満ちた曲を奏でて進む。嘆きの聖母、聖フアン、マグダラの MARIA の順で 3 つの輿が進む。今年カルデロン大統領の国民共和同盟（ARENA）の政党支持者が勢づいている（写真 5-13）。昨年の選挙戦に勝利したファブランド・マルティ民族解放戦線（FMLN）の花絨毯も敷かれている（写真 5-14）。

[4 月 3 日 栄光の土曜日]

喪服姿の三像行列は午後 6 時に教会を出発し 15 の留を巡回していく。ピア・クルシスの順路は、教会正面入り口 → 教会北側十字路 → ミニ・スーパーの前 → ロココの家の前 → ある家族の家の玄関 → キリストの顔を拭く地点、ベロニカ → 医院コンサルト・メディコの玄関口 → ブティック → 印刷屋の前 → キリスト水を飲む（コフラーデも日射病にならない様に飲むことになった） → 老女の前 → ププセリア・マリの前 → フリオ・セサル・セペダ弁護士の前 → 葬儀屋の近く → ドン・フレディ喫茶店付近となっている。

午後 8 時半過ぎに行列は教会に戻り、三聖像の衣装を喪服から復活の喜びの衣装に着替えさせる。やがて、教会中庭でかがり火の用意がなされると（午後 10 時）、信者たちはこのかがり火を囲み輪になる。聖歌隊が手拍子をつけながら現代風讃美歌を歌っていく。ルカス神父一行が巨大ロウソクをかかげてくると、かがり火から点火された香炉から、もらい火をし、人々は手に手に小ロウソクをもって、教会の中に入っていく（午後 11 時半）（写真）。巨大ロウソク中心部に 5 つの釘が十字架の形で刺されている。神父は聖水に浸した神木枝（ジャスミン）をふりあげて、人々の頭上にふりかけて浄化していく。この聖水は災

難除けにきくという。讚美歌が堂内に響き、人々は深夜のミサにあずかる。中央公園では、土産物売りや賭け事屋が深夜になるまで商売を続けている。

[4月4日 復活の日曜日]

午前1時頃 教会の正面に6才の少女(ファロリート役)が乗った輿が待ち構えている。キリストが復活したことを、教会内に奉られている聖母マリア、聖フアン、マグダラの三像に三回往復して告げる天使役を務めるのである。復活を知った三聖像は喪服を脱ぎ捨て、晴れ着に着替え聖母を先頭に助任司祭一行とキリスト像の所に来て、順繰りに3回お辞儀をする。一同はキリスト万歳と唱える。やがて復活のキリスト像は三像を従え、教会へ午前2時に到着する。

午前9時~10時 カルバリオ教会で復活の聖ミサが行われる。続けて、午前10時 マリア・アウキシリアドーラ修道院内教会でミサがあげられ、嘆きのマリアのコフラディア婦人たちは受付で、信者の寄進とひきかえに棕櫚の葉を束ねて手渡している。

中央公園では祭りの後片づけに余念がない。シカゴと呼ばれている観覧車やメリーゴーランドなど子供用の娯楽施設が解体されている。最後の収入をあげようとがんばっているのが賭博屋で、金を賭けさせてビー玉が穴に落ちると、掛け金が入る仕組みになっている。ここには一発勝負の真剣さと尋常でない雰囲気醸されている。清涼飲料水やスナック類の屋台も店じまいをし始めた。チュコという飲み物(トウモロコシ液に煮小豆を入れる)やユカ芋料理(煮たユカと刻みキャベツ、チチャロン、ピカンテ、酢味のソース)の屋台も店をたたみ始める。

午後6時 使徒サンティアゴ教会で復活の聖ミサが定刻通りに開始され、司祭がキリストの復活の喜びと意味を説教する。堂内を埋めた人々は一連の祝祭行事をこなし、満足感の伴う疲労に身を委ねる。概して年輩者のほうがこうした行事に積極的に参加しており、入り口や教会の外庭で待機しているのは若者や恋人たちだ。年輩者聖歌隊のギター伴奏で讚美歌が歌われる。

教会内主祭壇に向かって左側に純金の「寝棺のキリスト」、入り口近くに「道行きのキリスト」そして主祭壇最上階に復活のキリストが奉られている。右側入り口近くに三聖像(嘆きの聖母、聖フアン、マグダラのマリア)が並ぶ。午後6時50分頃 ミサが終了し人々が三々五々去って行く。かくして1999年チャルチュアパの聖週間儀礼は終了した。

ある人は40年ほど前の聖週間を思い出して語る。聖木曜日にはキリストの苦悩を偲び祈りをして過ごした。聖金曜日には自転車も車輛も通行禁止で、皆徒歩で町中を往来した。聖行列に参加する男性は背広にズボン、女性は黒の喪服に身をかためた。今のようにテニス・シューズにピアスをつけた若者や、ミニスカートの娘の姿はなかった。正装していたもんだ。そして、聖土曜日の夜になると、盛装した青年男女が華やかにカジノ・デモクラティコ・チャルチュアパネコに集まって、盛大にダンス・パーティをしたものだ。聖金曜日の料理は干魚・焼き飯・ポテト・ガルバンソ豆で、デザートもホコテやシラカヨ

テの蜂蜜甘菓子と決まっていたものだったと。

ソイラ嬢は8歳の時に、母親が大病にとり、母親が神にプロメサ（約束の願掛け）をして以来、聖行列に参加し、15歳の時からこの花瓶持ちの役目についていると語る。また、聖十字架のコフラディア男性団員（約40歳）のホセ・マヌエル・カストロ氏（通称ロココ）と面談し（1999年4月）、彼の聖週間儀礼の参加日程と心の内を語ってもらった。

マヌエル・カストロ氏は文部省管轄下の遺跡公園作業員で、市内教会付近の持ち家に家族6人（義父・夫婦・息子3人）と暮らしている。息子3人は14歳～8歳までで、聖行列には父親と参加している。隣家の実母と実弟家族は聖週間の間、家の前の道路に花絨毯を寄進している。氏が27歳のときに実父が逝去し、この時に神との間にプロメサ（誓願）をたて「道行きのキリスト」像の団員となった。妻が第三子を出産する時に難産で帝王切開せざるをえなかった時には、新たに誓願をたてたと。

彼の活動日誌は多忙だ。聖週間がスタートする6週間前から毎週金曜日（1999年は2月19日・26日、3月5日・12日・19日・26日）に、「道行きのキリスト」の貫頭衣（トゥニック約25着）を着替えさせ、6人で輿行列をする。この時には聖ペドロ像、聖母マリア像、聖フアン像、マグダラのマリア像、計4像を載せた4基の輿が後ろに続く。枝の主日（3月8日）には午前9時～11時に「勝利のイエス・キリスト」を表わすべく「道行きのキリスト」像に白服・赤マントの服装をまとわせて行列する。聖月曜日（3月29日）には前述したように、キリストの聖衣の洗濯行列、聖火曜日（3月30日）午後5時からの聖行列に輿を担ぐ。翌日聖水曜日午後9時から翌朝までの聖行列には、靴を脱ぎ素足で参列し、次第にキリストの受難に心を同一化しシレンシオ（沈黙）の勤行に入る。聖木曜日（4月1日）「囚われのキリスト」像を参詣する人々が長蛇の列を作っているが、その受付に座り寄進を集め守り札を渡す役目を交替でする。彼は午前・午後の各一時間を仲間の4人と担当した。いよいよ聖金曜日（4月2日）のピア・クルシス行列が開始する。午前10時～午後2時まで、炎天下に重い輿を担ぎ裸足で熱いアスファルト道路を歩き、飲食抜きで参加する。さらに、午後8時から深夜まで巨大な「寝棺のキリスト」の輿（44人の担ぎ手）行列に参加する。

この輿の担ぎ手は聖金曜日一日のみの勤行であり、ロココ氏のように6週間前から行事に参加する団員と異なる。栄光の土曜日と復活の日曜日のミサに参列し、特に、復活の日曜日には午前8時～午後5時には後片付けに回る。主祭壇を取り壊し常態に戻したり、教会正面入り口に設置したヤシの緑葉のアーチを撤去して、この葉をコーヒー農園主に返却する。最後の月曜日（4月5日）の午前8時～午後5時まで、教会やコフラディア宅で使用した器材や衣服などの後片付けをする。

カストロ氏は聖週間開始前の金曜日6回（6日）、聖週間9日間の合計15日間を、自身の信仰を深めるために費やした。3人の息子たちもこれに参加し、実母・実弟の家庭は高価な花や飾り物を花絨毯のために提供するなど親戚一同をあげて、聖週間儀礼に専念したのであった。それでは、以下に1999年度の聖週間儀礼の行程を表6に作表しておきたい。

表6 1999年度チャルチュアパ市使徒サンティアゴ教会の聖週間儀礼行程

1999年 日 時	儀 礼 内 容
3・28 午前7時30分	棕櫚の葉の祝別（教会正面入り口にて）、聖行列とミサ
棕櫚の日曜日 正午12時	洗礼
午後6時	聖ミサ
3・29 聖月曜日 午前6時	聖ミサ
午前9時	キリストの聖衣の洗濯・聖行列
午後4時30分	アニマ（聖霊）の聖行列
午後7時	告解
3・30 聖火曜日 午前6時30分	聖ミサ
午後4時30分	道行きのキリスト像と聖ペドロ像の行列
午後8時30分	ゲッセマニの園のキリストの祈りと説教
3・31 聖水曜日 午前6時30分	聖ミサ
午後7時	暗闇の儀礼
午後8時	沈黙の行列
聖3カ日の開始 木・金・土	
4・1 聖木曜日 午前9時	教会で聖油の聖ミサ
午後5時	最後の晩餐の聖ミサ
午後7時	覆いを取る儀式、イエスに向かって祈り、秘蹟。 教区内の各信者団体の参加活動
午後7時～8時	秘蹟とセントロ・ミルの通夜
午後8時～9時	「聖棺」と「道行きキリストの」団員
午後9時～10時	青年部団員
午後10時～11時	アクション・カトリカ団員
午後11時～12時	夫婦の出会い団員
午後12時～午前1時	結婚の相手の出会い団員
午前1時～午前6時	聖体の秘蹟と聖母マリアへの礼拝
午前6時～午前7時	祈りの布教と伝導団員
4・2 聖金曜日 午前9時	死刑の宣告の説教とピア・クルシス 図 参照
午後3時	聖十字架への典礼
午後5時	キリスト降下の説教
午後7時	納棺の儀
4・3 聖土曜日 午前6時	孤独のマリアの聖行列
午後10時30分	通夜
午前1時	復活の聖行列
4・4 復活の日曜日 午前10時	マリア・アウキシリアドラ修道院内教会で聖ミサ
正午	洗礼
午後6時	聖ミサ

1999年 桜井・作表

第五節 まとめと考察

以上、第一節で、エル・サルバドルの先住民について、歴史的背景、三共同体の事例、先住民文化復興運動を概略した。ここで、インディヘナ共同体サバイバル事例には等しくコフラディアという信徒集団組織が、公認組織として機能している事が明らかとなった。

第二節では、チャルチュアパ市の概観を地理的背景、植民地時代から現代にいたる略史、そして社会的背景について言及した。植民地時代のチャルチュアパ市は、カカオとバルサモ栽培地帯として伝統的な社会的・政治的構造が残されていたが、メスティソ人口増に飲み込まれていることが判明した。スペインからの独立後、19世紀後半からコーヒー栽培を国策としたために、サンタ・アナ県は地理的にコーヒー栽培の好適地の高度(500~700m)に位置していることから、一大コーヒー生産地となり、集中的労働を必要とし、他県から労働者が流入した。

第三節では、使徒サンティアゴ教会の活動組織や教会修復保存委員会、伝統保存委員会などについて言及した。12の活動グループの内、半数以上が青少年を吸収し、特にアクション・カトリカが布教活動に活躍し会員数も多いことから、聖週間儀礼にも若者の参加が多く見られたのが特徴である。ホセ・ファハルド著のソンソナテ県内ナウリンゴ共同体の民族誌(1993:164)によれば、若者たちの参加が減少し聖週間は宗教的意味を失い海水浴のほうを選択する休暇の同義語と化していると記している。IVでは、棕櫚の日曜日から復活の日曜日にいたる聖週間儀礼の全行程を、参与観察で得たデータで報告した。筆者にとって、大変興味深いのは、カトリック当局も一時は禁止したという「聖月曜日」のトラピチェ湧水地点におけるキリストの聖衣の洗浄儀礼と、聖水曜日の教会内で行われる暗闇の儀式である。

当該地域がグアテマラと国境を接し、植民地時代からカトリック儀礼に伴う聖像・聖画・興・聖棺などの注文・修理にはグアテマラの旧都アンティグア市と接触・交渉してきた歴史があり、現代でもその伝統が継承されている。当地は植民地時代より、1841年のグアテマラ分離独立するまでの三世紀に渡りグアテマラ総督府のもとに統治されてきた歴史を持っている。前スペイン期には「国境なし」、地続きでナワ文化やマヤ文化を担う民族集団が移動・居住していた。すなわち、グアテマラの先住民文化とスペイン植民地時代文化の影響を多く受容してきた歴史を持つ。第四節では、聖週間儀礼の行程を報告した。

筆者は1992年より、グアテマラ南西部高地のツトゥヒル・マヤ語共同体であるサンティアゴ・アティトランで民族学調査を継続してきたが、第4章で述べたように、聖週間の月曜日にマシモンと呼ばれるマヤの祖先神の衣服を、聖十字架の男性コフラデーが、満月の夜にアティトラン湖畔で洗浄する儀礼を保持している。通常、洗濯は女性により昼間になされるが、聖週間という非日常の時間には聖性を増幅するために、男性によって、それも夜間に行われるという逆転現象が見られる(拙著1998・第四章・聖週間儀礼の過程)。チャ

ルチュアパ市では夜間ではないものの、男性コフラーデが、わざわざバテアという女性性の意味のある洗濯盤を頭上に載せて行進する。頭上に載せて運搬するのも女性性の表現であるから、非日常の時間における「逆転」が見られる。聖像の聖衣服の洗浄儀礼はこのツトゥヒル・マヤ村落に限定せずとも、メキシコ南部のチアパス高地のツォツィル・ツェルタル・マヤ村落においても観察される。1994年、スペインのバリャドリーの聖週間儀礼調査に従事したが、このような洗浄儀礼を観察することはなかったから、こうした儀礼はメソアメリカ先住民文化のコンテクストで解釈できよう。

次に、聖土曜日の暗闇の儀式もメソアメリカ先住民文化のコンテクストで考えたほうが理屈にあうのではないか。前述サンティアゴ・アティトラン村では聖土曜日の深夜に、聖十字架のコフラーディアでマシモン仮面像の構成儀礼が宗教的職能者らによって行われる。この祖先神の誕生儀礼がなされている間、窓・扉をとじ絶対的暗闇を創造し、外からの入室も内からの外出も禁止される(拙著・第四章参照)。一方、筆者は1988年から隔年でユカタン半島東部の反乱マヤ地域で「語る十字架」の祝祭儀礼調査についてきた。ここでは、八月大祭五日に宗教的役職者たちの晩餐会が始まると、役職者用宿舎入り口には衛兵が立ち、入り口は閉ざされ入室・外室が禁止される(拙著・第九章参照)。チャルチュアパの教会でも扉・窓が閉ざされ一瞬とはいえ、絶対的暗闇が演出される。ただし、聖書の解釈のもとで。また、チャルチュアパの聖土曜日深夜にかけて行われる「新火の儀礼」も、前スペイン期の一年が開始される初火の儀礼と解釈されるのではないのか。

儀礼要素の些細な類似点を列挙して、先住民の伝統が保持されていると解釈しているのだが、エル・サルバドルでは「大虐殺」以来、言語と民族衣装といういわば先住民民族集団のアイデンティティを根こそぎにして、メスティソ国民文化を形成してきた筈であった。しかし、メキシコの如く独立と革命を経て、カルデナス大統領期に新しいメスティソ・国民文化を形成したわけでもなく、民族の象徴をエルナン・コルテスからアステカ帝国最後の皇帝クワテモックに替えてインディヘニスモ運動を高揚させることもなかった。

先住民村落とされているサント・ドミンゴ・デ・グスマンの聖週間儀礼に以上の儀礼的要素が観察されなかった(この調査報告に関しては別の機会に発表予定)のに、メスティソ社会とされているチャルチュアパ市にこれらの要素が残存している現象をどう、解釈したらよいのだろうか。

五月三日の聖十字架の祝日に、私たち調査隊の宿舎中庭にアンヘル氏が *jiote* の青枝で作った十字架をたて、その前に果実・花の供物をし、跪いて祈祷を捧げた。チャルチュアパ市の市場界限のみならず、エル・サルバドルの聖十字架祭には、この枝の十字架をたてる慣習がある。この日、乾季が終わり滝のような降雨がみられ、雨季が開始した(1999年)。カトリック教義とは異なる聖十字架の儀礼が地表に顕われた。隣国グアテマラではマヤ共同体のアイデンティティを最も鼓舞する言語と民族衣装を死守し、内戦後は先住民文化復興運動が地殻変動のごとく周辺国に波及している。エル・サルバドルでは当局が、後進性の証とばかり、この二大要素(言語と民族服)を抹消したにもかかわらず、メスティソ(混血)

という「仮面」を剥がすとすぐその下には脈々と受け継がれてきたインディヘナ文化が露見する。

エル・サルバドルのホヤ・デ・セレン遺跡地帯の半農民共同体の社会文化的動態を調査研究発表したカルロス・ララ氏との私信によれば、当該農民の生活様式はあまりインディヘナと相違がないという見解を述べていた²⁴。今後、エル・サルバドルの祝祭儀礼文化をメソアメリカ地域全体の枠組みの中で把握すべく調査研究にあたりたい。隣国グアテマラでは、キチュ・マヤ先住民女性 R・メンチュウ氏がノーベル平和賞を受賞した。それ以来、先住民文化は後進性を示す恥の文化ではなく、むしろ、「観光客も呼べる」民族の個性なのだという新たな認識が生まれた。

謝辞： 調査にあたり、エルサルバドル文化庁 Pr. Roberto Galicia 長官、文化遺産局 Arq. Maria Isaura Arauz 局長、調査団長・故大井邦明・京都外国語大学教授の諸氏には、全面的な協力をいただき感謝している。また、チャルチュアパ市の Alcalde Mario Ramos 市長、使徒サンティアゴ教会の主任司祭 Parroco Lucas España 神父、聖十字架と嘆きのマリア両コフラディアの団員 Los Cofrades de Santa Cruz y de Dolores、わけでも Sr. José Manuel Castro 氏、小学校教諭 Srta. A. Zoila Ruiz Chafuya 嬢、信者代表ともいえる 95 歳の信心深い Doña. Dolores 夫人には聖週間について指導を受けることが多く、文中に固有名詞で登場している。また、Universidad Tecnológica de El Salvador, Carrera de Arqueología の Sres. Estudiantes: Marlon Escamilla, Herberto Erquicia の両学生には 1998 年度および 1999 年度と、二回にわたり調査協力を得た。同時に考古学研究者・柴田音潮氏には調査中、全面的協力を得た。深く感謝している。

*本章・冒頭地図 2 点の出典。

図 5-1. 出典：エルサルバドルの農地改革 Hall and Brignoli, 2003., p. 268.

Carolyn Hall and Hector Perez Brignoli, 作図 John V. Cotter.

Historical Atlas of Central America, University of Oklahoma Press, Norman, 2003, p.268.

図 5-2. 出典：「チャルチュアパ遺跡と考古学調査」『チャルチュアパ』京都外国語大学、大井邦明, 2000, p.19。

- 1 Arnold Guzman, “*Diccionario Geografico de El Salvador*”, Tomo I, 1985:189-193; Fonseca, 1996: 67-69.
- 2 Fonseca, 1996: 68-69, 131-138, 146, 192, 248.
- 3 Fonseca, 1996: 248-250, 258, 268-270.
- 4 Mac Chapin, ‘La población indigena de El Salvador’ “*Mesoamérica*” #21, 1991: 1-40 ; 同著者の ‘The 500,000 Invisible Indians of El Salvador’ “*Cultural Survival Quarterly*” 13-(3), 1989:11-16 の内容と重複する部分があるが、前者のほうがより包括的かつ詳細な情報が記載されているので、前者を引用要約した。
- 5 Fonseca op.cit.: 68-69, 131-138, 146, 192, 248.

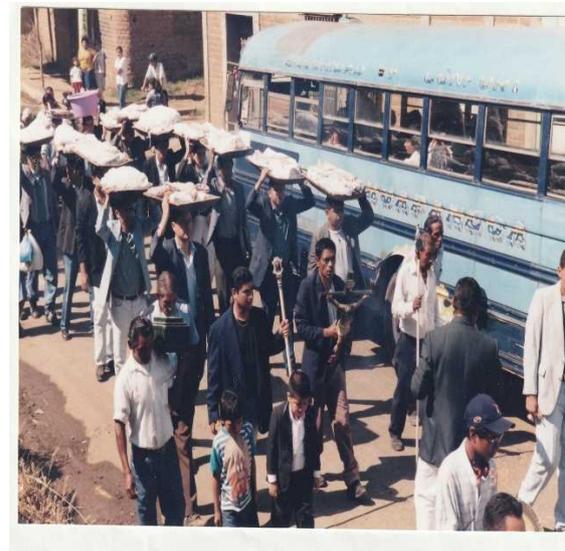
-
- 6 Chapin, Mac, ‘La población indígena de El Salvador’ “*Mesoamérica*” #21, 1991: 1-40 ; 同著者の ‘The 500,000 Invisible Indians of El Salvador’, *Cultural Survival Quarterly*, 13-(3), 1989:11-16 の内容と重複する部分があるが、前者のほうがより包括的にして詳細な情報が記載されているので、前者を引用要約した。
 - 7 Chapin, Mac, 1991: 7-9; Browning, 1998: 266-267.
 - 8 Chapin, Mac, 1991: 20-23.
 - 9 Chapin, Mac, 1991: 23-27.
 - 10 Chapin, Mac, 1991: 28-31.
 - 11 Chapin, Mac, 1991: 31-32.
 - 12 Chapin, Mac, 1991: 35.
 - 13 Chapin, Mac, 1991: 31-37.
 - 14 Chapin, Mac, 1991: 37-39.
 - 15 Chapin, Mac, 1991: 39.
 - 16 *Diccionario Geográfico de El Salvador*, Tomo I, 1985:189-192.
 - 17 ピピル語集団については、William R.Fowler,Jr. ‘Ethnohistoric Sources on the Pipil-Nicarao of Central America: A Critical Analysis’ *Ethnohistory*, 32(1):37-62 において中米のピピル・ニカラオ語集団の移動・人口・経済・社会的組織など民族史学の視点から言及されている。ピピルに関する先駆的論考としては、敦賀公子、「マヤ南部地域におけるナワ系集団ピピル領域の文献学的研究」『COSMICA』XXV, 1996、京都外国語大学、「ノノアルカー古代メソアメリカにおける集団の実像について一」『COSMICA』XXVI, 1998、京都外国語大学が参考になる。
Mac Chapin op.cit.: 5.
 - 18 Montes, 1977: 62-63.
 - 19 Mac Chapin op.cit.: 5-7.
 - 20 *Diccionario Geográfico de El Salvador*, Tomo I, 1985: 191-192.
 - 21 *Diccionario Geográfico de El Salvador*, Tomo I, 1985: 191-192.
Contreras, 1998: 107-112.
 - 22 *Diccionario Geográfico de El Salvador*, Tomo I, 1985: 190-191.
 - 23 Municipalid de Chalchuapa, 1998.
 - 24 Lara Martinez, Carlos Benjamin 氏との私信によるが、彼の以下の研究発表が理解を助ける。Lara Martinez, Carlos Benjamin, “Joya de Ceren, La dinámica sociocultural de una comunidad semi-campesina de El Salvador.” *CONCULTURA*, San Salvador.



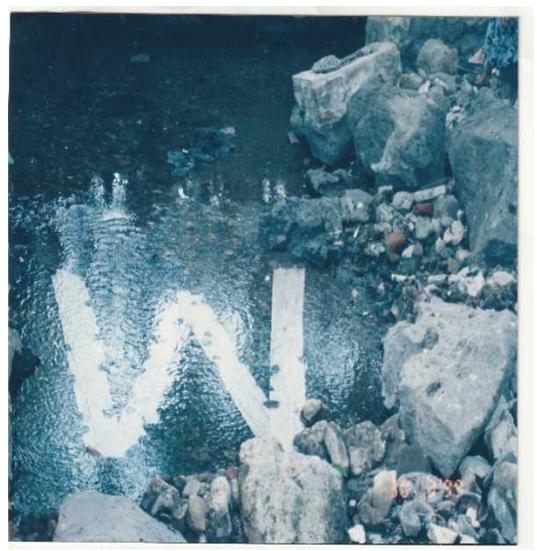
1. 聖週間の始まり 棕櫚の日曜日



2. 聖月曜日 キリストの白衣 (洗浄前)



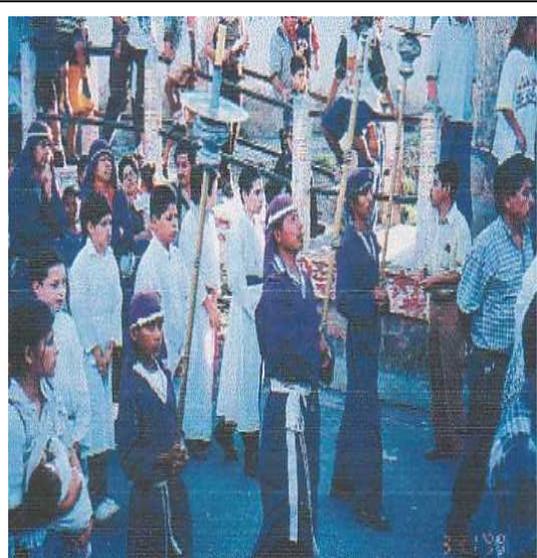
3. 聖月曜日, 聖十字架団員キリスト聖衣を運ぶ



4. 聖月曜日, 川床に聖衣がW/M型に敷かれる



5. 聖月曜日, 道行のキリスト他3像の出会い



6. 聖火曜日 受難の紫色、哀悼の表現



3. 手前の燭台持ち女性はキリストに背を向けないように後ろ向きに歩く。方向指示役の笑顔女性と交代で進む。母親の快復を祈願。



8. 聖水曜日、左、マグダラのマリア、嘆きのマリア、聖フアンの3像輿を担ぐ女性会員。



写真 20-11

4. 聖木曜日、ルカス神父がキリストに倣い、十二使徒役の男性会員への「洗足の儀」。



5. 聖金曜日、キリストの受難に倣い素足で重い棺を担ぎ4時間かけて市内進む。



6. 聖金曜日



11. 聖金曜日 夜間 少年7人、御言葉行列



12. 栄光の土曜日。1999年選挙戦勝利の国民
共和党の花絨毯。世相が反映する風景。



13. 栄光の土曜日。1998年選挙戦勝利のフ
アブランド・マルティ解放戦線の花絨毯

撮影協力者： エルサルバドル工科大学・考古学専攻生： マルロン・エスカミ撮影 1, 2；
ヘルベルト撮影： 3, 5, 11； アントニオ撮影： 8.；桜井撮影： 4, 6, 7, 9, (10?) 12, 13。
写真撮影、1998年、1999年。チャルチュアパ市にて。

終章 まとめと考察

序章では、まず信徒会に関する研究動向を河原・池上両者編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』に、スペインの兄弟会に関しては主に関哲行論考に依拠して述べた。つづく第一章では、スペインによる中米の武力的征服、第二章で精神的征服とも呼べる宣教について概略した。

フィールド調査の機会を得て、その結果を第三章でスペイン、第四章でグアテマラ、第五章でエルサルバドルの聖週間（復活祭）儀礼に参与観察し、その結果を報告した。

かつて東のエルサレムへの巡礼熱が、聖ヤコブの「遺骸」が流れ着いたとされるスペイン西北部サンティアゴ・デ・コンポステラ教会詣でに替わり、巡礼道に沿って巡礼者救護のための施療院が設立され、兄弟会へと発展したと記した。当初、スペインにおけるコフラディアの中心的な役割はグレミオの守護聖人（像）の世話をすることにあっただが、時間的経過により両者の役割は変化し、兄弟会は聖像の世話のほかに、会員の葬式や守護聖人の祭日を取りしきるようになった。スペインでは16世紀から17世紀にかけて盛んとなった。第三章でスペイン北西部人口約33万人のバジャドリー市の聖週間儀礼に参与観察し（1994年）、その結果を初めて本稿に報告している。正統派スタイルの聖週間儀礼を示し、後に続く「変形」二例への比較基準とした。すなわち、第四章では視点を被征服者の地に転じ、中米グアテマラの人口約3万人余の先住民村落、第五章でスペイン人と先住民の混血人口約7.5万人の街で民族学的調査を実施し（1991年-21世紀）、その報告をした。

一. 序章・冒頭の疑問点に関して

- ① 現代、中米では兄弟会が聖週間（復活祭）祭礼の主催者として活動するが、それ以前ではどのような役割を果たしていたのであろうか。
- ② 兄弟会は過去において何故、中米の先住民村落レベルで爆発的に受容され、その数を増やしたのであろうか。
- ③ 旧大陸からもたらされた疫病は免疫の無い先住民人口をほぼ十分の一にまで減少させたという。疫病蔓延と兄弟会は何らかの関係があるのだろうか。

上記の疑問点は、民族学（文化人類学）が得意とする共時的調査から自然発生的に浮上した。ここに、スペインの兄弟会に関する通時的（歴史的）視点にたつルメウ・デ・アルマス（Rumeu de Armas, Antonio, 1981）著『スペインにおける社会的救済史』（*Historia de la Previsión Social de España*）という史料にめぐり合うことで、人類学が得意とする象徴論「儀礼、象徴、神話」だけでは納得できない点が解消された¹。

どういうことであろうか。上記の疑問②と③は、以下で示す Lovell と Lutz 共著『人口統計と帝政時代（*Demografía e imperio*）』に掲載されているグアテマラにおける地方別人口経過を示す表1から、解答を得た² 筆者の調査地方アティトラン（ツトゥヒル語圏）の人

口は接触前後の 1520 年に 72,000 人と概算された。ところがスペイン征服軍との接触後、わずか 5 年後に 5 万人を割り、30 年後に 5,600 人、約半世紀後には 5,300 人に減少した。すさまじいまでの人口減少の原因は旧大陸からの疫病が原因であった。最初に猛威をふるったのはスペインからもちこまれた天然痘であった。飛沫感染により発症する天然痘は感染率や致死率が高く、先住民は高熱と全身に発生する発疹に苦しみ死んだ。その後 1530 年から 31 年にかけて麻疹、1546 年にチフス、1558 年から翌年にかけてインフルエンザ、さらに肺炎やおたふく風邪などのヨーロッパの感染症が追い打ちをかけた³。

歴史家オレリャーナは、アティトラン村落でも兄弟会が急増したと記す。近代国民国家成立後の厚生省の役割に近いことを、兄弟会が担ったと考えられる。寡婦、寡夫、孤児、病人の急増は、互助組織の機能をもつ兄弟会の設立が歓迎された。兄弟会は会員を救助し弔ったのである。当該地方では黒人奴隷が連れ込まれることはなかったが、16～17世紀にアフリカ大陸に由来するマラリアが流入し、1648 年にもたらされた黄熱病は先住民人口のさらなる減少をもたらした⁴。

グアテマラ（1520－1575）地方別、接触時以後の人口減少比較

地域	1520 年	1525 年	1550 年	1575 年	出典
北西部	260,000	150,000	73,000	47,000	1
ベラパス	208,000		52,000		2
北東部	17,500			524	3
南西部	33,000				4
トトニカパン	105,000	75,000		13,250	5
中南部 キチェ	823,000				6
中南部 カクチケル	250,000				7
中東部 ポコマム	58,000			14,500	8
中東部 チョルティ	120,000				9
アティトラン	72,000	48,000	5,600	5,300	10
ツトゥヒル					
南東部 ピピル	100,000				11

出典： Lovell and Lutz, *Demografia e imperio*, 2001.

二. グアテマラ高地における兄弟会

征服という混乱時期（1524-40 年）が過ぎると、政府と教会は治世円滑のため先住民集落（レドゥクシオン）政策とキリスト教の布教を開始した。グアテマラでは布教活動の初期において、コブラディア制度はなかった。新大陸には 1540 年前まで神父の数が極めて少なく、布教と洗礼だけでも多忙であった。1540 年になると、新たな神父 5 人が到着し僻地にも修道院が設立された。布教初期においてツツヒル地方では、散発的に放浪修道士を迎えただけであった。旧主邑チアは地理的にアクセスが困難なチティナミ (Chuitinamit) 山頂に位置し、

現サンティアゴ・アティトラン村から1キロの距離にあった。1547年に二人のフランシスコ会士が粗末な小教会を建て、スペインの都市計画に則して住民を強制移動させた。植民集落の守護聖人は聖ヤコブ、(サンティアゴ)とされた。Pasinskiによれば、グアテマラでは聖ヤコブを守護聖人として祀る街は、旧都アンティグアをはじめ、「黒いキリスト」参拝巡礼で有名なエスキブラス市、チマルテナンゴ市など15に上るといふ⁵。

三 聖書とマヤ神話

聖週間儀礼をテーマに、異なるエスニック三集団のフィールド調査報告をした。聖週間儀礼の主催者は誰か。三共同体でキリストの死と復活はどのように解釈され演劇化されたか。この二点に着目すると、スペイン本国の聖週間儀礼が聖書に基づき理解され表現された正統派とすれば、マヤ村落における聖週間儀礼には、正統派から逸脱した「異教的」儀礼が演出されている。マシモン仮面像の解体死と蘇り。満月の夜、湖水における男性役職者による仮面像聖衣の洗浄。湖水で浄化された聖衣は麻紐丸形網袋に納められ、聖十字架の兄弟会に戻ってくる。カトリック司祭ではなくマヤの宗教職能者テリネルは聖月曜日仮面像を解体し、翌火曜日に暗闇を演出した聖十字架の兄弟会宅でマヤの宗教職能者テリネルにより再生された。聖水曜日、テリネルの肩に担がれたマシモン仮面像は教会広場の礼拝堂内の緑柱に括り付けられた。村落民群衆はマシモン仮面像の再生に湧く。一方、カトリック教会では聖木曜日の最後の晩餐(児童が十二使徒を演じる)、聖金曜日のキリスト磔刑に続き、磔から降ろされたキリストの寝棺行列が成年男性により行われる。聖書の「台本」に忠実なセレモニーが滞りなく進められる。広場を埋める群衆は寝棺の後ろにけたたましく続くマシモン仮面像を不浄なる出現者とはみない。やんやと喝采して迎える。粛々と進む寝棺行列から、マシモン仮面像は突如、離れ、聖十字架の祭主宅へと戻る。マヤの祖先神マムと考えられるマシモン仮面像には以下の特徴がある。

- 1) マシモン像の「死と復活」劇がキリストの「死と復活」に擬えられている。
- 2) 聖金曜日、マシモン仮面像は祝祭の場と時間をかりて道化師(トリックスター)として登場し、寝棺の後ろに続きカトリック正統派の宗教的権威を揶揄する。広場を満たす村人はマシモンの「活躍」に期待し注目する。
- 3) マシモン儀礼の中心的期間はマヤ暦の「失われた五日間」に相当する。
- 4) 「包み」にはマヤ神話に基づく象徴的意味がある。
- 5) キリスト教徒には自殺は許されない。キリストの受難を悲しむ聖母が「自殺」するためナイフを胸に抱く。マヤ神話において女神イシュ・チェルは最高神格イツァムナー神(文字の発明者、学芸と科学の守護神)の妻であり、織物・薬・出産・自殺をつかさどる月の女神である⁶。

このような視点からみれば、カトリック祭事暦の中にマシモン儀礼が特別な「五日間」として埋め込まれて祭儀が執行されていることが明らかだ。教会における正統派復活祭儀礼と同時に、一方でマヤ神話に基づくマシモン祖先神の復活が、聖十字架と聖フアンの兄弟会

の家で再現された。

一方、混血の民、チャルチュアパ市では、スペインの伝統的な復活祭を示した。兄弟会の制服（三角錐帽子にマント）をまとい、スペインの聖週間儀礼（聖書に）忠実な再現をしたが、正統派とは異なる儀礼的要素が一部演出されている。キリストの聖衣を男性会員が湧水地点まで運ぶ情景は「正統派」聖週間のシナリオからずれている。本来、洗濯は女性の仕事で、頭上に物を載せて運ぶ姿は女性性を示している。ところが、男性会員が頭上にバテアと呼ばれる洗濯板を載せ、湧水地点まで運ぶ。男女あべこべのパフォーマンスは非日常の儀礼シーンを見せる。さらに、川床に白布聖衣で描かれた文字はWかMか？スペイン語にはWで始まる語は少ない。南米民族学研究者・加藤隆浩師から、それは「マリアのMではないか」という示唆をいただいた。マヤの女神は湖水、川、月を司る。いきなり、マヤ神話の女神が出現したのか。エルサルバドルでは近代化・後進性の対象として先住民的表象が先住民の殲滅・虐殺を対象となった。そのような歴史を持つ住民は、表面的には西欧化し土着的信仰形態を忌避したが、この光景は何を物語るのであろうか。水と関係の深い土着の女神信仰が突如とし表出される。

四. カトリック教会最奥部・大型飾り祭壇に秘められたコード



図1. 教会内の主祭壇図(4-) 出典：Christenson, Allen J., 2001, pp.7-9.

本稿第四章でも述べたように、教会内主祭壇に関しては、美術史専門家 Allen J. Christeson の解釈が興味深い。筆者は幾度となく当大型飾り祭壇を目にしたが、クリステンサン著作を読むまで気づかなかった。すなわち、教会堂内最奥部に設置された木彫・飾り祭壇は土地の彫刻師兄弟による作品で、そこには数々の秘められたコードがあるという。壁面すべてを覆う大型の飾り祭壇は、肉眼で注視するのは主に第一段部のカトリック諸聖人像（図1 Q. R. S. T. U.）であり、人の背丈より上段にいくに従い香煙や暗い照明で彫刻の細部にまで目が行き届かない。彼の解釈によれば、頂点に位置する十字架彫刻の細部モチーフ A は世界樹かつトウモロコシ（マヤ人の主食）、H はジャガーの歯、祭壇両脇の十字架杖を持つ姿勢の I（両者）は聖山を登るコフラーデ、中央 L は祖先神マム、O と P は蛇紋柱とトウモロコシ神モチーフであると解説する。そして、正面中央の人間サイズの聖像については以下である。Q 「悲しみの聖母」、R（通称・間抜けな）聖フアン、主祭壇中央のひと際目立つ位置の S が大サンティアゴ、隣の T は小サンティアゴ、U はドラゴンのマリア像であると。その下部 V～Z までの5つの木彫作品は、左 V からシャーマンによる占い、W 鹿の踊り、X アティトラン人最後の晩餐風景、Y 聖木曜日、Z 死者の日を表現しているのだと。クリステンサンによると、当地は 1960 年、1976 年と大地震に見舞われた。教会内の主祭壇も破壊され、教区司祭米国人フランシスコ・ルーサー神父は当地の若い彫刻師兄弟に修理を依頼した。彼らは五年をかけて前掲図・主祭壇を完成させた⁷。

さて、美術史家クリステンサンによる説明から、私が想起したのは、以下に述べるフランス人思想家ミシェル・デ・セルトー著『日常の実践のポイエティック』である。彼はスペインの植民地政策に対し、先住民の「弱者の技」を以下のように述べる。「スペインはインディオの植民地化に成功したが、実はその「成功」が両義的であったことが明らかになってきている。即ち、インディオたちはおし付けられた儀礼行為や法の表象に従い、時には進んでそれをうけいれながら、征服者が狙っていたものとは別のものを作り（生産）していたのだ。それらを忌避しつつ、それらをくつがえしていたのである。彼らは外面的に「同化」する植民地のなかで他者でとどまっていた。つまり支配体制を利用する彼らのやりかたが功を奏していたのだ。支配体制を物理的に拒否したのではなく、支配体制に従いつつ免れてきたのだ。その差異の力は「消費」という手続きのなかで維持された」と⁸。

セルトーの意味する「消費と形容される生産」とは、「合理化され、拡張主義的で、中央集権的で、見世物のように騒々しい生産に対して、まるで別のタイプのもうひとつの生産が対抗している。すなわち「消費」と形容される生産である。この「生産」の特徴は狡知にたけ、機を見て風のように姿を消し、密漁が得意で闇にもぐり、いつも呟いている。なかば不可視の姿で固有の生産物で自分をあらわすことはめったになく、自分に押し付けられたものを利用する技をとおして姿をあらわす。それは弱者の技なのだ。」とそしてこのような行為に対してはすでに民族史家ワシュテルが『敗者の想像力』で著している。多くの人類学者が民俗学的カトリシズムと呼ぶ世界観に対応するものである⁹。

中近世スペインの兄弟会は閉鎖的兄弟会で、介護と葬儀の相互扶助を実践していた。近世になると、サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂への巡礼が盛んとなりカトリック両王と関係の深いサンティアゴ施療院兄弟団が結成された。職業、身分、性別、出身地を問わず、カトリック教徒であれば、所定金額を納めることで会員になれた。サンティアゴの祝日（7月25日）には総会が開催され、宗教行列がされ、会員が施療院で亡くなれば、市内在住の全会員が葬儀に参列する義務を負った。いわば、近代国民国家成立後の厚生省のような機能を負ったといえよう。なお、「儀礼と神話」に関しては、拙著『祝祭の民族誌』第5章 コスタへの供物採集巡礼で簡潔に記した¹⁰。

スペインによる中米グアテマラの征服と植民を通じ、先住民村落の支配策の一環として、コフラディア（兄弟会）の導入・設立がなされ、爆発的な浸透をみせたという現象に筆者は着目した。ツトゥヒル・マヤ村落における民族学的調査（共時的観点）に、歴史的視点（通時的観点）を重ね考察すると、疫病の蔓延で人口減少化がすすみ兄弟会の設立が村落内の孤児、寡夫・婦、埋葬など厚生福祉的役割を果たした。兄弟会は祝祭儀礼の中心的役割を果たし、マヤ民族アイデンティティを強化すると考える。

大阪万博会場の跡地に国立民族学博物館が建設され、研究者陣が一般市民をも対象に連続して講演会を開催した。メキシコ南部オアハカ地域の民族誌を著した黒田悦子先生、アフリカを専門地域にフィールド調査をした山口昌男、川田順三両者が民族誌を著し、米国や西欧から著名な人類学者を招聘し、関連書があいついで出版された。青木保師は儀礼や神話の象徴性を語り、メキシコ南部チアパス地方におけるマヤ村落はハーバード大学により徹底的に民族学調査が行われた。民族学研究の隆盛時代が来ていた。筆者は魅了され37歳で文化人類学の研究科に進学し、現地調査の機会にも恵まれた。

しかし、本稿作成にあたり、兄弟会のテーマを歴史学書で調べる必要性に迫られ、スペインの歴史家 Rumeu de Armas 著『スペインにおける社会的救済措置』を入手した。中近世から兄弟会には互助システムがあり、兄弟の死を弔い、遺族を助ける互助組織であったこと知った。通時的視点（歴史的視点）から兄弟会について考察する重要性を改めて認識した。グアテマラ人研究者 Flavio Rojas Lima は、兄弟会が先住民集団にとって外部世界に対する「文化的要塞」として機能すると主張する。納得した。歴史を創りだしてゆく人間の営為には「書かれたもの」として残らないものが多い。旧世代(1960年代)に学んだ私たちは、西欧中心的視点、文字資史料にたつ「世界史」が絶対的と学習した記憶がある。そこに、21世紀初頭、Mathew Restall をはじめとする北米の新文献学派²が先住民の残したクアウケチョラン画布征服図(第一章既述)を新たな史料として扱い、征服者と被征服者の両視点を照合させることで、より正確な世界史像を描いていることに気づかされた。

本稿では、そうした長い時間的視点で世界史を学びなおす貴重な機会をいただいたと、改めて感謝している。Restall の精力的な研究成果が私を待っている。

-
- 1 Rumeu de Armas, Antonio, *Historia de la Prevision Social de España*, Ediciones “El Abrir”, S. A., Barcelona, 19981.
 - 2 Lovell, W. George and Lutz, Christopher H. *Demografia Social de Espana*, Ediciones “El Abrir”, S.A., Barcelona, 1981.
 - 3 月の女神「イシュ・チェル」、コウ、マイケル・D., 『古代マヤ文明』創元社、p. 240, 247。
 - 4 Clisteson, Allen J., *Art and Society in a Highland Maya Community*.
特に第 8 章「中央飾り祭壇の象徴的モチーフ」には詳細な説明がされている。
 - 5 セルトー、ミシェル『日常実践のポイエティック』国文社、2002、p.93,102.
 - 6 ワシュテル、N., 『敗者の想像力』岩波書店、1984.
 - 7 Rojas Lima, Flavio, *La Cofradia*, Litografias Modernas, 1988.
 - 8 James Rockhart は新文献学的歴史学を確立し、UCLA の博士課程で Mathew Restall をはじめとする学生に、メキシコ植民地時代の先住民史料を主体とした歴史研究の基盤を築いた。Mathew Restall は”The Americas in the age of indigenous empires,”と題した論考を *The Constructruction of a Global World, 1400-1800 CE*, The Cambridge World History V. 6.1 ; 2017, (pp.210-242) に寄稿している。
 - 9 井上幸孝氏によれば、「先住民史料」といえば、先スペイン期社会の解明という意味合いが強かった。しかし、20 世紀半ばにレオン＝ポルティージャが「敗者の視点」を提示し、メキシコ征服史の見直しを唱え、征服以降の先住民を主体にした歴史研究が意識されていく。ロックハートが先鞭をつけた先住民側による歴史の再解釈という観点による分析が進んだ。その成果として Restall の一連の論考が出版された。井上幸貴「植民地時代メキシコ中央部の先住民村落における「権原証書」の作成と使用」吉江貴文編『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』悠書館 2019、pp.255-274.
 - 10 桜井三枝子、『祝祭の民族誌』全国日本学士会、1998 年、pp.106-133。

参考文献

新聞史料

El Note de Castilla, 1994.

El Mundo, 1994.

Internet

www.google.com/google-chrome/download_

2023年7月14日

Browse Castilla y Leon, Valladolid Mapa

Ciudad de la Region, net. 2023/07/09

Guia de las Cofradías Valladoli

<https://www.valladolidcofrade.com>

2023年7月20日

WikipediA

Cofradías peitenciales históricas de Valladolid

2023年7月12日

第一次史料

Cortez y Larraz, Pedro

1958 “Descripcion Geogrdfico Moral de la Diocesis de Guatemala, 1768-1770.”

Biblioteca “Guatemala”, de la Sociedad de Geograía e Historia de Guatemala, Vol. XX, Tipografia Nacional de Guatemala 1958. Tomo II.

Fuentes y Guzman, Francisco Antonio de

1969-72 *La Recordación Florida*, Tomo II, Impreso en la Tipografia Nacional,

Guatemala, C.A.,Biblioteca “Goathemala”, Sociedad de Geografía e Historia, Volumen VII.

Gage, Thomas

1969 *Thomas Gage's travels in the New World*. Edited by J. Eric S. Thompson.

Remesal, Antonio de

1932 *Historia General de indias occidentales, y particular de gobernacion de*

Chiapa y Guatemala,

欧語文献

Aguilar Zepeda, Hugo Alcides

1995 Los Artesanos de la Jarcia en Cacaopera, Departamento de Morazan, Situación Socio-Cultural y Económica, Patronato Pro—patrimonio Cultural, San Salvador.

- Amaya Amaya, Miguel Angel
 1985 "Historias de Cacaopera." Ministerio de Educación, Dirección de Publicaciones, San Salvador.
- Arnold Guzman, Pablo
 1985 Diccionario Geográfico de El Salvador, Tomo I (A-K)." Ministerio de Obras Públicas, Instituto Geográfico Nacional, San Salvador: 189-192.
- Asselbergs, Florine
 2004 *Conquered Conquistadors*, University Press of Colorado.
 Ayuntamiento de Valladolid, *Cofradía de El Santo Sepulcro*, Valladolid,
- Barberena, Santiago I.
 1998 "Monografías Departamentales." Colección Biblioteca Popular, Vol.46, Consejo Nacional para Cultura y el Arte.
- Bill G. Douglas,
 1969 *Illness and Curing in Santiago Atitlan, A Tzutuhil-Maya Community in the Southwestern Highlands of Guatemala.*
- Browning, David
 1998 "El Salvador, La tierra y hombre." Colección Biblioteca Popular Vol.49, Consejo Nacional para la Cultura y el Arte.
- Carlsen, Robert S.
 1992 *Of Bullets, Bibles, and Bokunabs, What in the World is going on in antiago Atitlan?*, Phd.
 1993 *Discontinuous Warps: Textile Production and Ethnicity in Contemporary Highland Guatemala*, in *Crafts in the World Market*, June Nash (ed.) State University of New York Press.
- Ciudad Real, Antonio de
 1993 *Tratado curioso y docto de las grandezas de la Nueva España*, UNAM.
 Chapin, Mac
 1989 'The 50,000 Invisible Indians of El Salvador.' in *Cultural Survival Quarterly*,
 1990 'La población indígena de El Salvador.' En *Mesoamérica* , #21.
- Cline, Howard F.
 1972b *Introductory notes territorial divisions of Middle America*. In Howard F. Cline, ed. *Guide to ethnohistorical sources*. Handbook of Middle American Indians, 12: 17-62, Austin: University of Texas Press.
- Contreras R., J.Daniel
 1998 "Breve historia de Guatemala." Editorial Piedra y Santa.
 Cristenson, Allen J.
 2001 *Art and Society in a Highland Maya Community*
 University of Texas Press, Austin.
 Douglas, William G.
 1968 *Santiago Atitlán*, in *Los pueblos del lago de Atitlán*
 Sol Tax (ed.), Seminario de Integración Social Guatemalteca No.23

- Douglas, Bill G.
 1969 Illness and Curing in Santiago Atitlan, A Tzutuhil-Maya Community in the Southwestern Highlands of Guatemala, Ph. D.
- Fischer, Edward Frederick
 1996 *The Pan-Maya Movement in Global and Local Context*, Ph.D.
- Fonceca, Elizabeth
 1996 “Centroamérica: Su Historia”, FLACSO, Costa Rica.
- Fowler, William R.
 1985 ‘Ethnohistoric sources on the Pipil-Nicarao of Central America: A Critical Analysis’ in *Ethnohistory*, #32-(1):37-62.
- García Ayuardo, Clara y Antonio Rubial García
 2018 Iglesia y religión, Herramientas para la historia, Fondo de Cultura Económica, Diudad de México.
 García Añoveros, Jesūs María
 1994 La Iglesia en el Reino de Guatemala, *Historia General de Guatemala*, Asociación de Amigos del País, pp.155-182.
- García Ayuardo, Clara y Antonio Rubial García,
 2018 *Iglesia y Religión: La Nueva 2018 España*, Fondo de Cultura Económica, Ciudad de México.
- Hall, Carolyn and Hector Perez Brignoli
 2003 *Historical Atlas of Central America*, University of Oklahoma Press, Norman.
- Jones, Oakah L., Jr.
 1994 *Guatemala in the Spanish Colonial Period*, University of Oklahoma Press.
- Luján Muñoz, Luis
 1997 El Conjunto Artístico de la Iglesia de Concepción, Sololá en *Informe de las nvestigaciones Etnológicas en el Centro y Sur de Guatemala, 1991-1994*. Museo de Tabaco y Sal, 1997, pp.439-447.
- José Fejardo, Juan
 1993 “Monografía General de Nahulingo.” Patronato Pro-Patrimonio Cultural, San Salvador
 1996 “El Sentimiento religioso de Nahulingo.” Patronato Pro-Patrimonio Cultural, San Salvador
- Lara Martinez, Carlos Benjamin
 1997 “Joya de Ceren, La dinamica sociocultural de una comunidad semi-campesina de El Salvador.” CONACULTURA, San Salvador.
- McBryde, Webster
 1947 *Cultural and Historical Geography of South-western Guatemala*, Institute of Social Anthropology Pub. 4, Washington, The Smithonian Institute.
- MacLeod, Murdo J.
 1984 *Spanish Central America: A Socioeconomic history, 1520-1720*. Berkeley

- and Los Angeles: University of California Press.
- Madigan, Douglas G.
1976 *Santiago Atitlan, Guatemala: A Socio-economic and Demographic History.*
- Martin Gonzalez, Juan José,
n.d. *El Museo Nacional de Escultura de Valladolid*, Editorial Everest.
- Mathew, Laura E.
(2003) 2012 *Memories of Conquest*, The University of North Carolina Press.
- Mathew, Laura E. and Oudijk, Michel R.
2012 *Indian Conquistador*, University of Oklahoma Press.
- McBryde, Webster
1947 *Cultural and Historical Geography of South-western Guatemala*, Institute of Social Anthropology Pub. 4, Washington, The Smithsonian Institute.
- Mendelson, E. Michael
1957 Religion and World-View in Santiago Atitlan, Microfilm Collection of Manuscripts on American Indian Cultural Anthropology No.52, The University of Chicago Library, 1957 Ph. D. Dissertation.
1958a. A Guatemalan Sacred Bundle, *Man*, LVIII-170.
1959 Maximon: An Iconographical Introduction, *Man*, LIX-87, 1959.
1965 *Los Escandalos de Maximón*, Seminario de Integración Social Guatemalteca, No.19.
- Montes, Santiago
1977 *Etnohistoria de El Salvador*, Tomo II. ,Talleres de la Dirección de Publicaciones del Ministerio de Educación, San Salvador.
- Municipalidad de Chalchuapa
1998 “Plan de Acción, para el Desarrollo del Municipio de Chalchuapa.” El Salvador.
Navarrete, Carlos y Elsa Hernandez
1985 Ensayo sobre el sistema de transporte en Atitlan, Guatemala, in *Estudio de Cultura Maya*, XVI, UNAM, 1985.
- O'Brien, Linda L.
1975 Songs of the Face of the Earth: Ancestor Songs of the Tzutuhil-Maya of Santiago Atitlan, Guatemala.
- Orellana, Sandra I.,
1975 “ La introducción del sistema de cofradía en la región del lago Atitlán en los altos de Guatemala,” *America Indígena*, Vol. XXXV, 1975, pp.845-853.
1990 *The Tzutujil Mayas*, University of Okalahoma Press, 1984.
- Pasinski, Tony
1990 The Santos of Guatemala, V. 1, DIDACSA, Guatemala.
- Paul, Lois and Benjamin D. Paul
1975 “ The Maya Midwife as Sacred Specialist: A Guatemalan Case”, in *American Ethnologist* 2(4).

- Prechtel, Martin and Robert Carlsen
 1988 Weaving and Cosmos amongst the Tzutujil Maya of Guatemala, *in RES*.
 Restall, Mathew
 2003 Seven Myths of the Spanish Conquest, Oxford University Press.
 Rumeu de Almas, Antonio, *Historia de la Previsión Social en España*, Ediciones
 1981 “EL ALBIR”, S.A., Barcelona, 1981.
 Sexton, D. James, Ignacio
 1992 *The Diary of a maya Indian of Guatemala*, University of Pennsylvania Press,
 1992.
- Salaverria, Joaquin
 1985 “Chalchuapa” Ministerio de Educacion, San Salvador,
 Tarn, Nathaniel and Martin Prechtel,
 1986 “Constant Inconstancy: The Feminine Principle in Atiteco Mythology,” in
Symbol and Meaning beyond the Closed Community, Gary H. Gossen (ed.),
 State University of New York.
- Torres Servi, Evelia,
 2018 “Conquistadores Tlaxcaltecas”, *Recorriendo el lindero de trazando la frontera*,
 (coordinadores) Tsubasa Okoshi, Julien Machault, A.S., Tepoxtecatl, UNAM.
- Valverde, J. Filgueira,
 1970 *Historia de Compostela*, Ediciones Xerais de Galicia, S. A..

邦語文献

- アコスタ、ホセ・デ
 1966 『新大陸自然文化誌』上下、増田義朗（訳・注）大航海時代叢書IV、岩波書店。
 石井章
 1987 「中米紛争と農業問題」 遅野井茂雄編『冷戦後ラテンアメリカの再編成』アジア
 遅野井茂雄
 1987 「中米・カリブ諸国の政治」 細野昭雄・遅野井茂雄・田中高編『中米・カリブ危機
 の構図』有斐閣選書。
 大越 翼 「マヤ人から見たスペインによる征服と植民地支配」『岩波講座 世界史 14
 2022 南北アメリカ大陸～17世紀』pp. 141-169。
 河原温・池上俊一編
 2014 『ヨーロッパ中近世の兄弟会』東京大学出版会。
 川村信三
 2009 『超領域交流史』上智大学出版。
 木寺康太
 2002 「サンティアゴ・デ・コンポステラ」『岩波キリスト教辞典』。
 ギブソン、チャールズ
 1981 『イパノアメリカ： 植民地時代』（染田秀藤訳）平凡社。
 合田昌史
 2006 『マゼラン』京都大学出版会。

- 2022 「地球を山分けする・・・「世界分割の夢」『宇宙大航海時代』誠文堂新光社。
小林致広
- 1985 『沈黙を越えて——中米地域の先住民運動の展開——』神戸市外国語大学外国語研究所、神戸市外国語大学研究叢書第16号。
- 2007 「偶像崇拜摘発の狂騒と先住民社会：1530年代末、メキシコ中央部の先住民異端審問の分析」神戸市外国語大学『外国学研究』68。
- 桜井三枝子
- 1997 「サンティアゴ・アティトラン村聖週間儀礼に関する民族学調査報告」『グアテマラ中部・南部における民俗学調査報告書』1991-1994, たばこと塩の博物館、pp.239-339.
- 1998 『祝祭の民族誌—マヤ村落見聞録—』単著、全国日本学士会、京都。
- 1999 「ソロラの民族誌 (2)」『大阪経済大学 教養部紀要』第17号、pp.5-38。
- 2000 「エルサルバドル、サンタ・アナ県チャルチュアパ市の聖週間儀礼に関する一考察」大井邦明監修『チャルチュアパ エル・サルバドル総合学術調査報告書』京都外国語大学。
- 2010 『グローバル時代を生きるマヤの人々』単著、明石書店。
- 2017 「グアテマラ総督領期におけるイエズス会の宣教」『グスタボ・アンドラーデ先生追悼論文集編集委員会、pp.39-59。
シャーマン、C.ジェイソン
- 2021 『〈弱者〉の帝国』矢吹啓訳) 中央公論社。
- 関 哲行
- 2006 『スペイン巡礼史』講談社現代新書。
- 2014 「スペイン」河原温・池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』東京大学出版会 pp.313-355。
- ダイヤモンド、ジャレド
- 2012 『銃・病原菌・鉄』上(倉骨彰訳) 草思社文庫。
- チャールズ・ギブソン
- 1981 『イスパノアメリカ：植民地時代』(染田秀藤訳) 平凡社。
- 敦賀公子
- 1996 「マヤ南部地域におけるナワ系集団ピピル領域の文献学的研究」『COSMICA』XXV、京都外国語大学: 113-135.
- 2010 「ノノアルカー古代メソアメリカにおける集団の実像について—」『COSMICA』XXVI、京都外国語大学: 125-140.
- ディアス・デル・カステイリョ、ベルナル(小林一宏訳)
- 1987 『メキシコ征服記』三、大航海時代叢書エクストラ・シリーズ、岩波書店。
S.トンプソン、J.エリック
- 2008 『マヤ文明の興亡』(青山和夫訳) 新評論、2008年。
- 林屋栄吉 訳 A・レシーノス 原訳
- 1997 『マヤ神話 ポポル・ブフ』中公文庫。
- 東丸恭子
- 1983 「西欧中世における救済施設—施療院の系譜」橋口倫介編『西洋中世のキリスト教と

- 社会』。
- ピコン＝サラス、マリアーノ
- 1991 『ラテンアメリカ文化史』(G・アンドラーデ・村江四郎訳) サイマル出版会。
フェデリコ・バルバロ編
- 1967 『毎日のミサ典書』 ドン・ボスコ社。
藤田富雄
- 1982 『ラテンアメリカの宗教』 大明堂。
布野修二
- 2013 『グリッド都市ースペイン植民都市の起源、形成、変容、転生』 京都大学学術
出版会。
ブリッカー、V.R.
- 1986 『カーニバル』(黒田悦子・桜井三枝子訳) 人文書院。
ブルゴス、エリザベス・
- 1987 『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』(高橋早代訳) 新潮社。
細野昭雄
- 1987 「主要国の経済発展過程と経済危機」 『中米・カリブ危機の構図』 有斐閣選書、
マクニール、ウィリアム・H
- 2020 (2007) 『疫病と世界史』(下) (佐々木昭夫訳)、中公文庫。
八杉佳穂
- 1989 「ツトゥヒル語」 『言語学大辞典』 (世界言語編第2巻) 三省堂、pp. 1053-1054。